No.	器種	法量（cm）			遺存度	色調	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高				外面	内面	
49	蓋	10.6		2.9	完	B		指頭による調整→箆磨き	ナデ→箆磨き	
50	鉢	23.0			1／10	E		口唇：LR縄文、山形突起　頸部：２ケ一対の緊縛孔 胴：LR縄文地文→箆直線文　全面赤彩	箆磨き→赤彩	
51	鉢	24.0			1／8	E		口唇：LR縄文　胴部：縄文地文→箆直線文、山形文 全面赤彩	箆磨き→赤彩	
52	坏	14.5	5.1	7.0	3／4	C		口縁：２ケ一対の緊縛孔　胴部：ハケ→箆磨き・赤彩 底部：箆削り？	箆磨き・赤彩	
53	坏	16.0	5.3	6.6	1／4	B		箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
54	坏	14.8			1／3	B		口縁：２ケ一対の緊縛孔、山形突起 胴部：箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
55	高坏		9.9		1／4	B		箆磨き・赤彩	ハケ→ナデ	
13号住居址										
56	台付甕	12.4			1／2	D		口縁：横ナデ　頸：櫛簾状文　胴：コの字重ね物	箆磨き	
19号住居址										
57	壺	17.6			1／3	C		口縁：ハケ→横ナデ　頸：LR縄文地文→箆直線文４ 胴：箆磨き	口縁：ハケ→箆磨き 頸：ナデ	
58	台付甕	14.6			1／4	C		口縁：箆山形文　胴：コの字重ね文	箆磨き	
59	高坏	18.2			1／4	B		口縁：２ケ一対の緊縛孔　胴：ハケ→箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
20号住居址（床面）										
60	壺	18.4			3／4	B		口唇：LR縄文　口縁：LR縄文地文→箆山形文　頸：LR縄文地文→箆沈線区画→箆山形文　ハケ→箆磨き	口縁：箆磨き 頸：箆平滑化→ナデ	床
61	壺	13.8			3／4	C		箆磨き→赤彩　胴：箆複合鋸歯文、沈線区画	口縁：箆磨き 胴：ハケ→ナデ	外面下半、２次焼成 床
62	坏	20.3	5.8	6.9	完	B		口唇：山形突起12　口縁：２ケ一対の緊縛孔１ 胴：箆磨き・赤彩　底部：箆削り？	箆磨き・赤彩	床
63	壺	10.8	6.5	11.3	完	C D		頸：箆直線１　磨耗詳細不明	磨耗詳細不明	床
64	無頸壺	9.9	7.1	9.8	完	D		口縁：２ケ一対の緊縛孔２　胴：箆磨き・赤彩 底部：箆削り→ナデ	ナデ	床
65	甕	36.2	12.8	57.1	2／3	D		口縁：箆山形文１　胴：ハケ	ハケ→箆磨き	床
66	甕	21.3	8.2	30.3	完	B		口唇：LR縄文　口縁：ナデ　胴：櫛単斜条痕 胴下半：縦箆削り　底部：箆削り	ハケ	床
67	甕	25.4	11.8	32.3	1／2	C		口縁：LR縄文地文→箆波状文　胴：箆山形文＋沈線区画　下半に連弧文２、斜ハケ 底部：箆削り）	口縁：箆磨き 胴：ハケ→箆磨き	床
68	甕	19.4	7.2	22	完	C		口唇：LR縄文　頸：櫛直線文　胴：櫛縦羽状文　底部：ナデ	ハケ→箆磨き	床
69	台付甕	16.3	8.8	20.9	完	D		口唇：ナデ　胴：櫛縦羽状文（右回り、一周に６単位施文）２次焼成受ける	ハケ→ナデ	床
70	台付甕	15.0	9.6	19.7	3／4	D		口縁：ナデ　胴：コの字重ね文（一周に６単位施文） 胴下半：箆磨き	箆磨き	床
71	台付甕	14.9	9.6	12.7	2／3	D		口唇：LR縄文　頸：櫛直線文　胴：櫛縦羽状文（右回り、一周に４単位施文）胴下半：ハケ→箆磨き？	箆磨き	床
72	片口鉢	23.0	7.6	10.8	3／4	A B		口唇：片口　２ケ一対の緊縛孔１　口縁：LR縄文地文→箆沈線２　箆磨き・赤彩 底部：ナデ	箆磨き・赤彩	床
73	蓋	19.2		12.8	2／3	D		ハケ→ナデ	ハケ	床
20号住居址（上層）										
74	壺	20.2	10.5	35.3	完	B		箆磨き　底部：ナデ	口縁：箆磨き 胴：ハケ→ナデ	
75	壺	19.8			完	B		口唇：LR縄文　口縁：ハケ→ナデ 頸：LR縄文地文→箆直線４	磨耗詳細不明	
76	台付甕	15.8	7.3	12.1	2／3	D		口唇：LR縄文　胴：コの字重ね文	箆磨き	
77	片口鉢	13.5	5.4	6.2	3／4	B		口縁：片口　２ケ一対の緊縛孔１ 胴：箆磨き・赤彩　底部：箆磨き	箆磨き・赤彩	
78	蓋	11.8		4.2	½	D		指頭による調整→箆磨き	箆磨き	
79	高坏		9.4		½	B		箆磨き・赤彩	ナデ	
80	甕		12.8		2／3	B C		胴：ハケ→櫛縦羽状文　底部：箆削り→ナデ	ハケ→ナデ	

表４　Ｂ区出土土器観察表２

No.	器種	法量（cm）			遺存度	色調	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高				外　面	内　面	
81	壺	18.3			3／4	B		口唇：山形突起４　口縁：ハケ→篦磨き 頸：篦直線４ 胴：ハケ→篦磨き	口縁：ハケ→篦磨き 胴：ハケ	
82	壺		9.6		2／3	B		ハケ→篦磨き	ナデ	
18号住居址										
83	壺				1／3	A B		篦磨き・赤彩	ナデ	
84	鉢	20.5			1／4	B		口縁：複合口縁、LR縄文地文→篦山形文、２ケ一対の緊縛孔１ 胴：篦磨き	ハケ→篦磨き	
85	鉢	14.6	6.0	7.2	1／3	B		篦磨き・赤彩	篦磨き・赤彩	
86	壺		7.6		1／4	C		篦磨き　底部：篦削り→ナデ	横ハケ	
23号住居址										
87	高坏	22.6			1／6	B		口唇：貼り付け突起　篦磨き・赤彩	篦磨き・赤彩	
88	台付甕	9.8	6.7	10.8	2／3	C		口唇：LR縄文　胴：櫛波状文３（上→下） 篦磨き	篦磨き	
89	蓋	12.4		7.7	完	B		篦ナデ→ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
90	台付甕		10.0		1／2	C		篦磨き	篦磨き、ナデ	
27号住居址										
91	壺	19.6			1／2	B		口唇：篦刺突　頸：篦直線３、篦山形文１ 胴：ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
92	壺	18.8			1／2	D		口唇：LR縄文、山形突起４　頸：隆帯２、LR縄文→篦山形文 胴：櫛懸垂文→篦刺突　全面赤彩	口縁：篦磨き→赤彩 胴：ナデ	
93	壺	13.2			3／5	E		頸：篦直線１、篦重山形文　篦磨き→全面赤彩	口縁：篦磨き→赤彩 胴：ナデ	
94	壺	13.1			3／4	A B		口縁：横ナデ　頸：ハケ	口縁：篦磨き 頸：ハケ→ナデ	
95	壺				2／3	B		頸：LR縄文地文→篦直線６　胴：櫛懸垂文→沈線区画	口縁：篦磨き→赤彩 胴：ナデ？	
96	壺				2／3	D		頸：LR縄文地文→篦直線４、篦山形文１ 胴：ハケ→篦磨き　全面赤彩	ハケ→ナデ	
97	壺				2／3	B		頸：篦直線４　胴：ハケ→篦磨き	篦磨き、ナデ	
98	壺		10.0		3／4	A B		ハケ→篦磨き　胴：篦波状沈線	ハケ	
99	壺		11.0		3／4	B		胴：篦直線４、篦山形文１、篦連弧文３ ハケ→篦磨き	ハケ→ナデ	
100	壺				1／3	B		ハケ→篦磨きorナデ	ハケ→ナデ	
101	無頸壺	8.2	5.7	10.5	完	B		口縁：２ケ一対の緊縛孔２ 胴：篦磨き・赤彩　底部：篦削り→ナデ	ナデ	
102	壺	14.4			1／2	C		篦磨き・赤彩	篦磨き・赤彩	
103	甕	20.6	7.2	24.5	2／3	A B		口唇：篦刺突（櫛？）　胴：櫛波状文８（上→下、区画充填）　胴下半：ハケ→篦磨き　底部：ナデ	ハケ→篦磨き	
104	甕	18.2	10.0	35.2	1／2	C		口唇：LR縄文　頸：櫛波状文２　胴：櫛縦羽状文（右回り） 胴下半：ハケ→ナデ　底部：ナデ	ハケ→篦磨き	
105	甕	24.6			1／3	A C		口唇：LR縄文　口縁：横ナデ　頸：櫛波状文２ 胴：櫛縦羽状文（右回り）	ハケ→篦磨き	
106	甕	20.6			1／3	B		口唇：LR縄文　口縁：横ナデ　頸：櫛波状文２ 胴：ハケ磨耗	ハケ→篦磨き	
107	台付甕	14.9	8.3	18.0	完	C		口唇：LR縄文　口縁：横ナデ　胴：篦山形文３、篦直線文２ 胴下半～脚：篦削り	篦磨き	
108	台付甕	15.2			完	C		口唇：LR縄文　口縁：篦山形文　胴：コの字重ね文	ハケ	
109	台付甕				3／4	C		頸：櫛波状文２　胴：櫛縦羽状文　篦磨き	ハケ→篦磨き	
110	台付甕	15.5			3／4	C		口唇：LR縄文　胴：櫛波状文６	ハケ→篦磨き	
111	台付甕	15.6			1／4	B		口唇：山形突起　頸：櫛波状文１　胴：櫛コの字重ね文＋円形浮文　篦磨き	ハケ→篦磨き	
112	台付甕	14.4			2／3	B		口唇：LR縄文　口縁：篦沈線（２本一組） 胴：櫛コの字重ね文 篦磨き	ハケ→篦磨き	
113	台付甕	14.8			1／4	D		口唇：LR縄文　口縁：ナデ　胴：コの字重ね文	ハケ→篦磨き	

表５　B区出土土器観察表３

No.	器種	法量（cm）			遺存度	色調	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高				外　面	内　面	
113	台付甕	14.8			1／4	D		口唇：LR縄文　口縁：ナデ　胴：コの字重ね文	ハケ→箆磨き	
114	台付甕	12.4			2／3	B		口唇：箆刻み　口縁：ナデ　胴：コの字重ね文＋円形浮文	箆磨き？	
115	蓋	21.2		8.3	2／3	D		指頭押圧調整→ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
116	蓋	10.8		3.6	完	D		指頭押圧調整→箆磨き？	箆磨き	
117	甑	15.6	6.2	9.0	完	B		箆磨き	ハケ→箆磨き	
118	坏	11.2	5.3	5.2	2／3	D		口唇：山形突起４　口縁：２ケ一対の緊縛孔 箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
119	坏	20.8	7.4	8.8	完	C		口縁：２ケ一対の緊縛孔２　胴：ハケ→箆磨き・赤彩	ハケ→箆磨き・赤彩	
120	坏	18.0	5.8	7.5	完	B		口唇：山形突起８　口縁：２ケ一対の緊縛孔１ 胴：箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
36号住居址										
121	甕	26.5			1／6	BC		口縁：横ナデ　胴：櫛単斜条痕（右回り）	ハケ→箆磨き	
122	壺				完	D		口縁：ナデ　頸：LR縄文地文→箆直線５、箆山形文１ 胴：箆磨き　全面赤彩	口縁：箆磨き 胴：ナデ	
123	壺				完	B		口縁：ナデ　頸：LR縄文帯　櫛波状文１	口縁：箆磨き 胴：ナデ	
124	蓋	7.0			1／4	D		箆磨き・赤彩	箆磨き	
125	壺	9.0			完	B		箆磨き　底部：箆削り→ナデ	ナデ	
54号住居址										
126	壺	18.6			2／3	B		口唇：LR縄文　口縁：箆磨き　頸：箆直線３	口縁：箆磨き 胴：同ハケ→ナデ	
127	甕	14.2	7.4	11.1	2／3	D		口唇：ハケ先端による刻み　頸：簾状文 胴：櫛縦羽状文（左まわり）	ハケ→ナデ	
10号溝址										
128	壺	10.0	6.0	19.8	完	B		箆磨き・赤彩	口縁：箆磨き・赤彩 胴：箆削り	
6号土壙										
129	甕	14.4			1／4	C		口唇：箆刻み　口縁：ナデ　胴：櫛縦羽状文（左回り）	ハケ→箆磨き	
130	台付甕	16.8			1／2	D		口縁：横ナデ　胴：コの字重ね文＋円形浮文	ハケ→箆磨き	
131	坏	18.2	7.6	7.8	1／4	B		口縁：２ケ一対の緊縛孔　胴：箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
132	壺				1／2	C		箆磨き・赤彩	ナデ	
133	高坏		7.8		2／3	B		ハケ→箆磨き	ナデ	
7号土壙										
134	甕	16.0	6.0	20.3	1／3	D		口縁：磨耗　頸：櫛波状文３（上→下） 胴：櫛縦羽状文 箆磨き　底部：箆削り	ハケ→箆磨き	
14号土壙										
135	壺	15.4			3／4	B		口唇：LR縄文　口縁：ナデ　頸：LR縄文地文→箆直線３ 胴：ハケ→箆磨き　全面赤彩	口縁：箆磨き 胴：ナデ	
136	甑	11.0	4.6	6.5	1／3	C		ハケ→箆磨き・赤彩	ハケ→箆磨き・赤彩	
137	壺		8.0		1／4	B		頸：LR縄文地文→箆直線３　胴上半：櫛波状懸垂文→箆刺突 胴下半：箆直線２、箆重山形文　底部：箆削り	ハケ→ナデ	
138	壺		9.4		1／3	D		箆磨き　底部箆磨き	ハケ	
139	壺				1／3	B		口縁：ナデ→箆磨き　頸：箆直線４	口縁：箆磨き 頸：ナデ	
140	壺				1／3	C		口縁：ハケ→箆磨き　頸：箆直線５　胴：ハケ→ナデ	口縁：箆磨き 頸：ナデ	
141	甕	11.2			1／4	D		口唇：LR縄文　口縁：ナデ　胴：櫛単斜条痕	箆磨き	
46号土壙										

表６　B区出土土器観察表４

No.	器種	法量（cm）			遺存度	色調	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高				外　面	内　面	
142	甕	13.0			1／4	AD		口唇：LR縄文　口縁：ナデ　頸：櫛波状文1 胴：櫛縦羽状文？	箆磨き	
143	壺	12.9			1／4	C		箆磨き	口縁：箆磨き 胴：ナデ	
144	壺	14.3			1／4	C		箆磨き（赤彩の可能性有）	ナデ	
49号土壙										
145	壺	7.0	6.2	16.1	完	B		箆磨き・赤彩　頸：沈線1	口縁：箆磨き・赤彩	
146	高坏	16.0			1／4	B		箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
147	壺				1／2	B		箆磨き・赤彩	頸：箆磨き・赤彩 胴：ナデ	
47号土壙										
148	壺	18.9			1／2	D		口唇：LR縄文　口縁：ハケ→箆磨き 頸：箆直線1、LR縄文 胴：ハケ→箆磨き　全面赤彩	口縁：箆磨き→赤彩 胴：ハケ→ナデ	
149	壺	16.8			2／3	C		口唇：LR縄文、山形突起　口縁：箆磨き	箆磨き・赤彩	
150	壺	19.5	10.2	36.4	3／4	B		口唇：LR縄文　口縁：箆磨き　頸：箆直線1、LR縄文 胴：ハケ→箆磨き　底部：箆削り　全面赤彩	口縁：ハケ→箆削り 胴：ハケ→ナデ	
151	壺	15.7	8.6	39.4	2／3	D		口縁：箆磨き　頸：LR縄文 地文→箆直線3、箆山形文1 胴上半：「水鳥足」文　ハケ→箆磨き　底部：箆削り	磨耗詳細不明	
152	甑	22.8	7.2	15.4	完	C		ハケ→ナデ？　磨耗	ハケ→ナデ	
57号土壙										
153	壺				2／3	B		口縁：箆磨き　頸：LR縄文地文→箆直線3 胴：ハケ→箆磨き	口縁：箆磨き 胴：ナデ	
154	壺				1／5	B		胴上半：櫛懸垂文＋箆沈線→沈線区画　胴下半：LR縄文地文→箆山形文→沈線区画、箆連弧文＋櫛直線　全面赤彩	ハケ→ナデ	
155	壺	13.4			完	D		口唇：LR縄文　赤彩　口縁：ナデ 頸：箆直線3	口縁：箆磨き→赤彩 頸：ナデ	
156	甕	16.0			1／4	D		口唇：LR縄文　頸：櫛直線1　胴：LR縄文→櫛波状文→櫛縦直線文	ハケ→箆磨き	
157	甕	22.6			1／4	D		口唇：LR縄文＋ハケ刺突　口縁：ナデ 胴：櫛T字文→櫛波状文充填（波状文上→下）	箆磨き	
158	高坏		9.2		4／5	C		箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
159	高坏	11.0	7.0	10.9	完	C		箆磨き・赤彩　脚部に2ケ一対の緊縛孔1	箆磨き・赤彩	
58号土壙										
160	壺				完	B		箆磨き・赤彩　頸：箆直線1	口縁：箆磨き・赤彩 頸：ナデ	
161	壺	17.0			1／2	D		口唇：LR縄文　口縁：LR縄文地文　全面赤彩	口縁：箆磨き 胴：ハケ→ナデ	
162	甕	14.2			1／2	D		口唇：LR縄文　頸：櫛波状文2	箆磨き	
163	壺		8.0		1／3	D		ハケ→箆磨き　底部：箆磨き	ハケ→箆磨き	
59号土壙										
164	壺	18.4			2／3	B		口唇：LR縄文　2ケ一対の緊縛孔　口縁：ナデ 頸：縄文帯1、櫛簾状文帯2→沈線区画	口縁：箆磨き 頸：ナデ	
6号住居址										
165	壺	17.4			2／3	B		箆磨き・赤彩　櫛簾状文（3連止め）	箆磨き・赤彩	
166	壺				3／4	B		箆磨き・赤彩　櫛T字文	箆磨き・赤彩	
167	壺		11.0		1／4	B		箆磨き・赤彩	ハケ→ナデ	
168	壺	16.8			1／3	B		箆磨き・赤彩　櫛簾状文（4連止め）	口縁：箆磨き・赤彩 胴：ハケ→ナデ	
169	甕	16.2			1／2	D		口縁：櫛波状文3（下→上）頸：櫛簾状文（4連止め）	箆磨き	
170	甕	13.4			2／3	D		口縁：櫛波状文3（下→上）頸：櫛簾状文（3連止め） 胴：櫛波状文（上→下）	口縁：箆磨き 胴：ハケ→ナデ	
171	壺		8.4		1／2	B		箆磨き・赤彩　底部：箆磨き・赤彩	ハケ	

表7　B区出土土器観察表5

No.	器種	法量（cm）			遺存度	色調	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高				外　面	内　面	
172	壺		6.5		1／2	B		箆磨き　底部：箆削り	ハケ→ナデ	
173	壺		6.8		1／3	B		箆磨き・赤彩　底部：箆削り	箆磨き・赤彩	
174	甑	7.9	4.6	6.9	2／3	B		箆磨き　焼成前穿孔１	箆磨き	
175	甑	18.4	4.8	10.4	1／3	B		箆磨き　焼成前穿孔１	箆磨き	
176	蓋	18.4		5.7	1／4	C		箆磨き　焼成前穿孔１	箆磨き	
177	高坏	25.0			1／4	C		箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
178	高坏		14.6		1／4	B		箆磨き・赤彩	ハケ	
179	高坏		14.0		1／4	B		箆磨き・赤彩	ハケ	
180	坏	13.7	3.6	6.6	3／4	B		箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
181	坏	14.0	4.0	6.6	完	CD		箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
182	高坏	15.2			1／3	B		箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
183	坏		4.8		1／3	B		箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
8号住居址										
184	壺	25.8			3／4	B		口唇：山形突起（１周に４）口縁：箆磨き・赤彩 頸：櫛直線文３　胴：箆磨き・赤彩	口縁：箆磨き・赤彩 胴：ハケ→ナデ	
185	壺				3／4	B		口縁：箆磨き・赤彩　頸：櫛Ｔ字文	口縁：箆磨き・赤彩 胴：ナデ	
186	高坏		14.2		1／8	B		箆磨き・赤彩	ナデ	
187	高坏		7.6		1／3	C		箆磨き・赤彩	ハケ→箆磨き	
188	壺		8.4		完	AB		ハケ→ナデ　底部：箆削り→ナデ	ナデ	
189	甕	22.4	6.6	25.1	1／3	BC		頸：櫛簾状文（３連止め）→口縁：櫛波状文５（下→上、区画充填）胴：櫛波状文（上→下、区画充填）	箆削り	
22号住居址										
190	甕	21.4			完	D		頸：櫛簾状文（等間隔止め）→口縁：櫛波状文３（下→上） 胴：櫛波状文５～６	箆磨き	
23号住居址										
191	甕	11.2			1／3	D		頸：櫛簾状文（２連止め）→口縁：櫛波状文２（上→下） 胴：櫛波状文３（上→下）	箆磨き	
192	甕	12.2			1／2	D		頸：櫛簾状文（２連止め）→口縁：櫛波状文１ 胴：櫛波状文２（上→下）	箆磨き	
193	甕		6.0		1／2	D		胴：櫛波状文→箆磨き　底部：箆削り→ナデ	箆磨き	
194	台付甕		9.6		1／2	C		磨耗詳細不明	磨耗	
195	台付甕		8.4		2／3	B		箆磨き	ハケ	
25号住居址										
196	甕	17.5	6.8	24.3	2／3	BC		頸：櫛簾状文（２連止め）→口縁：櫛波状文２（上→下） 胴：櫛波状文２（上→下）→箆斜走短線	ハケ→箆磨き	
197	甕	17.2			1／3	C		頸：櫛簾状文（２連止め）→口縁：櫛波状文３ 胴：櫛波状文（上→下）	箆磨き	
28号住居址										
198	甕	20.0			1／6	BC		頸：櫛簾状文（２連止め）→口縁：櫛波状文３（上→下） 胴：櫛波状文（上→下）	箆磨き	
199	壺		7.4		完	B		箆磨き・赤彩	ナデ	
200	高坏	25.0			1／2	B		口唇：山形突起　箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
39号住居址										
201	甕	18.6			1／3	BC		頸：櫛簾状文（３連止め）→口縁：櫛波状文４（下→上） 胴：櫛波状文（上→下）	箆磨き	

表８　Ｂ区出土土器観察表６

No.	器種	法量（cm）			遺存度	色調	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高				外　面	内　面	
202	甕		7.4		1／4	D		櫛波状文→箆磨き	箆磨き	
203	蓋	16.0		6.2	1／3	B		指頭押圧調整→ハケ→ナデ　焼成前穿孔1	ハケ→ナデ	
47号住居址										
204	台付甕	13.5			1／2	CD		口唇：山形突起（一周に4）口縁：箆磨き・赤彩 頸：櫛簾状文（5連止め）胴：箆磨き・赤彩	口縁：箆磨き・赤彩 胴：箆磨き	
205	甕	9.6	4.6	10.2	完	BC		口唇：面とり　頸：櫛簾状文（3連止め） →口縁：櫛波状文 胴：櫛波状文		
206	蓋				1／3	D		指頭押圧調整　箆磨き　焼成前穿孔1	箆磨き	
49号住居址										
207	蓋	9.9		5.0	2／3	D		箆磨き　焼成前穿孔1	箆磨き	
52号住居址										
208	高坏	23.2			1／2	BC		箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
209	高坏	12.0			2／3	BC		箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
42号住居址										
210	壺				完	B		箆磨き・赤彩	ハケ→ナデ	
211	高坏				2／3	C		箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
212	甕	30.8			2／3	C		頸：櫛簾状文（4連止め）→口縁：櫛波状文5（下→上、区画充填） 胴：櫛波状文5（上→下、区画充填）箆磨き	ハケ→箆磨き	
56号住居址										
213	壺	27.6			1／10	B		箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
214	甕	18.5			1／4	D		頸：櫛簾状文（2連止め）→口縁：櫛波状文（区画充填） 胴：櫛波状文	箆磨き	
215	壺		4.6		3／4	B		箆磨き・赤彩　磨耗	ナデ	
44号土壙										
216	甕	16.7	6.2	18.8	完	D		頸：櫛直線文→口縁：櫛波状文2（上→下） 胴：櫛波状文3（上→下）　箆磨き	箆磨き	
217	高坏		18.4		1／3	CD		箆磨き・赤彩	ナデ	
9号土壙										
218	壺		8.2		2／3	BC		箆磨き・赤彩　頸：櫛T字文	口縁：箆磨き 胴：ハケ→ナデ	
50号土壙										
219	甕	27.8			1／4	BC		頸：櫛簾状文（3連止め）口縁：櫛波状文（区画充填） 胴：櫛波状文（下→上）	箆磨き	
5号住居址										
220	壺	20.8			1／6	B		ハケ→箆磨き	ハケ→箆磨き	
221	壺	12.4			1／8	C		ハケ→箆磨き	口縁：箆磨き 胴：箆削り→ナデ	
222	壺	8.4			1／4	CD		箆磨き	箆磨き	
223	坩	11.0		6.9	完	B		口縁：ハケ→ナデ　胴：箆削り→ナデ	口縁：ナデ 胴：箆平滑化→ナデ	
224	甕	16.8			1／6	BC		ハケ→ナデ	ナデ	
225	甕	13.0			1／6	D		ハケ→ナデ	口縁：ハケ→ナデ 胴：箆削り→ナデ	
226	甕	16.4			1／3			口縁：ハケ→ナデ　胴：ハケ（左回り）	口縁：ナデ 胴：箆削り→ナデ	
227	高坏	13.2			1／3	D		ハケ→箆磨き	ハケ→箆磨き	
228	器台	10.3	9.8	6.4	2／3	D		ハケ→ナデ　口唇：面とり	ハケ	

表9　B区出土土器観察表7

No.	器種	法量（cm）			遺存度	色調	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高				外　面	内　面	
29号住居址										
229	壺	15.0			1／4	C		箆磨き	口縁：箆磨き 胴：ナデ	
230	甕	17.8			完	D		口縁：ナデ　胴：ハケ	口縁：ハケ→ナデ 胴：箆削り	
231	鉢	10.4			1／3	B		ハケ→箆磨き	口縁：箆磨き	
232	器台	9.0			1／4	D		箆磨き	箆磨き	
233	器台				1／2	D		箆磨き　円形透かし孔	箆磨き	
31号住居址										
234	壺	14.6			1／4	B		箆磨き	口縁：箆磨き 胴：箆削り→ナデ	
235	壺				1／3	B		箆磨き・赤彩	口縁：箆磨き・赤彩 胴：箆削り	
236	壺	14.4			1／3	B		箆磨き	箆磨き	
237	壺	11.5	3.2	12.2	3／4	B		口縁：ハケ→箆磨き　胴：ハケ→箆磨き	口縁：箆磨き 胴：ハケ→ナデ	
238	壺	13.6			1／6	C		箆磨き	箆磨き	
239	壺		4.6			B		箆磨き	口縁：箆磨き 胴：箆削り→ナデ	
240	甕	17.2				C		口縁：ナデ　胴：箆削りor箆ナデ→ナデ	口縁：ナデ 胴：箆削り→ナデ	
241	甕	16.1	4.6	17.1	2／3	D		口縁：ナデ　胴：箆削り→ナデ	口縁：ナデ 胴：箆削りor平滑化→ナデ	
242	甕	17.6			1／4	C		ナデ	口縁：ナデ 胴：箆削り→ナデ	
243	甕	20.2			1／8	C		ハケ→ナデ	口縁：箆磨き 胴：箆削り→箆磨き	
244	甕	15.8			1／4	C		口縁：ナデ　胴：箆削り→ナデ	口縁：ナデ 胴：箆削り→ナデ	
245	甕	16.2			1／6	CD		口縁：ナデ　胴：箆削り→ナデ	口縁：ナデ 胴：箆削り	
246	高坏	25.4			1／2	CD		箆磨き	箆磨き	
247	高坏	14.2			2／3	D		箆磨き　円板充塡	箆磨き	
248	高坏	15.4			1／6	AC		箆磨き	箆磨き	
249	甑	15.5			1／2	B		箆削りor箆平滑化後ナデ　焼成前穿孔1	箆平滑化→ナデ	
250	甕		5.2		2／3	CD		箆削り→ナデ	箆削り→ナデ	
251	小丸坩	10.6			1／6	C		ハケ→箆磨き	ハケ→箆磨き	
252	小丸坩	9.9	2.7	5.5	1／4	B		口縁：箆磨き　胴：箆削り→箆磨き	箆磨き	
253	器台	8.6			2／3	D		箆磨き　円形透かし孔3	箆磨き	
254	高坏				1／2	C		箆磨き	箆磨き、ハケ	
37号住居址										
255	台付甕	10.8	4.8	12.5	1／2	BC		ハケ→ナデ	ナデ→箆磨き	
256	台付甕				2／3	CD		ハケ	ナデ	
257	小丸坩	10.7		7.1	完	B		口縁：ハケ→箆磨き　胴：箆削り→箆磨き	口縁：ハケ→箆磨き 胴：箆平滑化→箆磨き	
258	高坏	17.2	11.7	12.9	完	B		坏：ハケ→箆磨き　脚：箆磨き　円形透かし孔6	坏：箆磨き 脚：ハケ	
48号住居址										
259	甕	14.4			1／4	D		ハケ	口縁：箆磨き 胴：ナデ	
260	甕	19.4			2／3	D		口縁～胴：櫛波状文（上→下）→櫛簾状文（3連止め）	口縁：箆磨き 胴：箆削り	

表10　B区出土土器観察表8

No.	器種	法量（cm）			遺存度	色調	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高				外面	内面	
261	台付甕				1／2	D		口縁～胴：櫛波状文→頸：櫛簾状文（２連止め）	箆磨き	
53号住居址										
262	台付甕	13.8			2／3	BC		口縁：ナデ　胴：ハケ	ナデ	
263	甕	18.6			½	C	○	口縁：箆削り→ナデ　胴：箆削り	口縁：ナデ 胴：箆削り	
264	甕	10.8			1／3	C		ナデ	ナデ	
265	高坏		9.8		1／3	D		箆磨き？　磨耗　円形透かし孔３	磨耗	
13号溝址										
266	壺	15.9			1／3	B		口縁：ナデ→箆磨き　胴：箆磨き	ナデ	
267	壺	16.4			1／4	C		口縁：粘土帯貼り付け、ハケ→ナデ　胴：箆磨き	口縁：箆磨き 胴：ナデ	
268	壺	15.0			3／4	D		口縁：ハケ→箆磨き　胴：箆磨き	口縁：箆磨き 胴：箆平滑化→ナデ	
269	壺	16.4			1／4	AB	○	口唇：面とり　口縁：ハケ→ナデ	ハケ	
270	壺	16.5			完	C		口縁：ハケ→ナデ	口縁：ハケ→ナデ 胴：箆削り？	
271	壺	11.8			1／4	B		ナデ	ナデ	
272	壺	12.9			1／4	AC		ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
273	壺	12.6			1／4	B		口縁：粘土帯貼り付け、箆磨き	ハケ→箆磨き	
274	壺	6.7	3.0	18.5	1／2	B		口縁：箆磨き　胴：箆磨き、箆状工具による連続刺突 底部：ナデ	口縁：箆磨き 胴：ナデ	
275	壺	7.1	1.8	16.2	完	B	○	口縁：ハケ→箆磨き　胴：ハケ→箆磨き	口縁：箆磨き 胴：ナデ	
276	壺	5.2	2.4	13.9	4／5	B	○	口縁：箆磨き　胴：ハケ→箆磨き	口縁：箆磨き 胴：ナデ	
277	壺	13.5	5.8	13.2	完	B		箆磨き・赤彩　底部周辺のみ箆削り	口縁：箆磨き・赤彩 胴：箆削り→ナデ	
278	壺	8.7	4.4	15.0	2／3	D		箆磨き・赤彩	口縁：箆磨き・赤彩 胴：ナデ	
279	壺		5.8		2／3	B		頸：櫛直線２　胴：箆磨き・赤彩　底部：箆削り	ナデ	
280	壺		5.2		2／3	B		胴上半：箆磨き　胴下半：箆削り→箆磨き 底部：箆削り	胴上半：箆削り 胴下半：ナデ	
281	壺		5.0		1／2	C		ハケ→箆磨き	磨耗不明	
282	壺		3.0		完	C		箆磨き　底部：箆磨き	ナデ	
283	壺		8.3		2／3	B		ハケ→箆磨き　底部：箆削り	ハケ→ナデ	
284	壺		12.9		2／3	C		頸：櫛直線　口縁・胴：箆磨き・赤彩	口縁：箆磨き・赤彩 胴：箆磨き	
285	壺		5.4		2／3	B		ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
286	壺	20.0	7.4	21.2	3／4	C		口縁：ハケ→ナデ　胴：ハケ　全面赤彩	口縁：ナデ、赤彩 胴：ナデ	
287	甕	14.4			1／4	C		ナデ	ナデ	
288	甕	19.2			1／4	BC	○	口縁：ナデ→ハケor甕による刺突　頸：ハケ	口縁：ナデ 頸：ハケ→ナデ 胴：ナデ	289と同一
289	甕		8.4		1／3	BC	○	胴：ハケ　脚：ナデ	胴：箆平滑化→ナデ 脚：ナデ	
290	甕	11.2			2／3	B		口縁：ナデ　胴：箆削り→ナデ	口縁：ナデ 胴：箆削り	
291	甕	17.7			1／3	B		口縁：ナデ　胴：箆削り→ナデ	口縁：ナデ 胴：ナデ	
292	甕	17.8	4.4	13.2	完	D		口縁：ハケ→ナデ　胴：ハケ→ナデ　底部：箆削り	口縁：ハケ→ナデ 胴：箆削り→ナデ	
293	甕	17.6			1／3	C		口縁：ハケ→ナデ　胴：ハケ→箆削り	口縁：ハケ 胴：ハケ→ナデ	
294	甕	20.2			1／6	C		口唇：面とり　口縁：ハケ→ナデ	口縁：ナデ 胴：ケズリ	

表11　B区出土土器観察表９

No.	器種	法量（cm）			遺存度	色調	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高				外　面	内　面	
295	甕	18.2			1／4	B		口唇：面とり　口縁：ハケ→ナデ　胴：ハケ	口縁：ハケ	
296	甕	17.3			2／3	B		口縁：ハケ→ナデ　胴：ハケ	口縁：ハケ→ナデ 胴：篦削り→ナデ	
297	甕	19.6			1／4	D		口唇：面とり→ナデ　口縁：ハケ→ナデ	口縁：ハケ	
298	甕	16.9			1／2	D		口縁：ナデ　胴：ハケ	口縁：ナデ 胴：篦削り？ →ナデ	
299	甕	19.0			1／4	C		口縁：ハケ→ナデ　胴：ハケ	口縁：ハケ 胴：ナデ	
300	甕	19.6			2／3	C		口縁：ハケ→ナデ　胴：ハケ	口縁：ナデ 胴：ハケ→ナデ	
301	甕	18.8			1／6	D		口縁：ハケ→ナデ　胴：ハケ	口縁：篦磨き 胴：ナデ	
302	甕	16.6			完	A B		口縁：ハケ→ナデ　胴：ハケ	口縁：ハケ→ナデ 胴：篦平滑化→ナデ	
303	甕		4.0		2／3	C		胴上半：篦磨き　胴下半：篦磨き→篦削り 底部：篦削り	口縁：篦磨き 胴：篦平滑化 →ナデ	
304	甕	18.5	5.8	25.1	2／3	D		頸：櫛簾状文（３連止め）→口縁：櫛波状文４（下→上、区画充塡）胴：櫛波状文３（上→下）	篦磨き	
305	甕	27.4			1／2	B		口唇：面とり　口縁～胴：櫛波状文（基本的に上→下）	口縁：ハケ→篦磨き 胴：篦平滑化→ナデ	
306	甕	22.4			1／2	B		口縁：櫛波状文（上→下、区画充塡？） 胴：櫛波状文（下→上，区画充塡）	篦磨き	
307	甕	21.8			完	D		頸：櫛簾状文（等間隔止め）→口縁：櫛波状文４（下→上、区画充塡）胴：櫛波状文	篦磨き	
308	甕	26.0			1／3	D		頸：櫛簾状文（２連止め）→口縁：櫛波状文５～６（下→上、区画充塡）胴：櫛波状文５（上→下）篦磨き	篦磨き	
309	甕	15.3			1／4	D		頸：櫛直線文→口縁：櫛波状文３（下→上）	篦磨き	
310	甕	13.3			3／4	D		頸：櫛簾状文（等間隔止め）→口縁：櫛波状文２（上→下、区画充塡）胴：櫛波状文（上→下）	口縁：篦磨き 胴：篦削り→ 篦磨き	
311	甕	13.6	5.0	14.1	3／4	C		口縁：櫛波状文（下→上）胴：櫛波状文、篦磨き→頸：櫛簾状文（２連止め）	篦磨き	
312	甕	13.5	5.4	16.7	完	C D		頸：櫛簾状文（３連止め）→口縁：櫛波状文２（下→上） 胴：櫛波状文３（上→下）篦磨き	篦磨き	
313	甕	16.0	6.1	18.5	3／4	C		口縁～胴：櫛波状文（上→下）→頸：櫛簾状文（２連止め）	篦磨き	
314	甕	15.2			2／3	C D		篦磨き　磨耗詳細不明	篦磨き　磨耗	
315	台付甕	11.8	7.2	13.5	完	B		頸：櫛簾状文（３連止め）→口縁：櫛波状文１ 胴：櫛波状文２（上→下）脚：篦磨き	胴：篦磨き 脚：ナデ	
316	台付甕	10.7	7.4	14.1	完	B		口縁：櫛波状文（上→下）頸：櫛直線文 胴：櫛波状文（上→下）　脚：篦磨き	胴：篦磨き 脚：ハケ→ナデ	
317	甕		7.4		2／3	B		頸：櫛簾状文（４連止め）→胴：櫛波状文（下→上、上→下の区画充塡）	篦磨き	
318	台付甕				1／3	C		櫛波状文　篦磨き	篦磨き	
319	台付甕		9.8		完	C		櫛波状文　篦磨き	篦平滑化→篦磨き	
320	甕		5.6		完	B		胴：篦磨き　底部：篦削り	篦磨き	
321	甕		5.1		2／3	D		胴：櫛波状文、篦磨き　底部：篦削り	篦磨き	
322	台付甕		11.8		4／5	C		ハケ　端部：面とり	胴：ナデ 脚：篦平滑化 →ナデ	
323	台付甕		11.4		2／3	D		ハケ　端部：面とり	胴：篦平滑化 脚：篦平滑化 →ナデ	
324	台付甕		11.2		完	C		ハケ	胴：ナデ 脚：ハケ	
325	台付甕		11.2		完	C		ハケ	胴：ナデ 脚：ハケ	
326	台付甕		10.8		完	C		ナデ　端部面とり	胴：篦平滑化 脚：篦削り	
327	台付甕		7.2		完	C		ハケ	胴：ハケ 脚：ハケ	
328	台付甕		8.3		完	C D		ハケ→ナデ	胴：篦平滑化 脚：篦平滑化 →ナデ	
329	台付甕		9.0		完	D		ハケ	胴：ナデ 脚：ナデ	
330	甕					B C	○	ハケ→ナデ→ハケor篦による刺突	ナデ	

表12　B区出土土器観察表10

No.	器種	法量（cm）			遺存度	色調	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高				外　面	内　面	
331	甕					D	○	ハケ	ナデ	S字
332	甕					D	○	ハケ	ナデ	S字
333	壺					BC	○	箆磨き　箆による「ハ」字状の刺突	ナデ	ヒサゴ壺？
334	高坏	25.8	9.1		3／4	B	○	箆磨き　円形透かし孔3	坏：口唇面とり、箆磨き 脚：ナデ	
335	高坏	12.6	16.5	10.6	2／3	C		箆磨き　円形透かし孔3	坏：箆磨き 脚：箆平滑化→ナデ	
336	高坏	20.2	16.6	16.6	完	C		箆磨き・赤彩　三角形透かし孔4	坏：箆磨き・赤彩 脚：箆磨き	
337	高坏	14.2			2／3	C		ハケ→箆磨き	坏：ハケ→箆磨き 脚：ナデ	
338	高坏	15.8			完	B		口唇：山形突起4　箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
339	高坏	25.3			2／3	B		口唇：山形突起　箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
340	高坏	14.3			3／4	B		箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
341	高坏	12.5			1／2	C		箆磨き	箆磨き	
342	高坏	18.6			2／3	C		口唇：山形突起　箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
343	高坏		12.8		2／3	C		ハケ→ナデ　円形透かし孔3	ハケ→ナデ	
344	高坏		9.5		完	B		ハケ→箆磨き　円形透かし孔3	箆平滑化→ナデ	
345	高坏				2／3	C		箆磨き・赤彩　三角形透かし孔	坏：箆磨き・赤彩 脚：ハケ→ナデ	
346	高坏		11.7		完	B		箆磨き	箆平滑化→ナデ	
347	高坏				2／3	D		箆磨き・赤彩　三角形透かし孔	坏：箆磨き・赤彩 脚：ナデ	
348	高坏		8.0		2／3	C		箆磨き・赤彩	坏：箆磨き・赤彩 脚：ナデ	
349	高坏		7.4		2／3	C		箆磨き・赤彩	坏：箆磨き・赤彩 脚：ナデ	
350	高坏				完	B		箆磨き	箆平滑化	
351	器台	9.5	11.6	10.0	完	C		箆磨き・赤彩　円形透かし孔3	坏：箆磨き・赤彩 脚：箆平滑化	
352	器台	11.4			2／3	C		箆磨き　円形透かし孔3	坏：箆磨き 脚：ナデ	
353	器台		4.0		2／3	C		ナデ	ナデ	
354	器台		13.0		2／3	C		ハケ→箆磨き　円形透かし孔3	坏：箆磨き 脚：ハケ	
355	蓋	5.1		3.1	4／5	B	○	箆磨き・赤彩	ハケ→ナデ	
356	蓋	9.9		4.0	完	C		ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
357	器台	9.4	8.7	6.8	完	B		ハケ→ナデ　脚端部面とり	ハケ→ナデ	
358	坏	9.1	3.8	6.2	4／5	B		箆磨き・赤彩　底部：箆磨き・赤彩	ナデ	
359	片口鉢	14.7	4.3	6.9	1／2	B		ハケ→箆磨き　底部：箆磨き	箆磨き	
360	甑	15.4		8.8	1／2	C	○	口縁：粘土帯貼り付け　箆削り→箆磨き	箆磨き	
361	坏	11.6	4.0	5.5	1／3	B		箆磨き？	箆磨き？	
362	坏	11.3	4.2	6.2	1／3	B		ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
14号溝址										
363	壺	12.8			完	CD		口縁：ハケ→ナデ　胴：ハケ	口縁：ハケ→ナデ 胴：ナデ	
364	壺		6.2		完	C		胴：箆ナデ→ナデ　底部：箆削り→ナデ	ナデ	
365	台付甕	14.7	7.4	19.5	2／3	CD		口縁：ナデ　胴～脚：ハケ	口縁：ハケ 胴：ハケ→ナデ 脚：ハケ	

表13　B区出土土器観察表11

No.	器種	法量（cm）			遺存度	色調	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高				外面	内面	
366	台付甕	14.5			1／2	D		口縁：ハケ　胴：箆削り→ナデ　脚：ハケ→ナデ	口縁：ハケ 胴：箆削り→ナデ	
367	台付甕		8.2		完	B		ハケ→ナデ	胴：ハケ→ナデ 脚：ナデ	
368	台付甕		12.4		完	D		ハケ→箆磨き	胴：箆磨き 脚：箆平滑化→ナデ	
369	甕	12.4			1／3	C		ナデ	口縁：ナデ 胴：箆削り→ナデ	
370	甕	15.8			1／4	C		口唇：面とり　口縁～胴：櫛波状文（上→下）頸：櫛直線文	口縁：箆磨き 胴：箆削り→箆磨き	
371	甕	13.0	5.0	16.7	2／3	C		頸：櫛簾状文（2連止め）→口縁：櫛波状文2（下→上） 胴：櫛波状文（上→下）　底部：箆削り→ナデ	箆磨き	
372	台付甕		7.3		完	C		ハケ　脚端：内側折り返し	胴：ナデ 脚：ナデ	
373	台付甕		5.8		完	D		ハケ→ナデ	ナデ	
374	台付甕		9.4		2／3	C		胴：ハケ→箆削り　脚：ハケ→ナデ	胴：ハケ→ナデ 脚：箆平滑化→ハケ→ナデ	
375	甑	18.6	3.8	8.6	1／3	D		箆磨き	箆磨き	
376	高坏	20.2			1／8	B		箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
377	高坏		16.2		1／3	B		箆磨き・赤彩	箆平滑化→ナデ	
378	高坏		16.6		1／8	C		箆磨き・赤彩　三角形透かし孔	ナデ	
379	器台		11.6		2／3	C		ハケ→箆磨き・赤彩　円形透かし孔3	坏：箆磨き・赤彩 脚：ナデ	
380	器台	8.4			1／3	B		ハケ→箆磨き	箆磨き・赤彩	
381	高坏		12.2		完	B		箆磨き・赤彩　円形透かし孔3	坏：箆磨き・赤彩 脚：箆平滑化→ナデ	
382	器台	8.8			1／3	B		箆磨き　円形透かし孔	坏：箆磨き 脚：ナデ	
383	器台	8.4	12.4	8.8	完	C		箆磨き　円形透かし孔3	坏：箆磨き 脚：箆平滑化→ナデ	
384	壺	7.0	3.5	6.7	完	D		口縁：ハケ→ナデ　胴：箆削り→箆磨き	口縁：ハケ→ナデ 胴：ナデ	
385	鉢	10.8	3.0	7.7	2／3	D		口縁：ハケ→ナデ　胴：箆削り	口縁：ハケ→ナデ 胴：ナデ	
386	坏	14.4	5.0	7.9	完	B		箆磨き・赤彩　底部：箆削り	箆磨き・赤彩	
387	鉢	10.8	2.8	5.6	1／3	C		ハケ→ナデ　底部：箆削り→ナデ	口縁：ハケ→ナデ 胴：箆削り→ナデ	
15号溝址										
388	壺	21.2			1／8	C		箆磨き	箆磨き	
389	壺		4.8		完	C		箆磨き	ナデ	
390	壺		8.0		1／4	C		ハケ→ナデ	箆削り→ナデ	
391	壺	14.1	5.6	24.6	2／3	C		口縁：ナデ　胴：箆削り→ナデ　底部：箆削り	口縁：ナデ 胴：箆平滑化→ナデ	
392	甕	14.8			1／4	D		口縁：箆削り→ナデ　胴：箆削り	口縁：ナデ 胴：箆削り→ナデ	
393	甕	17.0			1／3	C		口縁：ハケ→ナデ　胴：ハケ	口縁：ハケ→ナデ 胴：箆削り→ナデ	
394	甕	17.0			1／4	C		口縁：ハケ→ナデ　胴：ハケ	口縁：ナデ 胴：箆削り→ナデ	
395	甕	15.6			1／5	C		ハケ	口縁：ハケ→ナデ 胴：ナデ	
396	甕	16.0			1／4	C		ナデ	口縁：ハケ→ナデ 胴：ナデ	
397	鉢	28.4			1／4	D		口縁：箆削り→箆磨き　胴：箆削り→箆磨き	箆磨き	
398	鉢	8.4		7.0	完	C		口縁：ナデ　胴上半：ハケ　胴下半：箆削り→ナデ	ナデ	
399	高坏	16.6			1／3	C		箆磨き	箆磨き	
400	高坏	16.0			1／3	B		箆削り→箆磨き	箆磨き	

表14　B区出土土器観察表12

No.	器種	法量（cm）			遺存度	色調	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高				外面	内面	
401	高坏	15.4			1／3	B		箆磨き	箆磨き	
402	器台	8.4	11.8	7.0	完	CD		坏：箆磨き　脚：箆削り→箆磨き　円形透かし孔6	坏：箆磨き 脚：ナデ	
403	小丸壷	12.2			1／3	B		箆削り→箆磨き	ナデ→箆磨き	
404	小丸壷	11.0			1／2	B		ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
405	鉢	10.8		5.6	1／2	B		口縁：ナデ　胴：箆削り→ナデ	ナデ	
406	器台	9.6	9.8	8.0	完	B		ハケ	ハケ→ナデ	
407	器台	8.6	9.2	6.6	完	C		ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
408	器台	8.9	9.9	6.9	完	CD		ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	
18号土壙										
409	壺	14.2			完	C		口縁：ハケ→ナデ　胴：ハケ	口縁：ハケ→ナデ 胴：ナデ	
410	壺				完	C		胴上半：箆磨き・赤彩　胴下半：箆削り→箆磨き・赤彩	箆削り→ナデ	
411	台付甕		8.0		完	CD		ハケ→ナデ	胴：箆削り 脚：箆平滑化	
60号土壙										
412	壺	12.4			1／3	CD		箆削り→箆磨き	箆磨き	
413	壺	11.9	4.0	14.2	1／2	B		口縁：ハケ→ナデ　胴上半：ハケ　胴下半：箆削り	口縁：ハケ→ナデ 胴：箆平滑化	
414	坏	21.3	9.0	6.4	完	B		口唇：面とり　箆削り→箆磨き	ハケ→ナデ	
415	器台	8.8	8.8	7.1	1／2	CD		ナデ	ナデ	
416	高坏		13.0		2／3	CD		箆磨き	ナデ	
55号土壙										
417	器台	10.3	10.8	9.2	完	CD	○	坏：ナデ→箆磨き　脚：箆磨き　円形透かし孔5	坏：ナデ→箆磨き 脚：ハケ→ナデ	
418	甕	17.4			1／3	AB	○	口唇：面とり　口縁：ナデ　胴：ハケ	口縁：ナデ 胴：箆削り	
419	甕	19.0			1／6	BC	○	口縁：凹線5　胴：箆ナデ	口縁：ナデ 頸：ハケ→ナデ	
420	高坏	20.8			完	B	○	口唇：面とり　坏：箆磨き	箆磨き	
その他										
421	壺	12.0			1／6	D		口唇：LR縄文　口縁：ナデ　頸：箆直線3　胴：箆山形文 ハケ→箆磨き	口縁：箆磨き 胴：ハケ→ナデ	
422	壺	14.2			1／3	D		口唇：LR縄文　口縁：ナデ　頸：箆直線	口縁：箆磨き	
423	壺				1／4	CD		頸：LR縄文地文→箆直線4　胴：「水鳥足」文 箆磨き	ナデ	
424	甕	21.4			1／8	C		口唇：LR縄文　口縁：ナデ　胴：櫛単斜条痕（or横羽状文）口縁折り返し	ハケ→箆磨き	
425	甕	21.2			1／8	C		口唇：LR縄文→指頭押捺　胴：櫛斜交子文→櫛直線文	箆磨き	
426	甕	16.2			1／8	D		口唇：LR縄文　口縁：ナデ　胴：櫛波状文（上→下）	箆磨き	
427	壺	20.4			1／4	B		口唇：LR縄文　口縁：ハケ→ナデ	ナデ	
428	壺	13.4			1／4	B		口唇：LR縄文　口縁：ナデ→箆磨き？	箆磨き・赤彩	
429	壺					B		口縁：ナデ　頸：LR縄文地文→箆直線3　胴：ハケ→箆磨き	ナデ	
430	壺	7.8			3／4	C		口唇：LR縄文　頸：箆直線2　胴：箆山形文　箆磨き	口縁：箆磨き 胴：ハケ→ナデ	
431	壺				2／5	B		口縁：箆磨き　頸：箆直線3　胴：箆磨き 全面赤彩	口縁：箆磨き・赤彩 胴：ハケ→ナデ	
432	壺				2／3	D		口縁：箆磨き　頸：箆直線文2→箆山形文　胴：箆磨き	口縁：箆磨き・赤彩 胴：ナデ	

表15　B区出土土器観察表13

No.	器種	法量（cm）			遺存度	色調	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高				外　面	内　面	
433	壺		6.4		2／3	C		箆磨き・赤彩	ハケ→ナデ	
434	壺	10.8	7.2	17.2	完	C		箆磨き・赤彩	口縁：箆磨き・赤彩 胴：ナデ	
435	高坏	17.8			1／3	B		口唇：山形突起　箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
436	高坏	18.4			1／4	B		口唇：山形突起　箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
437	蓋	9.0		1.4	完	C		箆磨き・赤彩　２ケ一対の緊縛孔２	箆磨き・赤彩	
438	蓋	12.4		2.6	1／8	C		箆磨き・赤彩　２ケ一対の緊縛孔１	箆磨き・赤彩	
439	坏	8.2	4.6	4.2	2／3	AD		口唇：２ケ一対の緊縛孔　箆磨き・赤彩 底部：箆削り→ナデ	箆磨き・赤彩	
440	壺	11.1			1／4	B		箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
441	壺		10.8		1／3	BC		箆磨き　底部：箆削り→箆磨き	ハケ→ナデ	
442	壺		9.6		2／3	B		箆磨き　底部：箆削り→箆磨き	ナデ	
443	甕	16.4			4／5	C		口唇：LR縄文　口縁：ナデ　胴：櫛波状文５（原体異なる）	口縁：ナデ 胴：ハケ→箆磨きorナデ	
444	甕	17.4			1／4	C		口唇：箆刺突　頸：櫛簾状文(等間隔止め)→胴：櫛波状文３→櫛単斜条痕	ハケ→箆磨き	
445	甕	14.9			1／3	D		口唇：LR縄文　口縁：ナデ　胴：櫛単斜条痕→櫛直線文	ハケ→箆磨き	
446	甕	12.8			2／3	D		口唇：LR縄文　口縁：ナデ　胴：櫛横羽状文	ハケ→ナデ	
447	台付甕	8.7	5.7	9.8	1／3	D		口唇：LR縄文　胴：LR縄文地文→箆鋸歯文 ハケ→ナデ	箆磨き	
448	甕	8.8	4.2	10.3	2／3	D		口縁：ナデ　胴上半：箆重四角文　胴下半：ハケ→箆磨き	箆磨き	
449	甕		7.0		1／3	D		ハケ→箆磨き	ハケ→箆磨き	
450	壺	17.5			完	C		口縁：箆磨き・赤彩　頸：T字文B　胴：箆磨き・赤彩	口縁：箆磨き・赤彩 胴：ハケ	
451	壺	10.6			2／3	B		箆削り→箆磨き　底部：箆削り	ハケ→ナデ	
452	壺	15.6			1／3	CD		箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
453	壺	14.2			1／4	C		口縁：箆磨き・赤彩　頸：櫛簾状文（２連止め）	箆磨き・赤彩	
454	甕	10.5	4.5	12.4	完	D		頸：櫛直線文→口縁：櫛波状文（上→下） 胴：櫛波状文（上→下）	ハケ→箆磨き	
455	甕	22.4			1／4	D		頸：櫛簾状文（２連止め）→口縁：櫛波状文４（下→上） 胴：櫛波状文（上→下）	箆磨き	
456	甕	20.2			1／4	C		頸：櫛簾状文（２連止め）→口縁：櫛波状文３（下→上） 胴：櫛波状文	ハケ→箆磨き	
457	甕	16.5			1／4	D		頸：櫛簾状文（３連止め）→口縁：櫛波状文３ 胴：櫛波状文（上→下）	ハケ→箆磨き	
458	甕	16.6			2／3	C		口唇：面とり　頸：櫛直線文→口縁：櫛波状文２（下→上） 胴：櫛波状文（上→下）	箆磨き	
459	甕	13.4			2／3	D		頸：櫛簾状文（２連止め）→口縁：櫛波状文３（下→上） 胴：櫛波状文（上→下）	箆磨き	
460	高坏	21.8			1／10	C		箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
461	高坏				2／3	C		箆磨き・赤彩	坏：箆磨き・赤彩 脚：ナデ	
462	坏	14.8	4.4	5.0	1／3	C		箆磨き・赤彩　底部：箆削り	箆磨き・赤彩	
463	高坏	12.2			2／3	B		箆磨き・赤彩	箆磨き・赤彩	
464	高坏		10.4		1／2	C		箆磨き・赤彩	ハケ	
465	高坏		9.8		3／4	B		箆磨き・赤彩	ハケ	
466	甑	9.0	4.2	5.0	完	C		ナデ	ナデ	
467	壺	16.4			1／2	D		ハケ→ナデ	ハケ→箆磨き	
468	甕	15.5		16.4	2／3	C		口縁：ハケ→ナデ　脚：ハケ 底部：平底上成形後、丸底化を意識してハケ整形	口縁：ハケ→ナデ 胴：箆平滑化→ナデ	

表16　B区出土土器観察表14

No.	器種	法量（cm）			遺存度	色調	胎土	成形・調整・文様		備考
		口径	底径	器高				外　面	内　面	
469	甕	12.2			1／10	A B	○	ナデ	口縁：ナデ 胴：篦削り	布留
470	甕	11.4			1／4	A B	○	口縁：ナデ　胴：ハケ	口縁：ナデ 胴：ナデ	
471	甕	7.6			1／10	A		ナデ	篦磨き	
472	甕					B	○	凹線文	ナデ	
473	甕					B	○	凹線文	ナデ	
474	甕	23.5			1／6	B		ハケ→ナデ	ナデ	
475	甕	17.6			1／3	C		口縁：ハケ→ナデ　胴：ハケ	口縁：ナデ 胴：篦削り→ナデ	
476	甕	18.8			1／6	C		ハケ→ナデ	ナデ	
477	甕	14.9			1／3	D		ナデ	ナデ	
478	甕	15.6			1／3	D		ナデ	ナデ	
479	鉢	13.5			1／3	C		篦磨き	篦磨き	
480	鉢	14.5	2.8	5.8	2／3	C		口縁：ナデ→篦磨き　胴：篦削り→篦磨き	篦磨き	
481	坏	16.2			1／4	C		篦磨き	篦磨き	
482	高坏		12.0		1／3	C		篦磨き　円形透かし孔3	ナデ	
483	蓋	14.2			1／6	B	○	篦磨き・赤彩　篦刻み、2ケ一対の緊縛孔	篦磨き・赤彩	

表17　B区出土土器観察表15

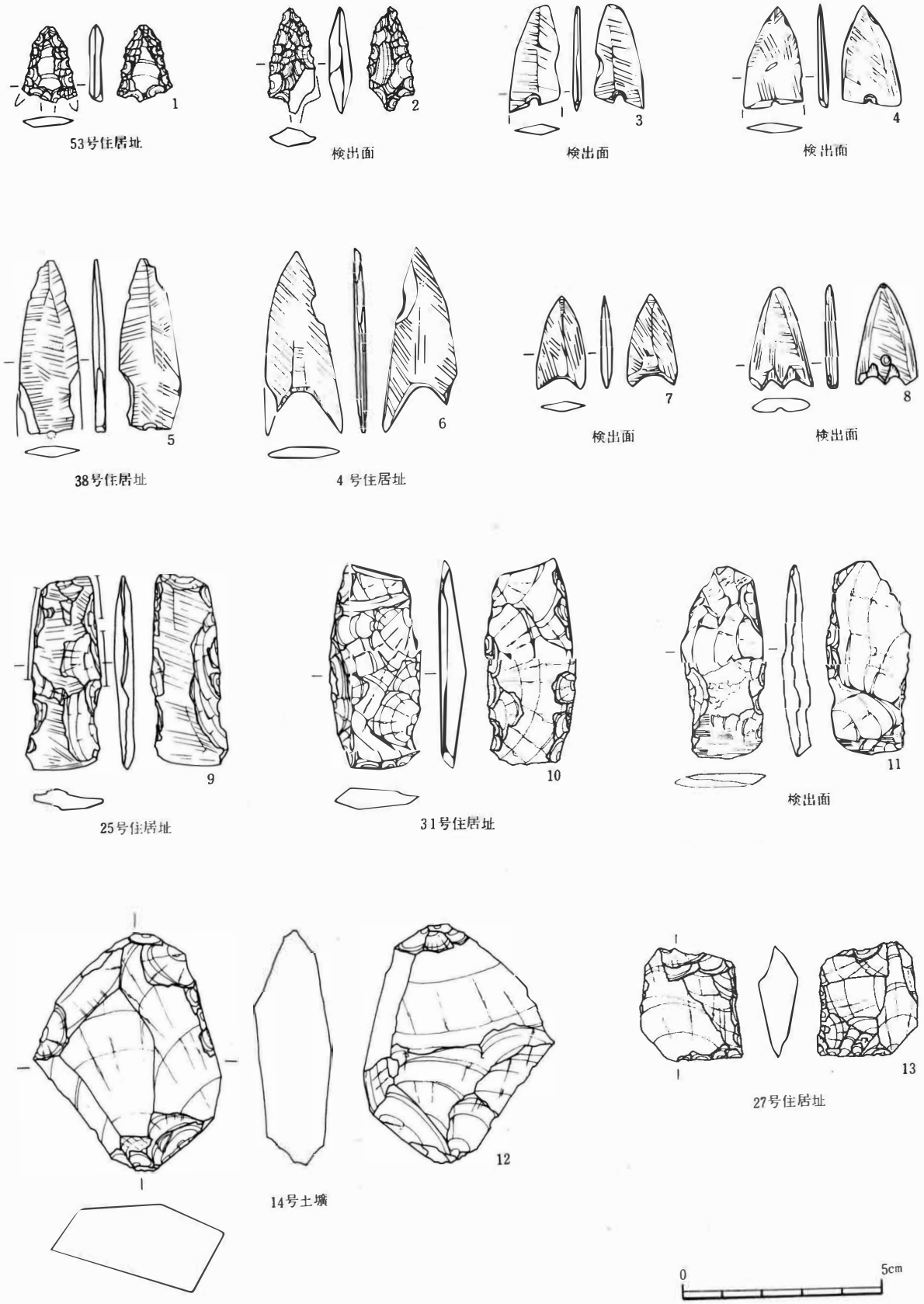


図96　中俣遺跡出土の石器①（2：3）

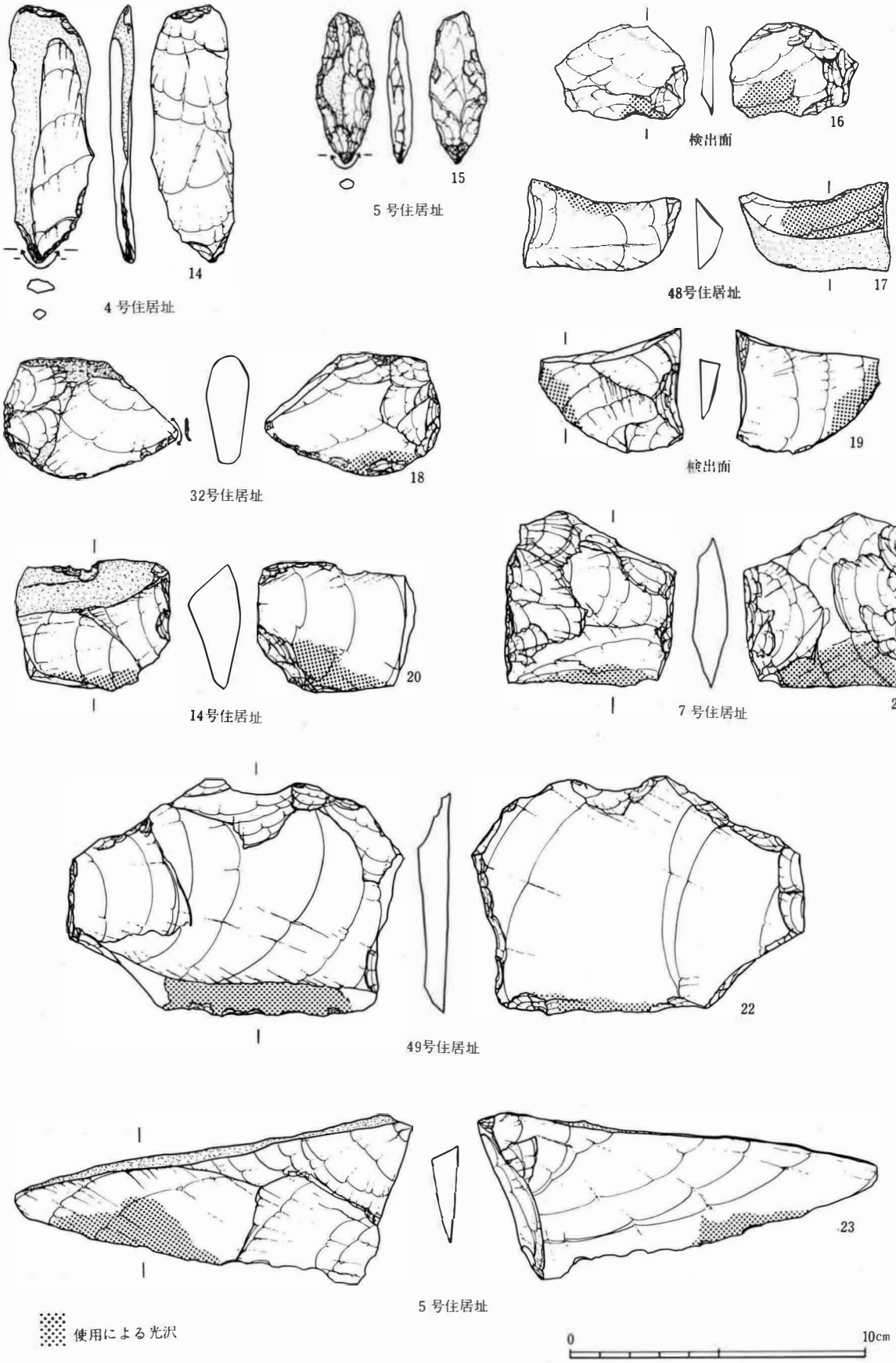


図97　中俣遺跡出土の石器②（1：2）

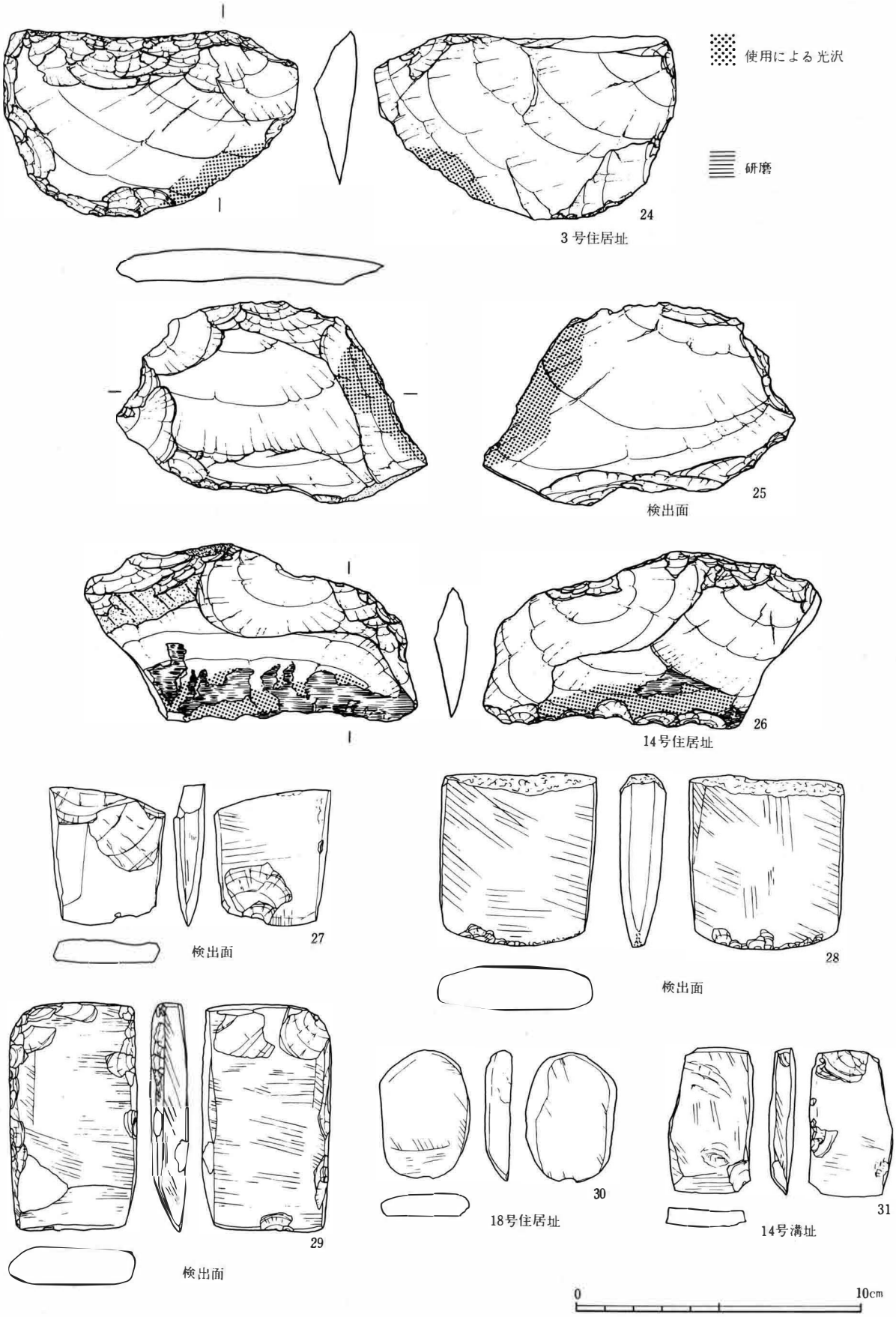


図98　中俣遺跡出土の石器③（1：2）

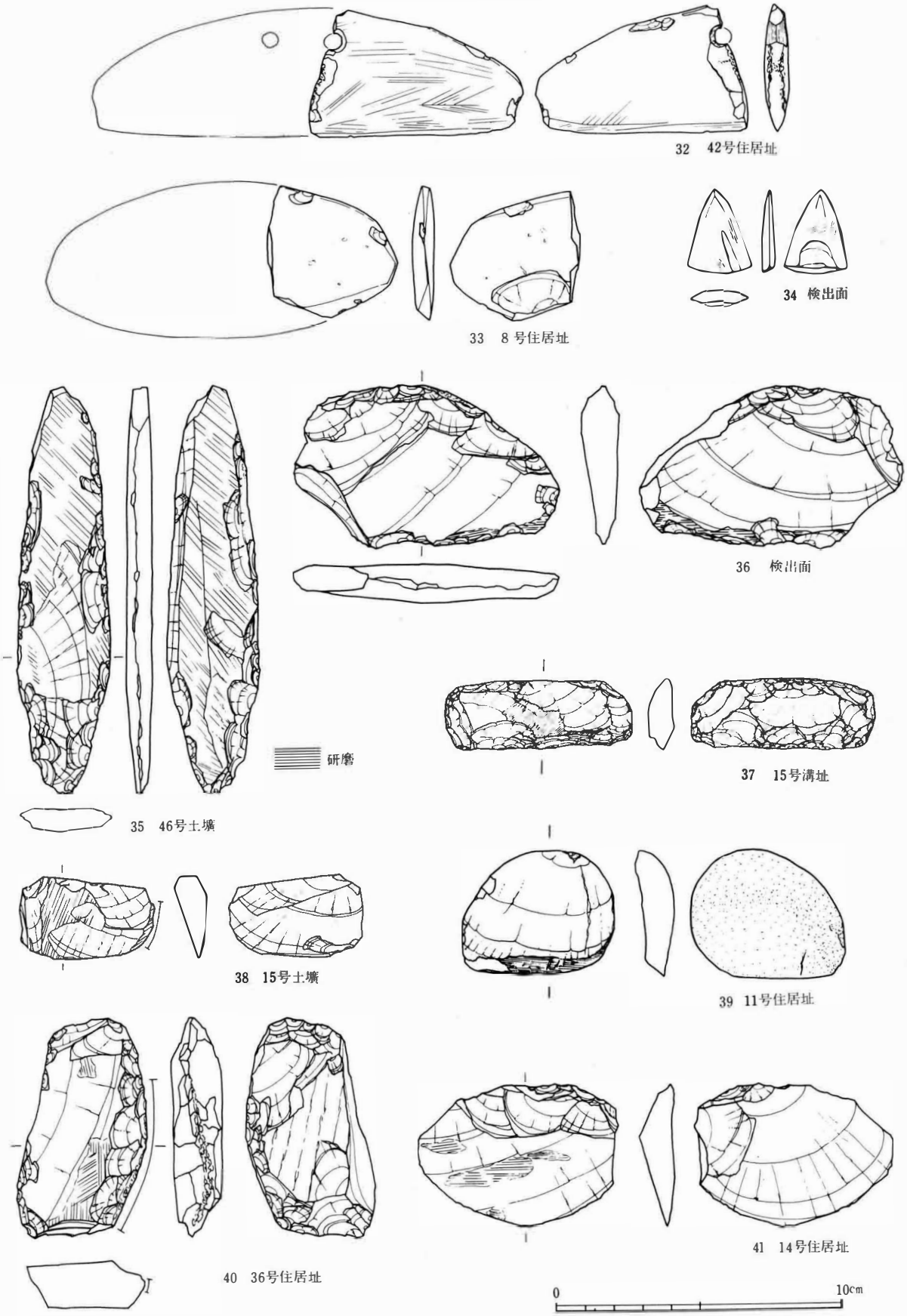


図99 中俣遺跡出土の石器④（1：2）

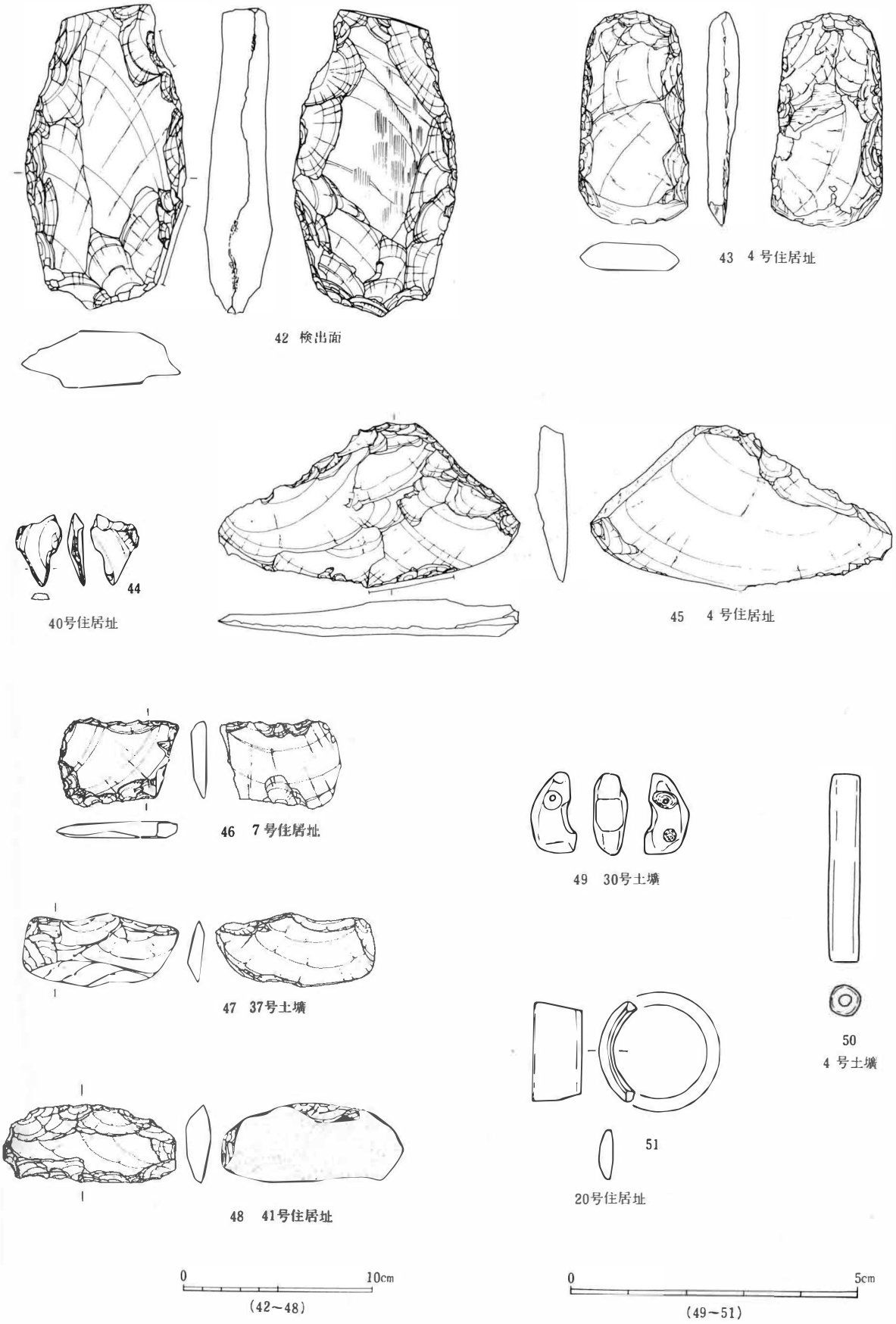


図100 中俣遺跡出土の石器⑤（42～48は1：3、49～51は1：1）

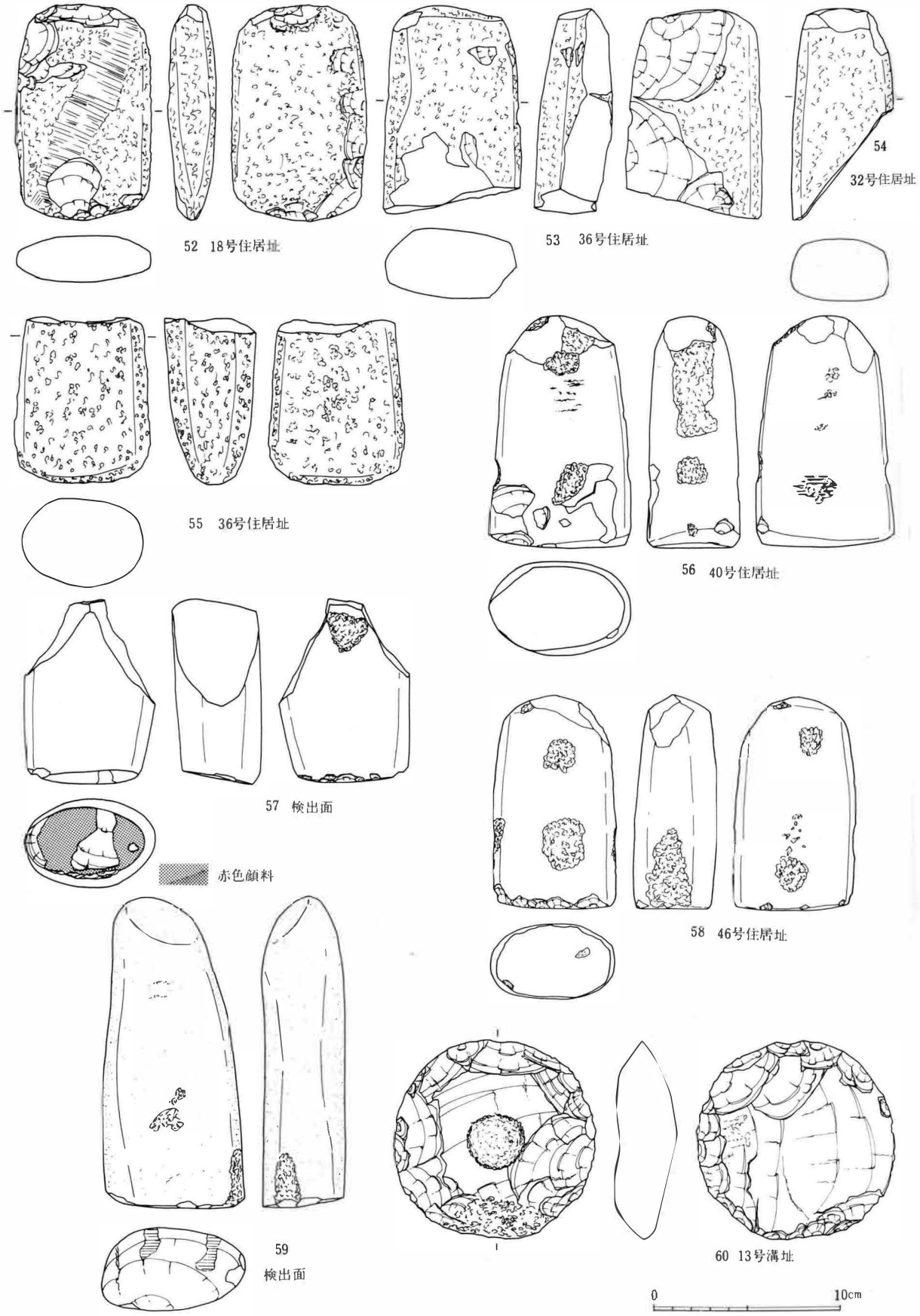


図101 中俣遺跡出土の石器⑥（1：3）

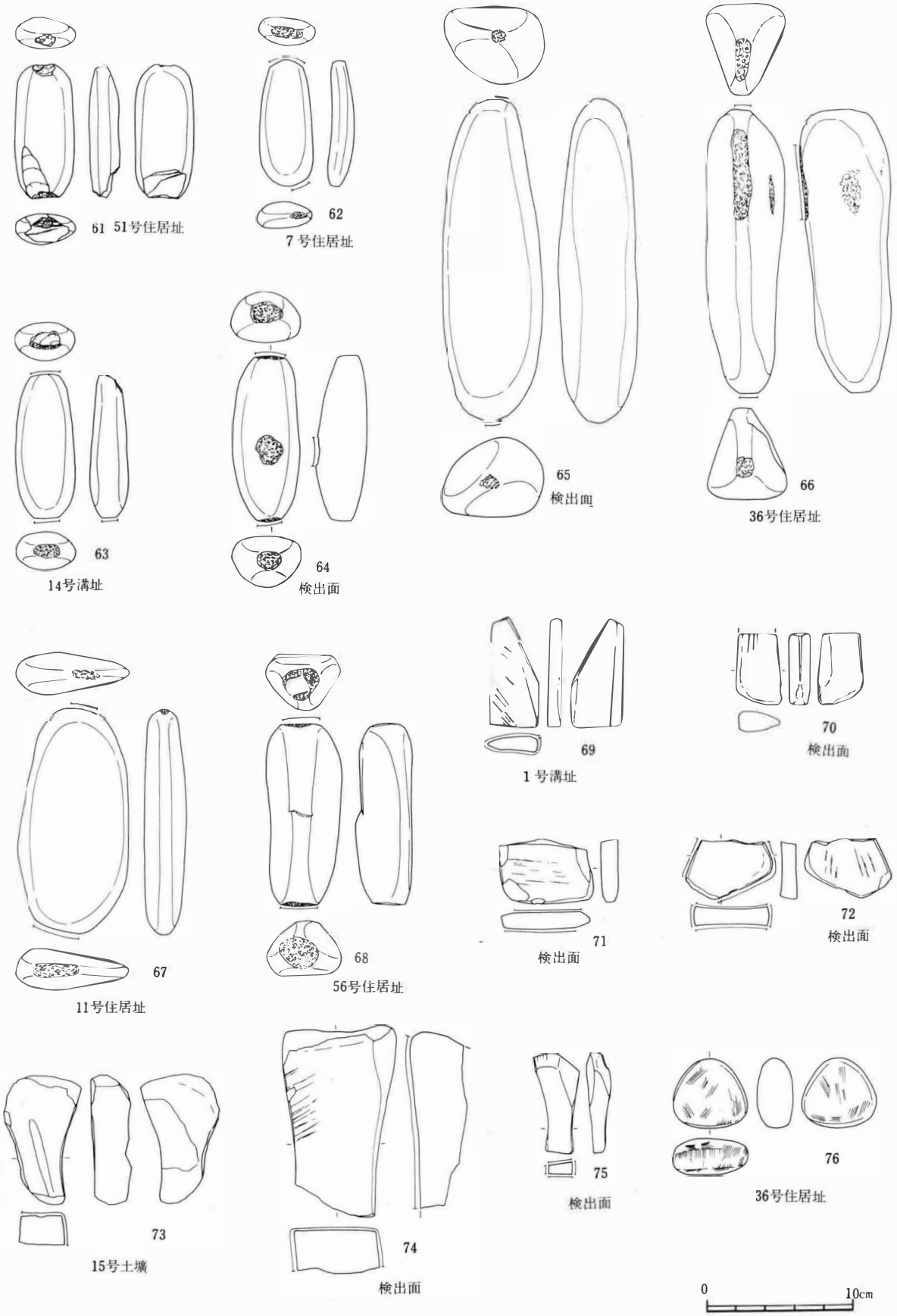
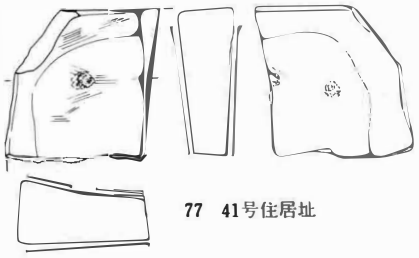
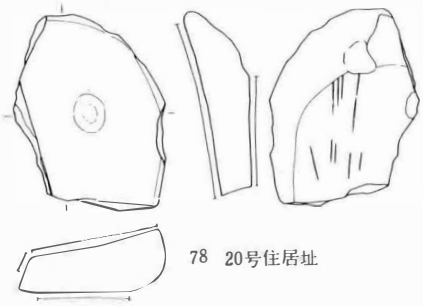


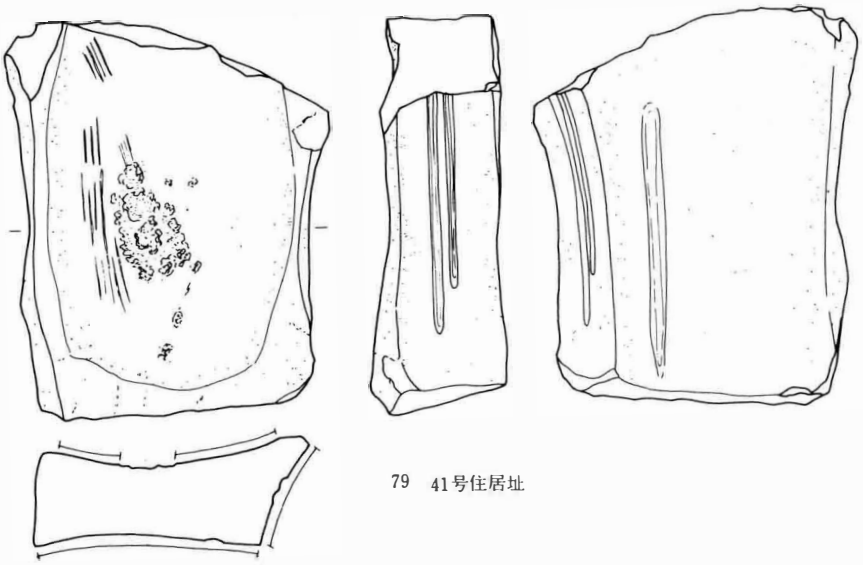
図102　中俣遺跡出土の石器⑦（1：4）



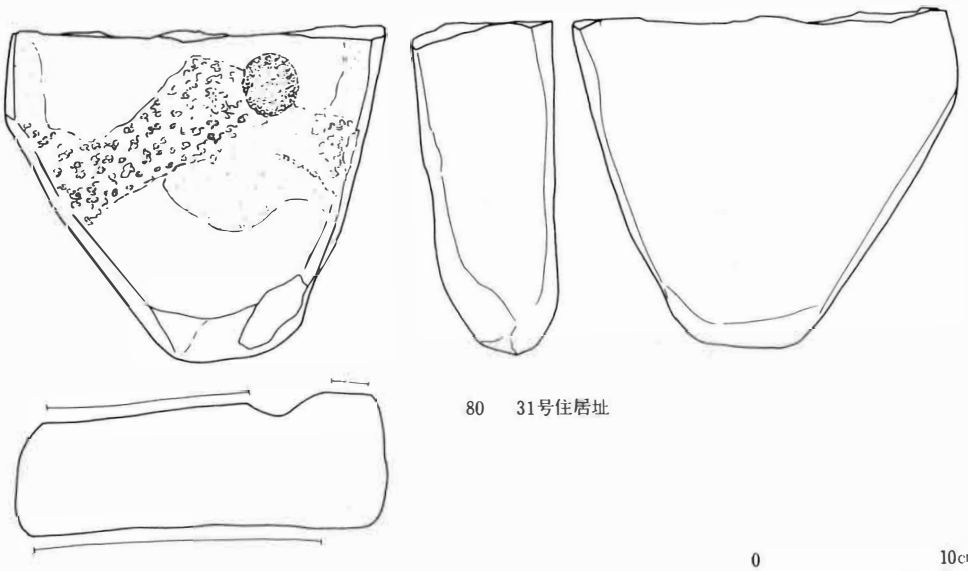
77　41号住居址



78　20号住居址



79　41号住居址



80　31号住居址

0　10cm

図103　中俣遺跡出土の石器⑧（1：4）

出土地点	分類	器種	石材	備考	図版番号
SB53	I 1	打製石鏃	チャート	有茎・欠損	1
3区検出面	I 1	打製石鏃		茎部欠損 270	2
5区検出面	I 2a	磨製石鏃	?	有孔・欠損	3
5区検出面	I 2a	磨製石鏃	?	有孔・欠損	4
SB38	I 2a	磨製石鏃	?	有孔・欠損	5
SB04	I 2b	磨製石鏃		欠損 63	6
5区検出面	I 2b	磨製石鏃	?		7
SB33	I 2c	磨製石鏃		未整品 299	8
SB25	I 3	磨製石鏃未		234	9
SB31	I 4	磨製石鏃未	安山岩	236	10
5区	I 4	磨製石鏃未	安山岩	磨痕 8	11
SKI4	I 12	楔型石器	けい質岩		12
SB27	I 12	楔型石器	けいしつ質		13
SB04	I 5	石錐	安山岩	47	14
SB05	I 5	石錐	安山岩	98	15
検出面	I 7	光沢痕剥片		III 8	16
SK48	I 7	光沢痕剥片		278	17
SB32	I 7	光沢痕剥片		237	18
検出面	I 7	光沢痕剥片		III10	19
SB14	I 7	光沢痕剥片		104	20
SB07	I 7	光沢痕剥片			21
SB49	I 7	光沢痕剥片		320	22
SB05	I 7	光沢痕剥片		31	23
SB31	I 7	光沢痕剥片		236	24
検出面	I 7	光沢痕剥片		III 8	25
SB14	I 7	光沢痕剥片		104	26
2区検出面	I 10b	扁平両刃		半分欠損	27
3区検出面	I 10b	扁平両刃	?	再利用 231	28
検出面	I 7	扁平片刃	?		29
SBI8	I 10a	扁平片刃	?	円礫使用 188	30
SD14	I 10a	扁平片刃	?	296	31
SB42	I 6	磨製石包丁	?	欠損	32
SB08	I 6	磨製石包丁	?	欠損	33
1区検出面	I 8	磨製石剣	?	欠損 13	34
SK46	I 9	石剣未製品	?	248	35
1区検出面	I 11	研磨剥片	?	調整加工有り 93	36
SD15	I 11	研磨剥片	安山岩	283	37
SKI5	I 11	研磨剥片	安山岩	III次	38
SB11	I 11	研磨剥片	安山岩	187	39
SB36	I 11	研磨剥片	安山岩	調整加工有り	40
SB14	I 11	研磨剥片	安山岩	104	41
2区検出面	I 16	打製石斧 ?	安山岩	119	42
SB04	I 10a	扁平片刃		局部磨製石斧 63	43
SB40	I 15a	re．fl			44
SB04	I 14	u．fl．re．fl	安山岩	63	45
SB07	I 15a	re．fl	安山岩	162	46
SK37	I 14	u．fl．re．fl	安山岩	131	47
SB38	I 14	u．fl．re．fl	安山岩	290	48
SB18	III 2	敲石	輝緑岩	研磨痕有り 313 ?	52
SB36	III 2	敲石	輝緑岩	欠損 260 ?	53
SB32	III 2	敲石	輝緑岩	欠損・焼け跡有り ?	54
SB36	III 2	敲石	輝緑岩	欠損 260	55
SB40	III 4a	石槌	輝緑岩		56
5区	III 4a	石槌	輝緑岩	欠損・赤色顔料	57
SB46	III 4a	石槌	輝緑岩	赤色顔料	58
2区検出面	III 4b	石槌	安山岩	?	59
SDI3	I 13	環状石斧未	輝緑岩	未製品155	60
SB51	III 1a 1	敲石	?		61
SB07	III 1a 1	敲石	安山岩		62
5区	III 1a 1	敲石	安山岩	僅かなツブレ痕	65
SB36	III 1a 2	敲石	安山岩	稜上に敲打痕有り ?	66
SB11	III 1a 1	敲石	安山岩	扁平な礫	67
SB56	III 1a 1	敲石	安山岩		68
SD01	III 3e	砥石	砂岩		69
5区検出面	III 3e	砥石	砂岩	欠損	70
3区検出面	III 3d	砥石	?	欠損	71
5区	III 3d	砥石	?	欠損	72
SK15	III 3a	砥石	?	線刻・有溝	73
5区検出面	III 3a	砥石	?	欠損	74
5区	III 3a	砥石	?	線刻・欠損	75
SB41	III 3c	砥石	砂岩 ?	欠損・焼け跡有り	77
SB20	III 3c	砥石	砂岩 ?	線刻・欠損	78
SB41	III 6	大形砥石	砂岩	316	79
SB31	III 5	台石		287	80
SK30		勾玉			49
SK04		管玉			50
SB20		指輪状石製品			51

表18 出土石器観察表

第4章　遺物各説

1　土器

1　Ⅰ期の土器

壺形土器　口縁部形態からは大きく単純口縁のものと受け口状口縁のものに二分されるが、単純口縁のものは口縁部がハの字状に長く大きく外反して終わるもの（81・92・150など）、細い頸部からくの字状に短く外反して終わるもの（421）、太い頸部から短く外反して終わるもの（143・144）に分類できる。また受け口状口縁のものは、口縁部が明確な稜をなして立ち上がるもの（20・60）と、内彎ぎみに立ち上がるもの（126・161・427）が存在する。胴部形態は胴下半に最大径を有し、胴上半は長めの頸部から内ぞりぎみに最大径部分へと移行するこの時期の典型的な形態のものが主体を占めるが、（421）のように条痕文系壺形土器の伝統を残すものも残存している。また（144）は頸部内面に把手状の突起を付けるもので、初めて確認された器種である。（145・430）といった小型品も存在する。

口唇部文様は縄文が施文されるものや山形突起を付けるものが主体を占め、（91）のように篦による刻みを施すものは例外的である。口縁部文様は受け口状口縁のものに限られるが、縄文を地文として篦描山形文を施すもの（60・161）、篦描重山形文と円形浮文を施すもの（20）が認められる。また（20）は口縁部直下に二孔一対の緊縛孔が穿孔されている。頸部文様は　a類　縄文と篦描文で構成されるもの、b類　篦描文のみで構成されるもの、c類　櫛描文と篦描文で構成されるもの、d類　篦描文・櫛描文・縄文で構成されるものが認められるが、主体はa・b類で櫛描文が加わるものは少ない。a類はさらに　1類　縄文帯の上端を直線文で区画するもの（148・150）、2類　縄文を地文として複数の直線文を施文するもの（25・57・429）、3類　縄文を地文として複数の直線文を施文し、下端を山形文で画するもの（21・96・112・151）に分類される。b類はさらに1類　直線文のみを施文するもの（81・97・421）、2類　直線文と山形文を施文するもの（91）、3類　山形文のみを施文するもの（93）に分類される。c類は櫛描直線文もしくは波状文施文後に篦描山形文を施文すもの（28・432）、d類は篦描直線文によって区画した文様帯内に、縄文と簾状文を充塡するもの（164）が認められる。胴部の文様構成は大きく　a類　頸部から胴下半まで文様が施文されるもの、b類　頸部から胴中位付近まで無文のまま残され、胴中位から下半に文様が施文されるもの、c類　頸部以下無文のものに分類できる。a類は懸垂文が施文されるものである。懸垂文には　櫛描直線文を篦連続刺突で区画するもの（28・92）、櫛描波状文を篦連続刺突で区画するもの（137）、櫛描直線文を篦描沈線で区画するもの（30・95）が存在し、また櫛描直線文上に篦描山形文を施文するもの（154）も存在する。（421・430）などに認められる縦方向の篦描山形文も懸垂文と同様の範疇で理解できよう。a類の胴部下半の文様は、篦描重山形文が描かれる場合が多い。回転運動を利用しないで描く懸垂文は、同じく回転運動を利用しないで描く重山形文と結び付く割合が高いものといえようか。重山形文には波状文を充塡するもの（28）、櫛描直線文を充塡するもの（154）と篦描のみのもの（137）が認められる。b類には確実なものとして（29・99）が存在する。b類は栗林式期の古段階に盛行する多段帯状化した文様帯の退化形態である可能性が高く、胴下半の文様は篦描連弧文が多用されるようである。今回の調査ではこのほかに矢印状の記号を施す例が確認されている（151・423）。ともに肩部から胴上半にかけて施され、篦描である。この「矢印」記号は農耕祭祀と密接な関係を持つ可能性が指摘されているが、善光寺平での検出例はこれが初めてであり注目されよう。

甕形土器　大型・中型・小型の3器種が存在する。口縁部形態は単純口縁のものと受け口状口縁のものが存在

するが単純口縁が主体を占める。単純口縁のものは頸部より「くの字」状に短く屈曲して終る形態が主流となるが、屈曲の度合いが小さく頸部から短く緩やかに外反して終るａ類（105・106・121・157）と、屈曲の度合いが大きく頸部から短く「くの字」状に外反して終るｂ類（38・66・68・103）とに分類しうる。ａ類は栗林式の中でも比較的古い時期に盛行するものであり、またｂ類は新しい時期に出現するものである。ｂ類の中でも（38）のような内面に稜をなして鋭く屈曲する形態の存在を考えるとき、ａ類からｂ類への時間的変化を想定するよりもａ類を在地的な伝統を残すもの、ｂ類を他地域からの影響のもとに新たに出現してくる器種として系統差のもとに理解しうる可能性も考えられる。胴部形態は、胴部最大径を中位に持ち胴部径が口径を上回るものと、胴部最大径を中～上位に持ち口径と胴部径がほぼ等しいかやや上回るものに分類できるが、前者はａ類口縁のものに、後者はｂ類口縁のものに多い傾向が認められる。

口唇部文様は縄文が施文されるのみのものが主体を占める。口唇部に縄文、口縁部に櫛状工具による刺突を行うもの（157）、口唇部に縄文施文後指頭による押捺をなすもの（425）、篦状工具による刻みを施すもの（37・127）なども存在するがこれらは例外的な存在でしかない。口縁部文様は受け口状口縁のものに認められるが縄文地文上に篦描山形文を施すもの（67）や、篦描山形文のみ施文するもの（65）が存在する。単純口縁のものは口縁部は基本的に無文である。頸部文様には櫛描直線文（68・425）・櫛描波状文（18・19・36・104・105）・櫛描簾状文（127）が認められるが、櫛描簾状文は例外的な存在でしかない。胴部文様は櫛描文系と篦描文系に分類できるが、主体を占めるのは櫛描文系である。櫛描文系には縦羽状文（18・36・68・104・127）・単斜条痕（38・66）・波状文（103）・区画波状文（156・157）・横羽状文（121・424）が認められるが主体をなすのは縦羽状文で、横羽状文は２点のみである。また区画波状文は、直線文によって区画した後に波状文を充填する（157）と、波状文を施文した後に直線文によって区画する（156）ものが認められる。頸部に波状文を施文するのみで胴部文様は施文しない（37・106）のような例も存在する。胴部文様は櫛描横羽状文が基本的に消滅して櫛描縦羽状文が文様の主体となり、頸部文様は未だ簾状文が盛行しない点本遺跡出土資料の特徴ととらえられよう。篦描文系としては（67）が存在する。形態・文様構成の面からは広口壷ともとらえられるが、内面はハケ整形後篦磨きされており、ここでは一応甕ととらえておく。胴中位に山形文と直線文を交互に施文し、胴下半は３本の連弧文を描き壷に見られる文様構成と基本的には一致する。

台付甕形土器　大型品と小型品が存在するが、先ず口縁部形態からは　Ａ類　単純口縁のもの（69～71など）Ｂ類　受け口状口縁のもの（110・112・108など）の二つに分類できる。Ａ類はさらに「くの字」状に緩やかに屈曲するもの（69・70など）と「くの字」状に短く強く屈曲するもの（76）が存在する。Ｂ類は受け口部が比較的明確な稜を形成するもの（108・112）と受け口部が内彎して立ち上がるもの（110）が存在する。胴部形態は最大径を胴中位～上位に有し、球形に近い形態を呈するものと、最大径を口縁部に有し胴部は頸部から直線的に集約して終る形態が存在するが、これらは口縁部形態Ａ・Ｂ類ともに認められる。脚部形態は比較的直線的に外開しやや大型のもの（69～71）と、器高が低く器壁も厚い鈍重な感じのもの（76）が認められ、前者から後者への時間的推移が想定される。

口唇部文様は縄文が施文されるものと無文のものが存在するが、刻みがなされるものは存在しない。胴部文様は基本的に櫛描文系と篦描文系に二分できる。櫛描文系には縦羽状文（69・71）・コの字重ね文（111・112）・波状文（39・88）が、篦描文系にはコの字重ね文（70・108）・山形文（107）が認められる。（111・112）の櫛描コの字重ね文は篦描コの字重ね文からの推移が、また（110）の櫛描粗大波状文は櫛描縦羽状文からの推移が想定されるが、供伴資料の様相からは大きな時間差は想定しえず、あるいは系統を異にするものと理解したほうがよいかもしれない。

蓋形土器　貯蔵用と煮沸用の二者が認められる。壷用（437・438）は、内外面ともに赤彩され端部付近に二孔一対の緊縛孔が穿孔される。やや器高の高い（438）と偏平な（437）の二者が認められる。おそらく無頸壷とセットになって使用されたものと考えられる。

甕用はａ類　器高が高く笠形を呈するもの（73・89・115）、ｂ類　器高・口径ともに小さく偏平なもの（49・78・116）が存在する。ともに頂部に明瞭なつまみを作り出すのが特長で、またいずれもつまみ部中央は凹む。

甑形土器　大型（152）・中型（117）・小型（136）が存在する。いずれも底部からやや内彎ぎみに立ち上がる形態を取り、底部には焼成前の穿孔が一孔なされる。（152・117）の内部には灰白色の付着物が認められる。（136）は内外面ともに赤彩されるもので、他とは機能上の差異が想定される。

高坏形土器　ａ類　坏部が内彎ぎみに立ち上がる形態のもの（54・435）・ｂ類　坏部が中位で屈曲して立ち上がり、口縁は水平口縁をなすもの（87）・ｃ類　坏部が断面逆三角形状をなし脚部は低く大きく広がるもの（159）の三者が認められる。ｂ類とした（87）は水平口縁をなすが連続的に山形突起が付され、また坏部形態も中位でいったん屈曲するなど中期の資料としてはやや特異なものである。今回の調査ではこのほかに水平口縁を有する高坏は検出されていない。ｃ類とした（159）は脚部まで残存する唯一の例である。脚部には二孔一対の緊縛孔が穿孔され、また脚内面まで赤彩される特異なものである。脚部では他に坏部と脚部の接合部外面に断面三角形の粘土帯を貼りつける（158）が存在する。

坏形土器　口縁部形態の違いから　ａ類　水平口縁を呈するもの・ｂ類　単純口縁を呈するものとに分類できる。水平口縁を呈するａ類は大型（62・120）と中型（85）が存在する。ともに内外面とも赤彩され、また口縁屈曲部下に二孔一対の緊縛孔を穿孔したり、口唇部に山形突起を付す例が多い。単純口縁のｂ類は大型（119）・中型（152）・小型（118）が存在する。基本的には底部より内彎ぎみに立ち上がる形態を取るが、（439）のように直線的に外反して終る小型品も存在する。口縁部に二孔一対の緊縛孔を有するものが多く、また（118）のように楕円形の粘土を貼りつけるものも存在する。いずれも内外面ともに赤彩される。

片口形土器　大型（72）と小型（77）が存在する。（72）は口縁部に縄文施文後２本の篦描山形文を施文し、文様帯以外は赤彩される。また片口部の反対側に二孔一対の緊縛孔を有し、内面も赤彩される。

これらＩ期の土器群は、57号土壙出土資料がやや時間的に先行する可能性が高いが、その他のものについては大きな時期差は認められず、栗林式土器の後半段階に位置付けることが可能であろう。

2　III期の土器

13号溝址出土土器について

前章でも述べたごとく、本溝址は３～５区に展開する集落の南端を区画する溝址である可能性が高く、出土土器の様相からII期に掘削されIII期初頭に大量の土器群が投棄され、溝としての機能を失ったものと考えられる。

覆土中層を中心として在地の箱清水式系の土器と外来系土器が混在する状況で出土している。

在地の箱清水式系の土器としては壷（277～279・284）・甕（304～321）・高坏（336・338～342・345・347～349）が存在する。壷はいずれも小型品で他に類例はないが、頸部文様を欠くもの（277・278）や器形の崩れ、内面篦削りの技法の導入（277）等新しい特徴を備えたものといえよう。

甕は文様の面からすれば、箱清水式の伝統を保つものと、形骸化した伝統を残存させるのみのものとに分けて考えることができる。前者は頸部簾状文を最初に施文した後に、口縁部は下から上の順に、胴部は上から下の順に波状文を施文するもので（304・307・312）が存在する。後者はこの施文規範が崩壊したもので、口縁部から胴部に波状文を施文した後に頸部簾状文を施文するもの（311・313）や頸部簾状文を欠くもの（305）などが存

在する。(305・308) などは口縁部に面取りを施すが北陸方面からの影響の可能性も考えられよう。

整形は基本的に外面胴下半と内面全体にていねいな篦磨きを行うが、(305) のように内面に軽い篦削りを行うものも認められる。(314) は、おそらく内外面とも篦磨きされるのみで文様は施文されず、頸部の屈曲も著しくなるなど、箱清水式系土器の最終末のものととらえられよう。

高坏には、坏部が底部より内彎しつつ立ち上がって終るもの (336・338・340・341) と、坏部中位で屈曲した後に口縁部が外反して終わるもの (339・342) が存在する。前者の中でも (336) はほぼ完形品で、脚部には三角形透かし孔を4孔もつ。類例は少なく、この時期になって他地域の影響下に新たに出現してくる器種である可能性も高い。同様の形態としては年礼バイパスA地点遺跡1号・2号住居址出土資料があるが、脚部が大きく発達している点や、篦磨き・赤彩される点など本資料のほうが時間的に先行する可能性が高い。

外来系の土器には、壷・ヒサゴ壷・甕・高坏・器台・蓋等が存在する。ヒサゴ壷 (内彎長頸壷) (274～276) は、いずれもやや短頸で、体部が口頸部に比べて著しく大きい形態を呈する。胴部は最大頸部位を低位にもち完全な下ぶくれ状を呈し、丸底で小さく底部が凹む独特な形状を呈する。また外面調整は基本的に縦方向の篦磨きで仕上げられる。これらの特徴はいずれも尾張の廻間II式期の様相と一致するものととらえられる。

甕には平底甕と台付甕がある。平底甕で全形をうかがえるものとしては (286・292) が存在する。共にやや突出する底部をもつ点特徴的である。台付甕では (288・289・298～302・322～329) がある。(288・289) は同一個体と考えられるが近江もしくは濃尾平野にその系譜が求められよう。(330) は別個体であるがやはり同様の口縁部破片である。(298～300) などは濃尾平野のくの字状口縁台付甕との関連が予想されよう。

高坏には (334・335・337) がある。(334) は坏部が有段となる比較的大型の高坏で、坏部内面に明確な斜面をもち、また脚部は微妙ではあるが内彎脚を呈する点よりすれば、廻間II式期の範囲内で理解することが可能であろうか。(335) は小型の有稜高坏であるが、布留1式併行期と推定される更埴市灰塚H1号住居址出土資料と比較するならば、坏部屈曲部の稜が明瞭で坏部形態も内彎傾向を示す点、時期的にさかのぼる特徴と考えられよう。

以上の点よりすれば本溝址出土資料の時間的位置は、濃尾平野の廻間II式、尾張の元屋敷 (古) 段階、畿内の纒向3式、北陸の白江式に大まかに併行するものととらえることができよう。ただし出土状況等からは明確な一括性は保証しえず、詳細は将来的な検討に委ねたい。

引用参考文献

長野市教育委員会　1982 『浅川扇状地遺跡群―年礼バイパスA・E地点遺跡―』

愛知県埋蔵文化財センター　1990 『廻間遺跡』

更埴市教育委員会　1971 『下条・灰塚』

長野市教育委員会　1990 『篠ノ井遺跡群III』

宮腰健司　1987 「尾張における欠山式土器とその前後」『欠山式土器とその前後：研究・報告編』

関川尚功　1976 「畿内地方の古式土師器」『纒向』

寺沢　薫　1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』

田嶋明人　1986 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』

2　石器

中俣遺跡より出土した石器または未整品は234点、石核11点、剥片多数である。その多くは出土した土器からみて、殆どが弥生時代のものである。これらのうち、石器及未整品について分類し、以下にそれを示す。剥片を素材としたものをⅠ群、礫を素材としたもののうち剥片剥離調整加工が施されているものをⅡ群、礫を素材としたもののうち研磨及び敲打による加工を施したものをⅢ群とした。

Ⅰ群

Ⅰ1群（図96－1・2）　剥片を素材とし、剥片剥離調整加工により、尖端と逆刺と茎部を明瞭に作り出しているもの。有茎の打製石鏃である。2点出土。2点とも茎部を欠損している。

Ⅰ2群（図96－3～8）　剥片を素材とし、全面が研磨され、尖端と逆刺が作り出されているもの。磨製石鏃である。6点出土。これらのうち、有孔のものをa類、無孔のものをb類、穿孔途中のものをc類とする。

Ⅰ3群（図96－9）　剥片を素材とし、平面形は長方形、厚さは5㎜程度と非常に薄く、表裏両面と側面が研磨されているが、研磨は全体には及ばず剥離面が残されているもの。研磨面は線状痕が明瞭に見られる。1点出土。

Ⅰ4群（図96－10・11）　剥片を素材とし、剥片剥離調整加工を全面に施し、平面形は長方形、厚さ5㎜程度と非常に薄いもの。6点出土。11は端部に研磨痕が認められる。

Ⅰ5群（図97－14・15)尖端部を作り出し、その尖端部に摩耗痕が認められるもの。石錐である。2点出土。

Ⅰ6群（図99－32・33）　全面が研磨され、一側辺に鋭利な刃部を作り出し、刃部の対辺側に穿孔があるもの。磨製石庖丁である。4点出土。32は両刃、33は片刃である。4点とも欠損しており原形は不明である。

Ⅰ7群（図97・98－16～26）　剥片の周辺部に光沢痕をもつもので、形状は不定形で大きさも一定ではない。12点出土。21・25は剥片剥離調整加工が施されており、26は剥片剥離調整加工及び研磨が施されている。他のものは剥片をそのまま使用したものである。

Ⅰ8群（図99－34）　全面を研磨した剣形の石器と思われるもの。石剣である。1点出土。先端部のみの欠損品。

Ⅰ9群（図99－35）　偏平な剥片を素材とし、剥片剥離痕と研磨痕が認められる剣形の石器。1点出土。剥片剥離調整加工を行った後、研磨を行っていることが観察される。研磨された部分には、線状痕が明瞭に見られる。8群（石剣）の未整品と考えられる。

Ⅰ10群(図98－27～31･図100-43)全面または一部が研磨され、研磨により一側縁部に鋭利な刃部を作り出した偏平な斧形の石器。8点出土。片刃のものをa類、両刃のものをb類をする。28は刃部が潰れており、欠損部は欠損後に敲打られている。43は刃部が丁寧に磨かれており、表裏面と側縁部に僅かな研磨痕が認められるのみで全面には研磨が及んでいない。

Ⅰ11群（図99－36～41）　剥片の一部に研磨痕が認められるもので、形状は不定形で大きさも一定ではない。12点出土。調整加工があるものをa類、調整加工がないものをb類とする。36は側縁部両面に研磨が認められ、剥片剥離調整加工と研磨の前後関係は不明である。38は表面部とエッジに研磨痕が認められる。40は側縁部に敲打によるツブレが認められ、また、研磨は剥片剥離調整加工のあとであることが観察される。

Ⅰ12群（図96－12～13）　対峙する辺に剥離痕があり、両極打法による剥離が認められる剥片。契形石器である。15点出土。形状と大きさは一定していない。

Ⅰ13群（図101－60）　分厚い剥片の全周に剥片剥離調整加工を施し、平面形状を円形に整えているもの。片面の中心部に敲打による凹みが認められる。1点出土。形状から環状石斧の未製品と考えられる。

Ⅰ14群（図100－45）厚さ1㎝前後の大形の剥片を使用し、形状を大きく変えることなく、剥片の鋭利な側縁に使用または調整加工による5㎜以下の小さな剥離痕が認められるもの。形状及び大きさは一定ではない。19点出土。

Ⅰ15群（図100－44）剥片剥離調整加工が施されているものを一括した。表裏両面より調整加工が施されているものが多く、何らかの形状を作り出そうとしていると思われるが、一定の形状は見出せないものを一括した。11点出土。

Ⅰ16群（図100－42）剥片剥離調整加工が施されているもので、14・15群に比べ厚く大形のものを一括した。42は側面に敲打痕があり、裏面には摩耗痕が認められ、打製石斧を連想させる形状である。打製石斧であった場合、刃部と予想される部分には使用痕は認められない。他のものは破片であったり、打製石斧とされるものであったとしても再加工により変形されており、明らかに打製石斧といえるものは他には見出せない。9点出土。

Ⅱ群

Ⅱ1群　偏平な礫の周辺部を打ち欠いているもの。偏平な楕円形の川原石を用いたものをa類、それ以外の偏平な角礫を用いたものをb類とする。a類が5点出土、b類が5点出土。

Ⅱ2群　剥片を剥した残核を一括した。形状及び大きさは様々であり、両極打法により剥片を剥したものと、通常の剥片剥離のものがある。両極打法によるものは、いずれもチャートの円礫で自然面を残している。11点出土。

Ⅲ群

Ⅲ1群（図102－61～68）川原石を素材とし、敲打痕が認められるもの。敲石である。41点出土。

a類　細長い棒状の川原石に敲打痕を持つものである。これらのうち棒状礫の両端にツブレ痕を持つものを1種、両端のツブレ痕の他に平坦部に窪んだ敲打痕を持つものを2種とする。

b類　a類と比べると棒状ではなく楕円形に近い平面形状の礫を用いるもの。端部にツブレ痕を持つものを1種、端部のツブレ痕のほかに平坦部に窪んだ敲打痕を持つものを2種とする。

Ⅲ2群（図101－52～55）全面を敲打されているもの。形状は平面形が長方形と想定され、断面形は楕円形または角丸の方形を示す。52は他のものに比べ偏平であり、研磨痕が認められる。

Ⅲ3群（図102・103－69～78）全面に研磨面をもつもの。砥石である。29点出土。

a類（73～75）　小型で央部がくひれた糸巻き状の形状を呈し、断面は四角形を呈するもの。粒子は細かく表面はスベスベしている。

b類　平坦面を機能面としている。形状は完形品がないため不明であるが、研磨面はa類よりも滑らかでⅢ4群の研磨面と同じ手触りである。

c類（77・78）　表裏両面に皿上に窪んだ機能面を持つもの。完形品が無いため平面形は不明であるが、断面形は、凹レンズ状になる。研磨面は、a類よりもいくらか粗い手ざわりである。

d類（71・72）　小形の偏平な板状のもの。研磨は表裏及び側面に認められ、表裏面の機能面はいくらか凹面を示す。研磨面の手ざわりはc類と似ている。

e類（69・70）　小形の板状のもの。研磨は全面に及び、表裏面の機能面は凸面を示す。研磨面の手ざわりc・d類よりもザラザラしている。

f類（76）　小形の川原石を用い全面に研磨による細かな線状痕が認められる。特に側面部の研摩が著しい。

Ⅲ4群（図101－55～59）棒状の礫の横断面に平坦な研磨面を有し、側面または表裏面に敲打による凹痕を有

	分類	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	II	II	III	III	III	III	III	III	III	III	III	III	III	III	合計
	時期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	1	2	1	2	3a	3b	3c	3d	3e	3f	4	5	6	7	
遺構外		1	3		4			3	1		3	7	5		4	4	4	3		16	1	3	1	4	3	2		4			15	91
SB01															1																	1
SB02	弥生中										1									1												2
SB04	弥生中		1			1					1		2		1	1									1							8
SB05	古墳前					1		1							1		1		1		1											6
SB06															1																	1
SB07	弥生中							1							1	1		1	1	2				1								8
SB08	弥生後						1													1												2
SB09	弥生中				1								1				1			1												4
SB11	欠番											1								1				1								3
SB13															1																	1
SB14	欠番							2				1																				3
SB16															1																	1
SB18	弥生中										1										1											2
SB20	弥生中														1					1				1						1		4
SB23	弥生中																														2	2
SB24	古墳前																														1	1
SB25				1												1																2
SB27	弥生中												1																			1
SB28															1																	1
SB30	弥生後																														1	1
SB31	古墳前				1			1									1												1		1	5
SB32	弥生中							1													1											2
SB33	弥生中		1								1																					2
SB35	弥生末																						1									1
SB36	弥生中							1				1			1					1	2						1					7
SB38	古墳後		1												1																	2
SB39	弥生末												1																			1
SB40	弥生中														1	1				1						1		1				5
SB41	欠番																							1						1		2
SB42	欠番						1																									1
SB43	欠番																	1														1
SB45																					1											1
SB46	欠番																			1								1			1	3
SB48	古墳前												1																			1
SB49								1																								1
SB50	?																									1						1
SB51	古墳前																			1												1
SB53	欠番	1											1				1															3
SB56	弥生後																			5												5
SD01	?											1														1						2
SD02	?											1			1					1				2							3	8
SD13	弥生末						1							1	2	1			1	1								1			1	9
SD14	弥生末										1		1			2				2		1										7
SD15												1					1															2
SK02	?																			1												1
SK06	弥生中																						1									1
SK07	弥生中																			2												2
SK11	?																			1				1								2
SK12	?																		1				1									2
SK13	?						1																									1
SK14	弥生中												1																			1
SK15	?											1										1										2
SK27	?																			1												1
SK37															1																	1
SK44															1																	1
SK46	弥生中									1																						1
SK48								1																								1
合　計		2	6	1	6	2	4	12	1	1	8	14	14	1	21	11	9	5	4	41	7	5	4	11	4	5	1	7	1	2	25	235

表19　出土石器分類表

する。７点出土。全面を研磨痕し太形蛤刃石斧の転用と思われるものをａ種、自然礫を用いたものをｂ種とする。57の横断面には赤色の顔料が付着している。図示していないが同様に横断面に赤色の顔料が付着するものがもう１点出土している。

Ⅲ５群（図103－80）大形の平坦な面をもつ自然礫の平坦面に研磨痕を有するもの。台石である。２点出土。80は両面が研摩されており、表面には敲打痕と敲打による凹みが認められる。

Ⅲ６群（図103－79）大形の礫面に皿状に窪んだ研磨面があり、その面に浅く窪んだ数条の溝が認められるもの。研磨面の手触りはⅢ群ｃ類と類似する。大形の砥石である。２点出土。

Ⅲ７群　軽石で、形状及び大きさはさまざまである。球形または卵に似た形状のものをａ類とし、その他の不整形なものをｂ類とする。

その他（図100―49～51）　勾玉、管玉、指輪形の石製品がそれぞれ１点ずつ出土している。51の指輪形の石製品は図上復元をすると内径21㎜の指輪状の形状を示し、上下の端部は平に面取りがなされている。

2　弥生時代中期の中俣遺跡石器群の概要

出土状況、上記の分類に従い、本遺跡の弥生時代中期の遺構より出土した石器を抽出すると、11群、13群、16群、18群、Ⅰ13群、Ⅲ３ａ群、Ⅲ５群以外は全て弥生中期の遺構内より出土している。（表１９）弥生中期とされている遺構のなかにも弥生後期以降の土器がわずかではあるが混入していることを考慮すると、抽出した石器の全てが弥生中期のものであるとは言い切れないが、作業仮説として抽出した全てを弥生中期の石器としたい。

石器製作　本遺跡で石器製作が行われていると考えられる定形的な形を作り出す器種を挙げるとすると、打製石鏃（11群）、磨製石鏃（12群ａｂ）、石錐（15群）、磨製石包丁（16群）、石剣（18群）、環状石斧、打製石斧、太形蛤刃石斧が挙げられる。磨製石鏃、石剣、環状石斧、太形蛤刃石斧はそれぞれ未製品が存在し、製品または未製品と同じ石材の剥片が出土している。打製石鏃はその製作過程で生じたと思われるチャートの剥片が多数出土している。磨製石包丁はその素材剥片となりうる薄い大形の剥片が数点出土している。以上のように、本遺跡より出土した石器群の定形的な器種を見ると、扁平片刃石斧（Ⅰ10群ａ）以外は全て中俣遺跡内での製作が予想される。扁平片刃石斧についても製品と類似する石材の剥片が出土していることから遺跡内での製作の蓋然性が高いと考えられる。定形的な器種以外の石器も、同じ石材の剥片が存在していることから、遺跡内で製作されたのである。即ち、勾玉、管玉、指輪形の石製品などの石製品以外は、全て遺跡内で製作された器種であると考えられる。しかし、その器種は遺跡内で製作されるものではあるが、個々の石器についてはその全てが遺跡内で製作されたものではなく、遺跡外より製品の形で持ち込まれている可能性も十分考慮しなければならない。

弥生時代中期中俣遺跡の石器群、剥片の分析については十分に行うことができなかったので確定的な結果は示せないが、出土状況からは弥生時代中期の石器と認定されないものについても、その石器製作に関する剥片と未製品が中期の遺構内より出土している。この出土状況を考え合わせると、Ⅲ３群ａとⅢ５群以外は全て中期の石器群に含まれると考えられる。また、遺構内より出土した剥片317点を石材別に分類すると、安山岩（玄武岩も含まれる）212点、チャート・頁岩67点、ハンレイ岩12点、黒曜石２点、その他23点である。　（鶴田典昭）

3　光沢痕のある石器について

これまで長野県の弥生時代においては、使用による光沢痕が認められる石器類をいくつか抽出してきた。こと飯田・下伊那地方にあっては、俗に「ロー状光沢」として呼び習わし、数種にこれを分類してきている。それらは抉入打製石庖丁、横刃型石庖丁、有肩扇状形石器、有抉石器、有柄石器と名付けられ、今日当該期の収穫具としての認識を強めつつある。(註1)こうしたなか、中俣遺跡出土の光沢痕ある資料を観察するに、幾分の相違点を見出し得たので、ここのその特徴を付記しまとめておく。(註2)

先ず第一に従前の認識と大きく異なるのは、中俣の資料の大半が何の調整も施されない単なる剥片を使用している点にある。今回提示した資料のうち小型のものについては、光沢痕がなければ剥片として片付けられてしまいがちなものであるし、大形なものでも剥離痕が単に存在するという次元を脱却すれば、やはり素材をそのまま利用する石器に限りなく近い。(註3)

第二に光沢痕は、特定の部位（刃部）に認められるのであり、使用部の転移はない。

第三に使用部の再生は基本的には行われず、光沢痕の上に剥離痕ないしは研磨痕が観察されることはあっても、その後に使用された痕跡は認められない。

第四に石材はおおかた安山岩・頁岩を使用している。

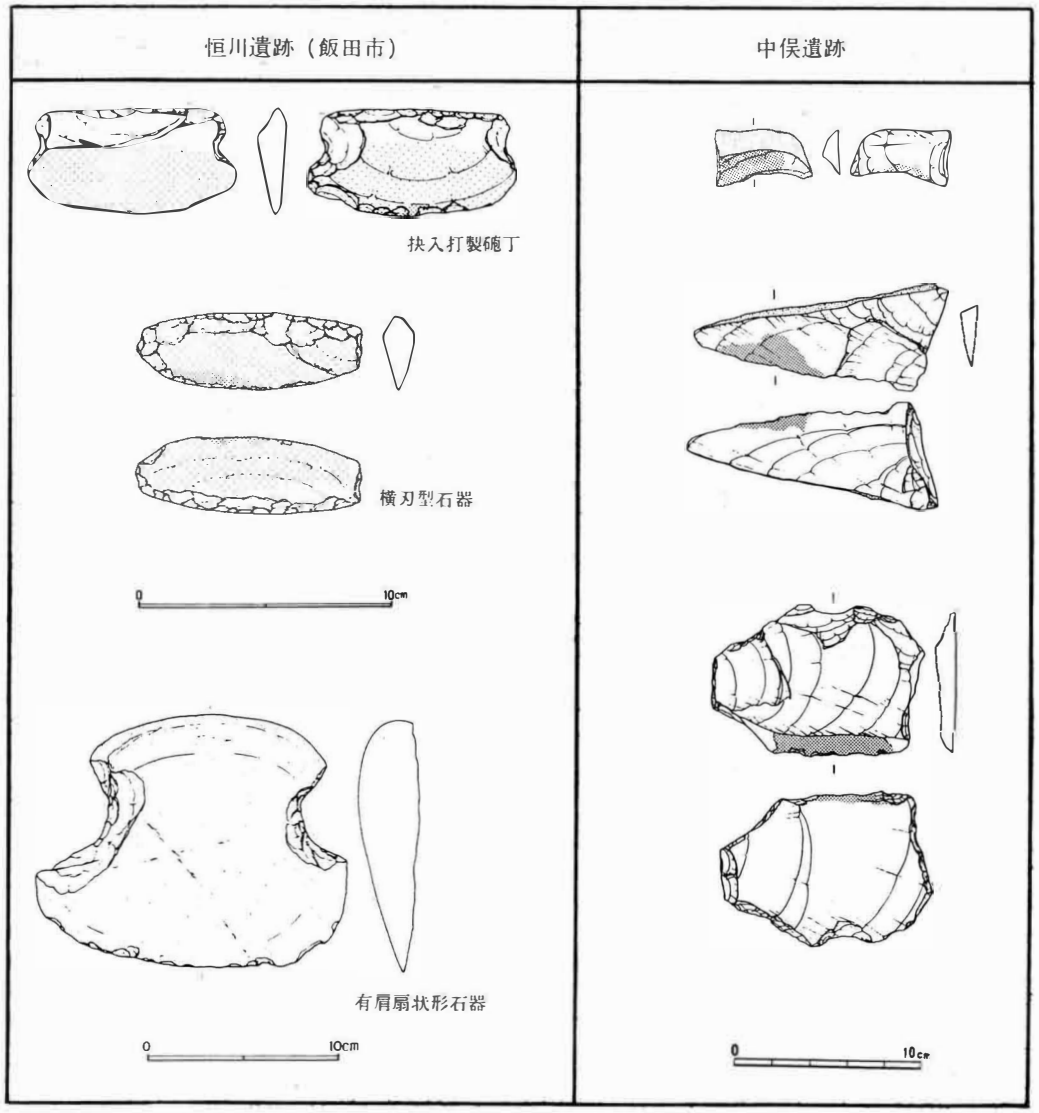
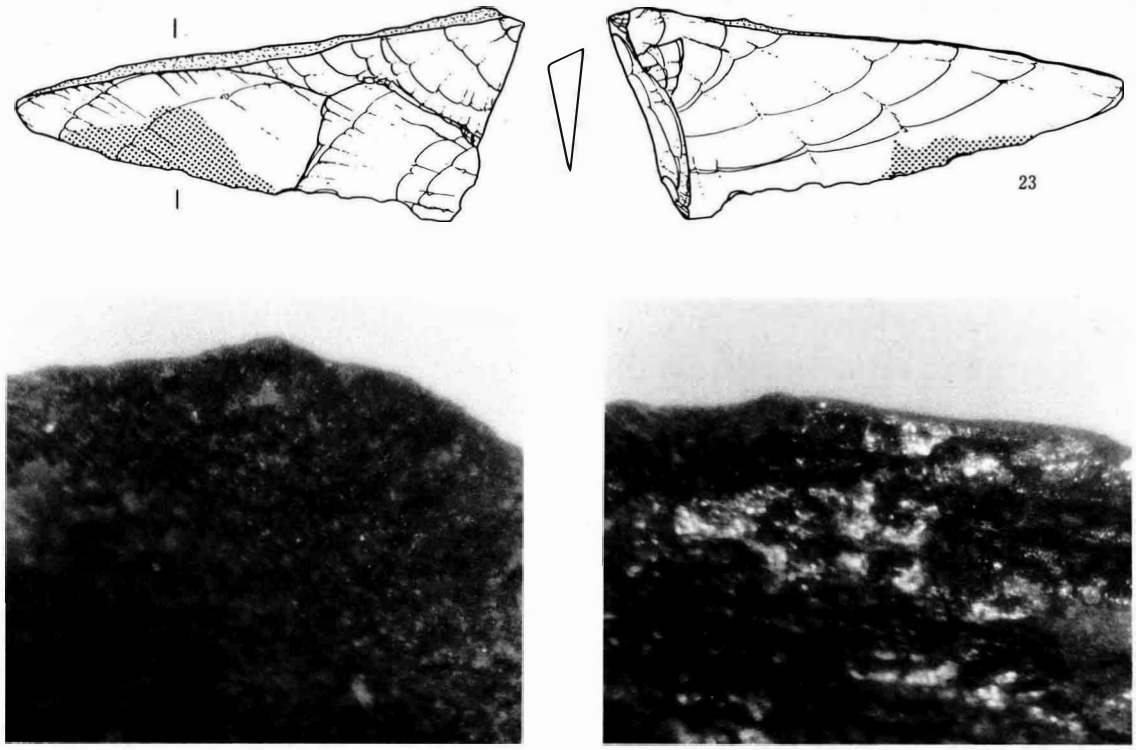


図104　光沢痕の認められる石器



光沢痕なし　　光沢痕有

図105　剝変に残された使用の有無

以上四点から、本器種は入手し易く、かつ製作し易い石材で薄く盤状の剝片を選択するもの。刃部は鋭利な一部分をこれにあて、保持・装着を考慮して、時に調整加工を施すこともあるが、基本的にはそのまま使用する道具といえる。刃部の再生が認められないことを加味すれば、一回性のもので、長期的には移動時に捨て去られる言わば「使い捨て」道具と推定できる。

最後に課題として、刃部を研ぎ直すことにより再生される磨製石庖丁との共存について、また飯田・下伊那地方に確認される抉入打製石庖丁との関係についての積極的な追求の必要性を挙げておく。

（町田　勝則）

註1　桜井　弘人　1986「2石器」『恒川遺跡群』飯田市教育委員会

2　御堂島　正　1989「有肩扇状石器の使用痕分析」『古代文化』第41巻3号

1989「抉入打製石庖丁の使用痕分析」『古代文化』第41巻6号

1989「抉入打製石庖丁の使用法」『古代文化』第41巻8号

1990「横刃型石庖丁の使用痕分析」『古代文化』第42巻1号

3　中俣遺跡の場合、素材となる剝片が剝離される以前に形成された剝離痕が大半で、剝片剝離後に目的を有して調整加工が施された資料は少ない。

4　図96恒川遺跡の石器は御堂島論文より掲載した。また中俣遺跡出土石器の使用痕写真は鶴田典昭の撮影による。

第5章　総　　括

今回の調査では遺構を中心とする精査を実施した面積は延4000㎡以上におよび、弥生時代中期から古墳時代前期を中心とするきわめて多数の遺構遺物を検出した。以下調査所見から遺跡の性格を瞥見し調査の総括とする。

遺跡の範囲については未だ明確に確定し難いが、今回の調査内容はその質・量ともに従来の認識を大きく改めさせるに十分であろう。現状では上返町から三ツ家沖地籍を中心に展開する大きな遺跡群として把握したが、遺跡範囲は千曲川に沿ってさらに北東へもしくは南西へ、大きく展開する可能性が高い。

今回の調査では古墳時代前期以降の遺構はほとんど検出しえなかったが、付近に存在する水内坐一元神社遺跡の存在を考慮するならば、古墳時代後期にまでおよぶ集落が存在する可能性も高い。

本遺跡周辺は、現状でも低湿な水田地帯が広範に展開し、また近世にいたるまで水害の常襲地帯でもあるが、広大な低湿地は初期の水稲耕作民にとっては絶好の生産域であったであろう。

弥生時代中期では、明確なものだけでも住居址19軒・土壙19基・溝址２を検出した。検出した19軒の住居址は出土土器の様相からすれば大きな時間差は看取しえず、その有する時間幅は多くとも二世代以内で把握しうるものと考える。

住居址より出土した土器は栗林式土器の後半段階に該当するもので、善光寺平にて本格的に水稲耕作が開始された時代のものといえる。これらの住居址はＢ－１・３区での遺構検出状況からも明らかなごとく、この時期に形成された集落の一部をなし、その集落規模もかなり大規模なものであったことを予想させる。

ほぼ同時期に展開する大規模集落である、千曲川下流の中野市栗林遺跡、上流の長野市松代町松原遺跡などの存在を考慮するならば、千曲川の河川交通を中心に形成された戦略的交易ネットワークに組み込まれた、一つの拠点集落として把握される可能性も高い。

弥生時代中期に形成された本遺跡の集落は、後期初頭の吉田式期に一次衰退するものの、後期中葉の箱清水式期以降再び集落が形成され、以後古墳時代前期に至るまで比較的スムーズに移行する。ただしＢ－25号住居址等の存在よりすれば、付近に後期前半期の集落が存在する可能性も考えられる。

弥生時代後期以降で特筆すべきものとしては、弥生時代終末～古墳時代初頭に比定される13号溝址とそこより出土した大量の外来系土器群であろう。本文にても述べたごとく、13号溝址は当該期の集落を区画する大規模な溝址で、覆土内より東海や北陸地方の影響を顕著に示す大量の外来系土器が出土している。さらに遺構外からの出土ではあるが畿内の布留式土器も検出されている。これらの土器群は、古墳出現前夜における活発な人々の交流を如実に語るものであり、今後善光寺平における古墳出現期の様相を追求するうえで、究めて重要な資料となろう。今回の調査では玉造関係の遺構、遺物は確認されていないが付近に存在する小島境遺跡では玉造の集落が検出されている。前述の外来系土器群と合わせ、やはり千曲川を中心とする交易活動との関連が考えられよう。

古墳時代前期以後の遺構は今回の調査では確認されていない。古墳時代前期をもって中俣遺跡の集落は一旦廃絶するが、おそらくそれ以降も付近に小規模な拠点集落が形成されているものと考えられる。

以上調査所見から本遺跡の性格について概観した。今回の調査は想定される遺跡範囲からすれば、そのごく一部に試掘坑を設定したにすぎない。本遺跡の考古学的究明はすべて今後の課題である。

最後に本遺跡の調査から整理・報告書作成にいたるまでご指導・ご協力を賜った関係者各位に心から感謝申し上げ調査の総括としたい。

図版 1

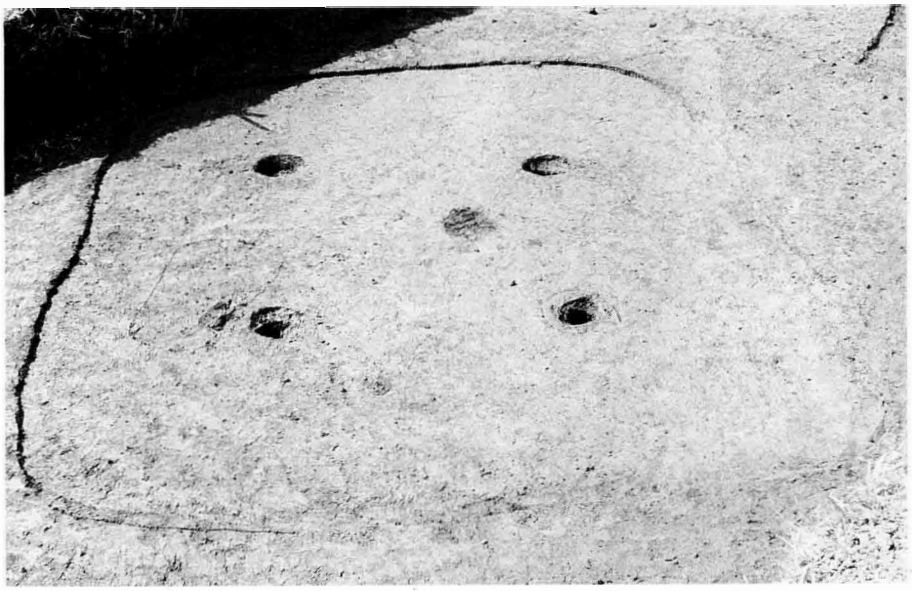
A区 1 号住居址

A区 2 号住居址

A区 3 号住居址

A 区 4 号住居址

A 区 5 号住居址

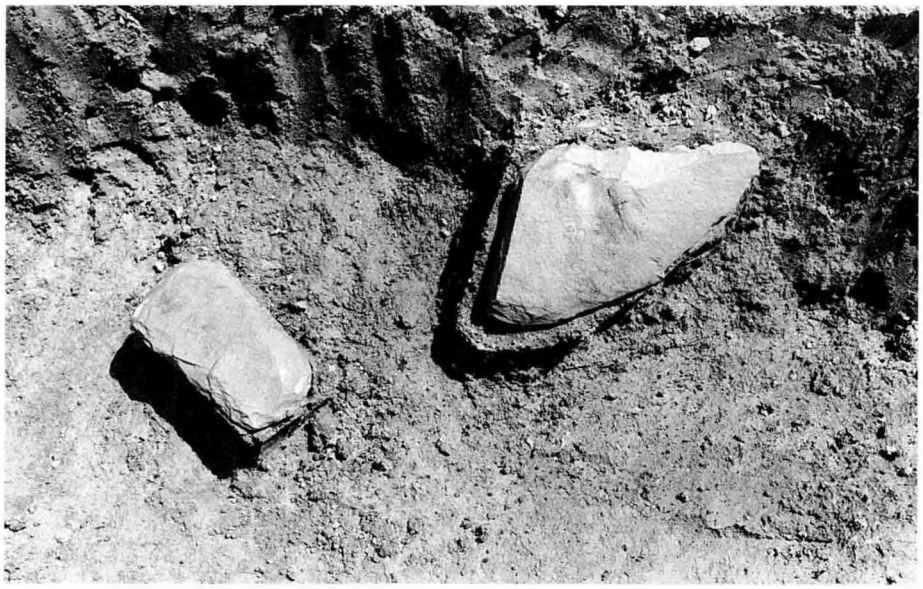


A区15号土坑

図版 3

B区 2 号住居址

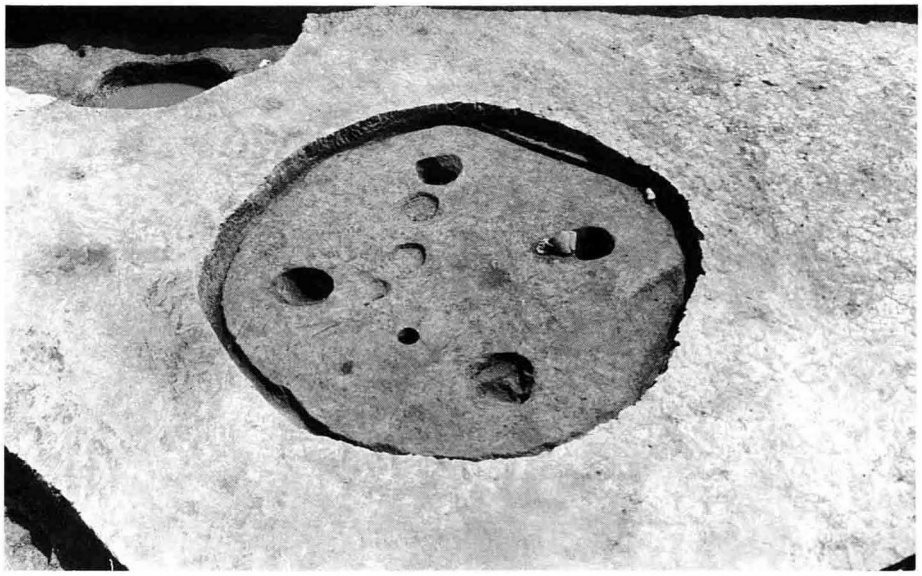
B区 4 号住居址



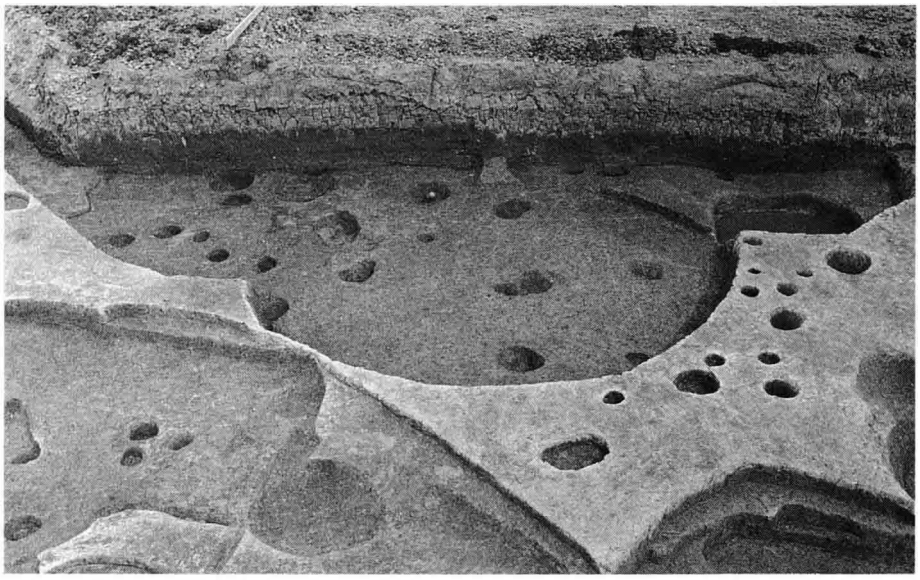
B区 4 号住居址
遺物出土状況

B区 7 号住居址

B区 9 号住居址



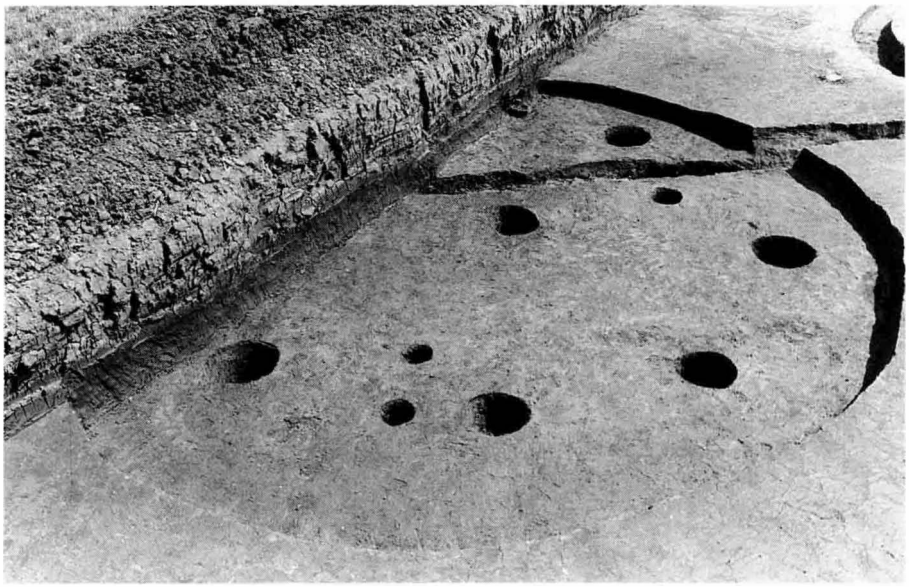
B区 7 号・ 8 号・18 号
住居址



図版 5

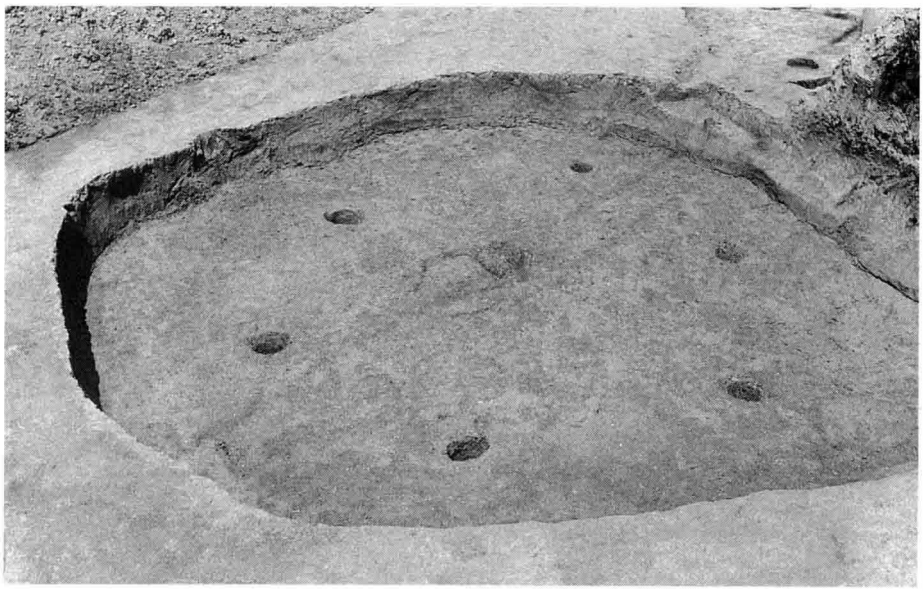
B区13号住居址

B区14号住居址



B区19号住居址

B区20号住居址

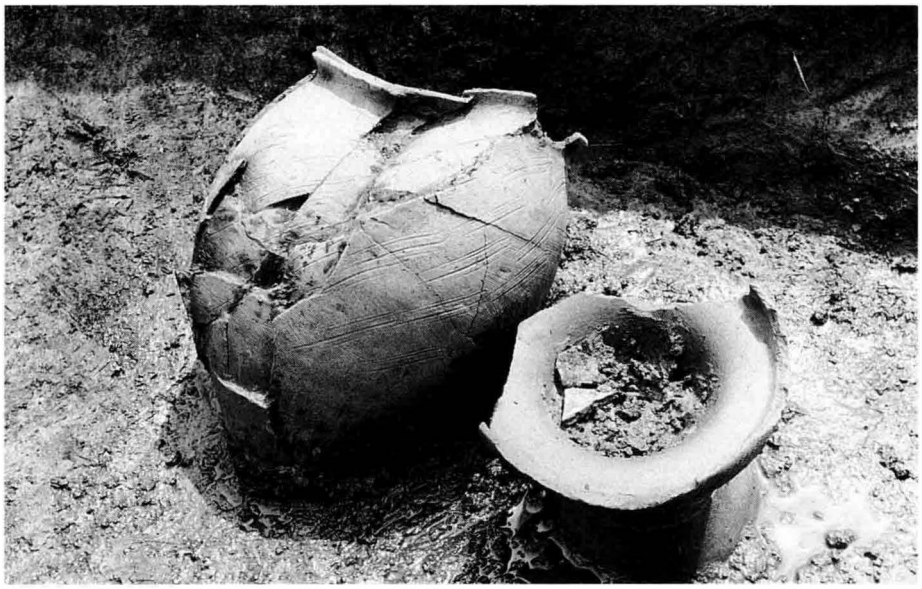


B区20号住居址
土器出土状況

B区20号住居址
土器出土状況

図版 7

B区20号住居址
床面土器出土状況



B区20号住居址
床面土器出土状況

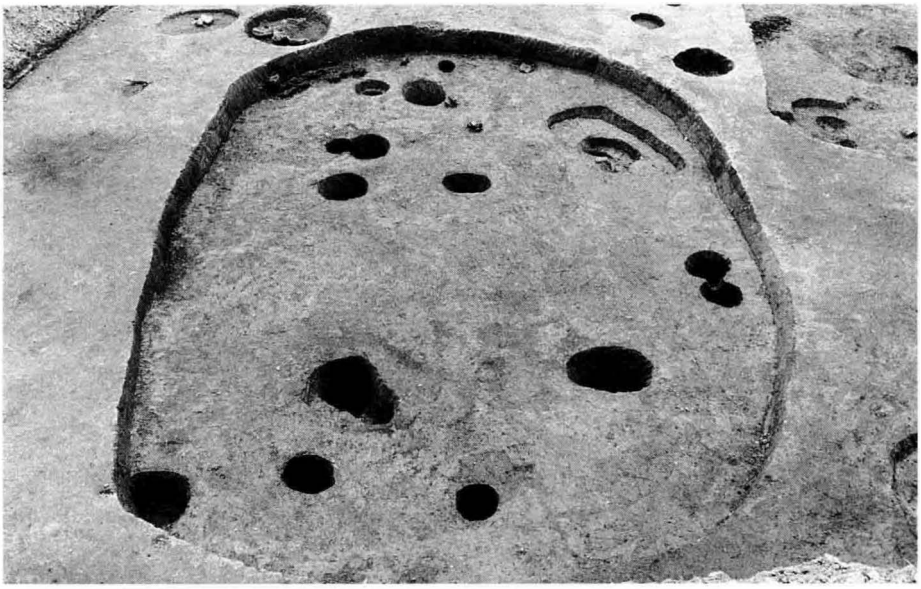
B区20号住居址
床面土器出土状況

B区27号住居址
炭化材・土器出土状況

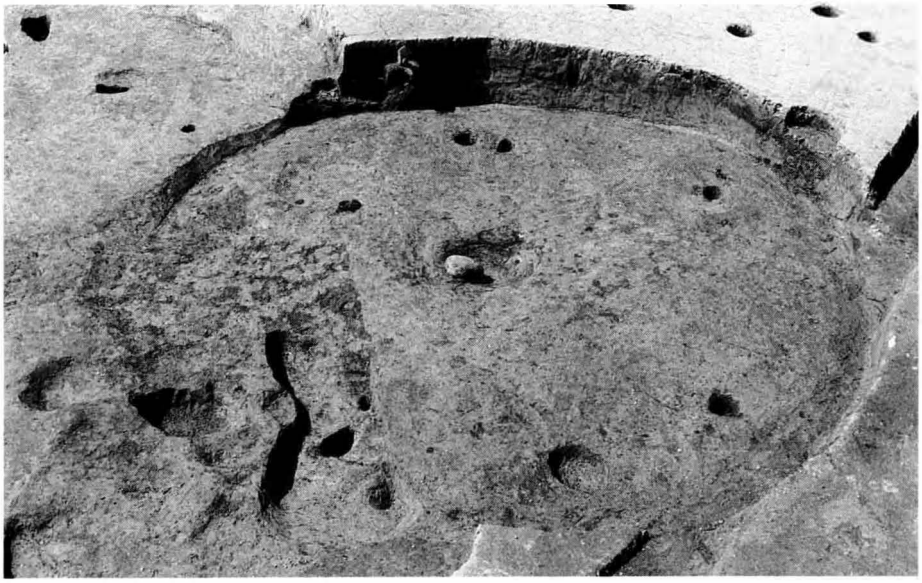
B区27号住居址
土器出土状況

B区27号住居址

図版 9



B 区2号下尺、住居址



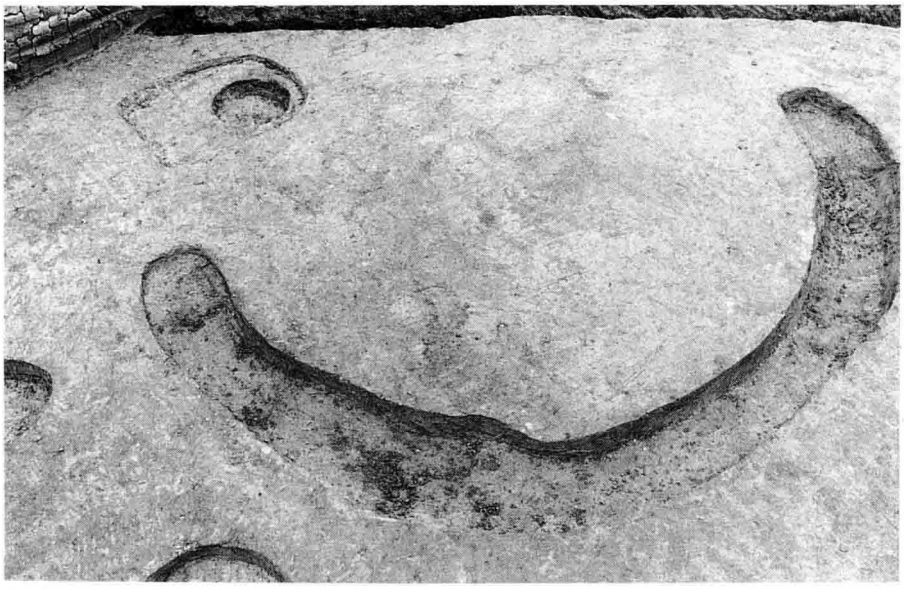
B 区32号住居址

B 区33号住居址

B区36号住居址

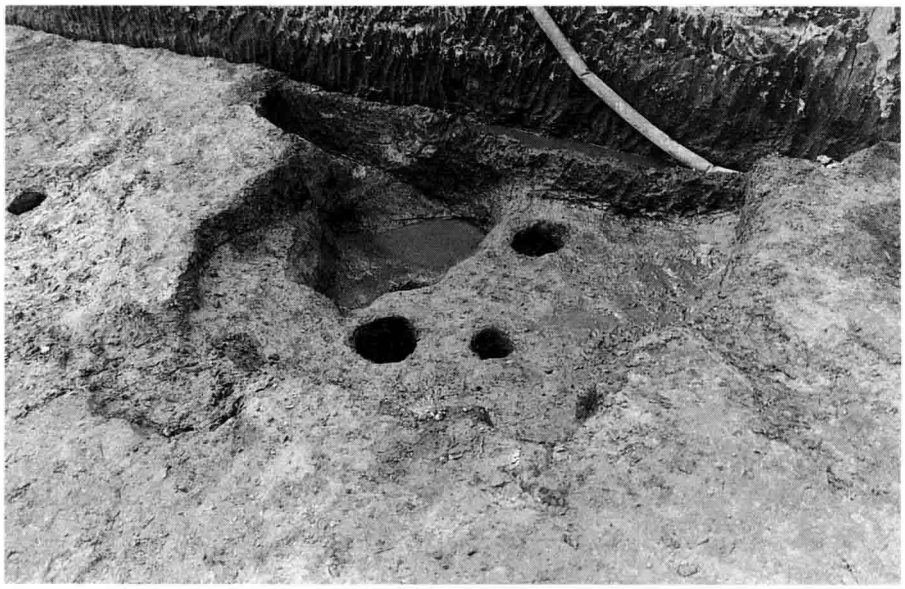
B区54号住居址

B区10号溝址

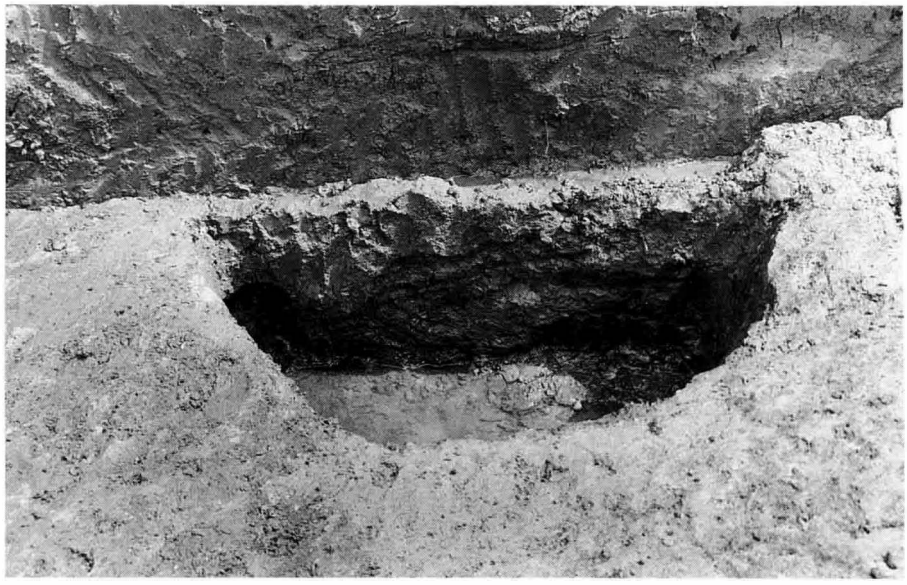


図版11

B区10号溝址
土器出土状況

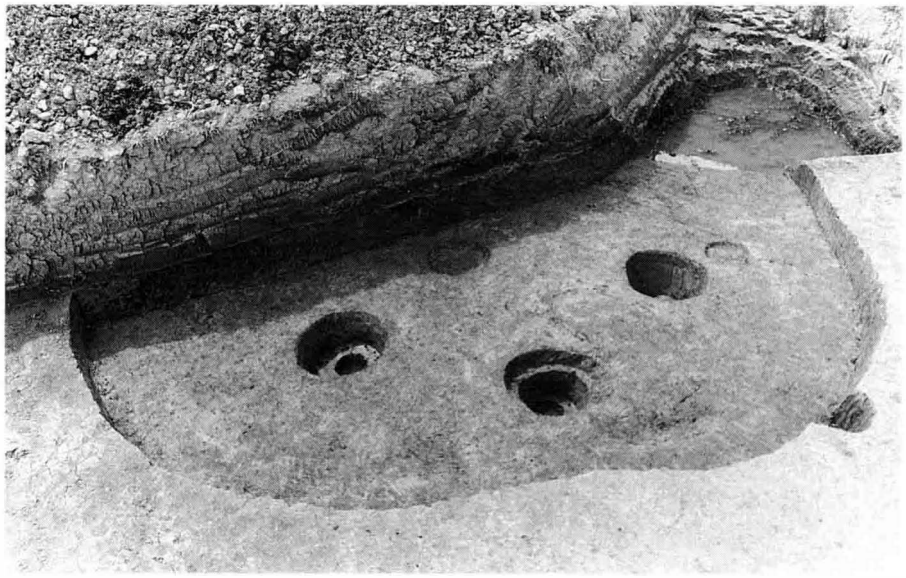


B区57号土坑



B区58号土坑

B区22号住居址



B区22号住居址
柱穴内土器出土状況

B区24、25号住居址

図版13

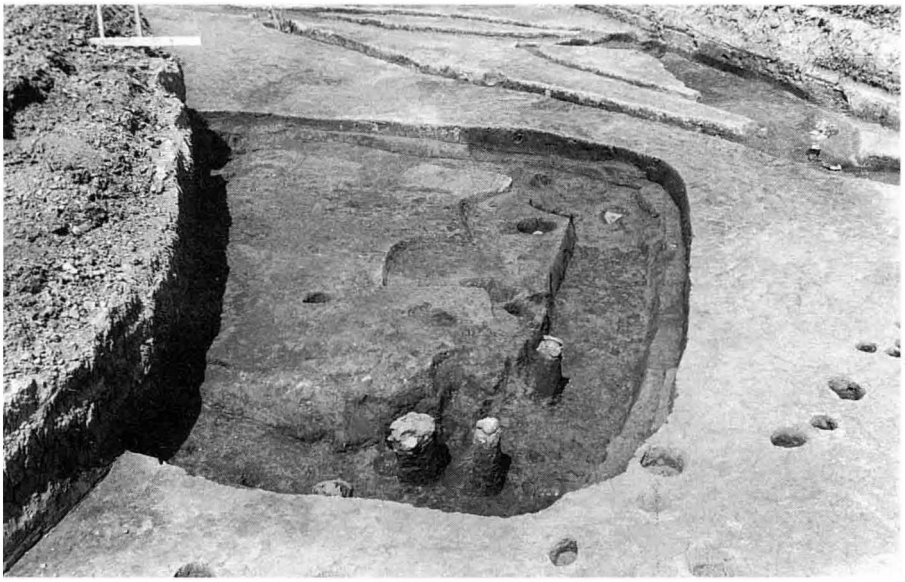
B区37号住居址

B区42号住居址

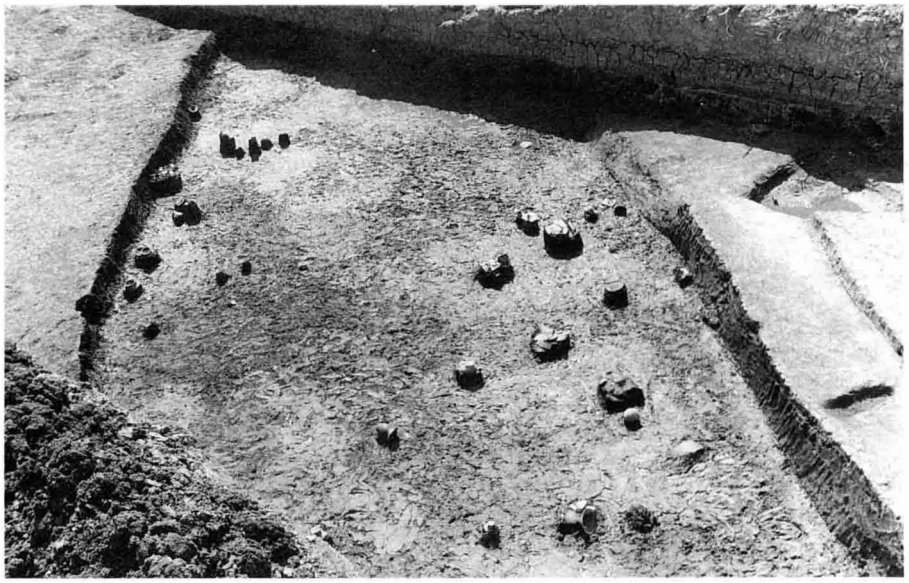
B区5号住居址

B区29号住居址

B区31号住居址



B区13号溝址



図版15

B区13号溝址
土器出土状況

B区14号溝址

B区60号土坑

B—3地区

B—3地区

B—3地区

図版17

B—4 地区

B—5 地区

B—5 地区

中俣Ⅲ
遺構掘り下げ

中俣Ⅲ
遺構掘り下げ

20

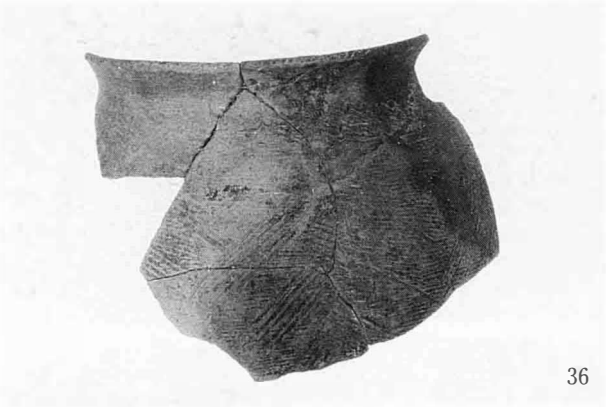
21

27

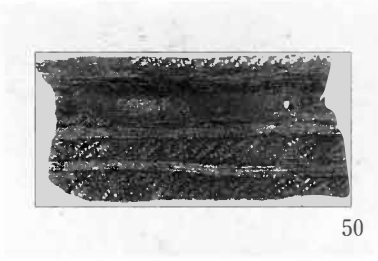
24

28

29


36

38


50

49

43

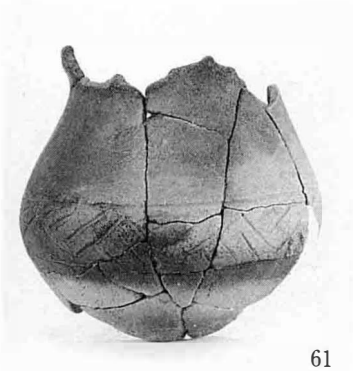
51

52

60

66

68

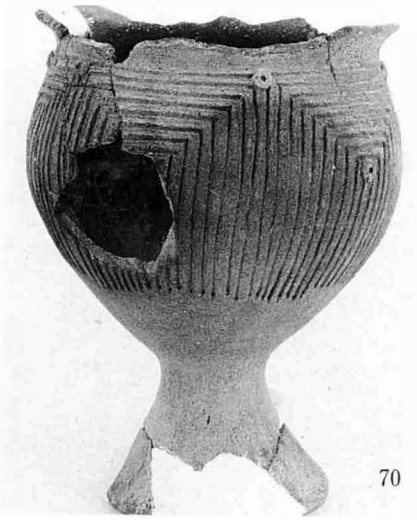

61

67

69

63

64


70

71

72

62

73

81

82

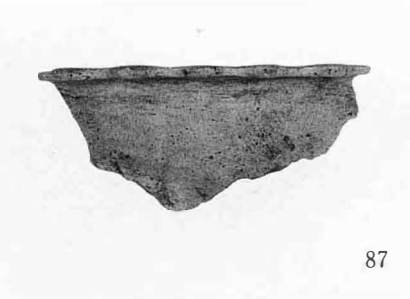
74

76

77

77

85


87

88

89

91

92

95

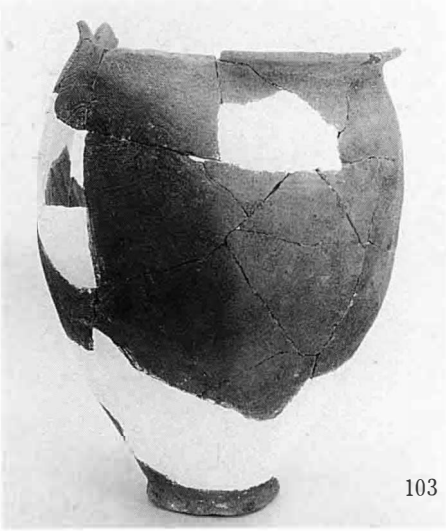
98

107

106

105

104


103

114

108

112

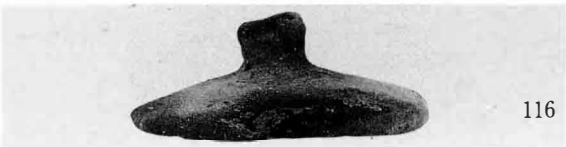
109

111

113

110

115


116

120

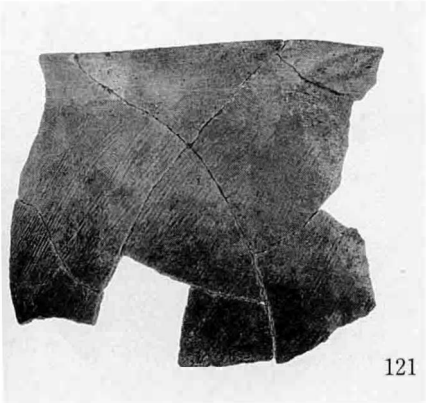
119

118

101

117

102

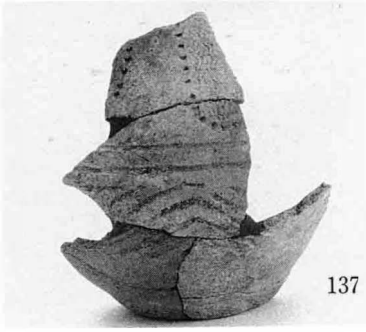

121

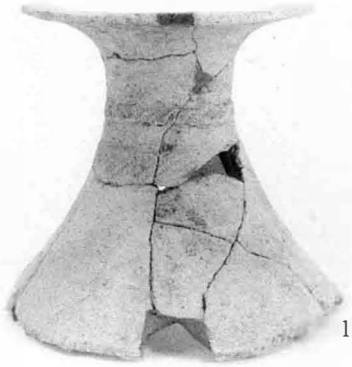
127

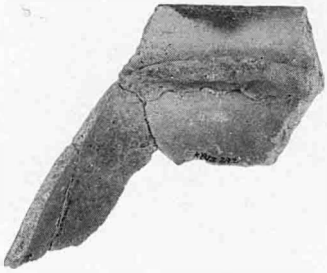
128

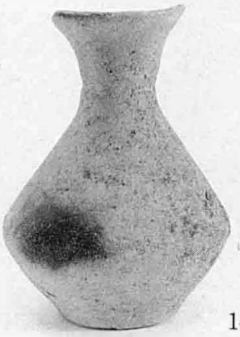
134

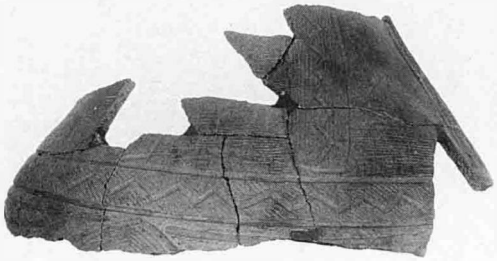
130


137


135


144


145

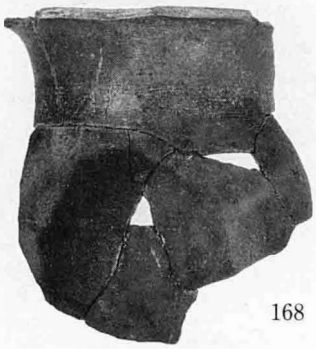

154

156

159

157

167


168

170

174

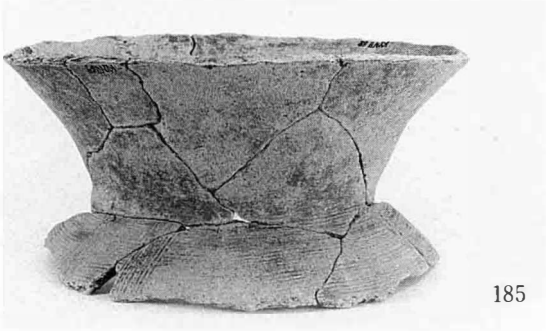
175

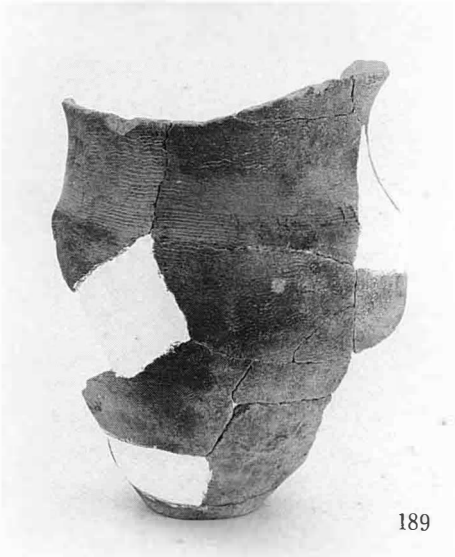
180

181

176

184


185


189

190

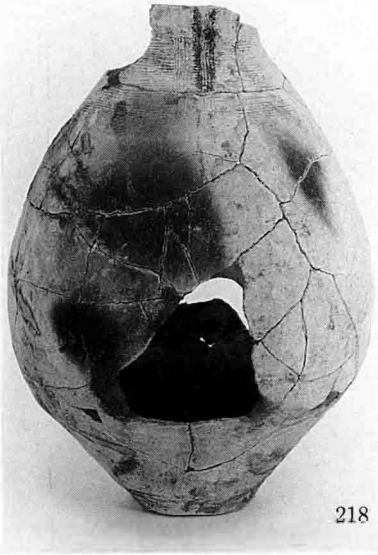
204

205

196

216

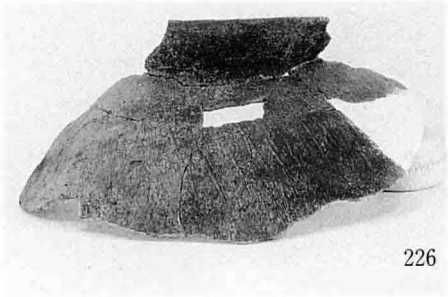
図版27


218

219

223

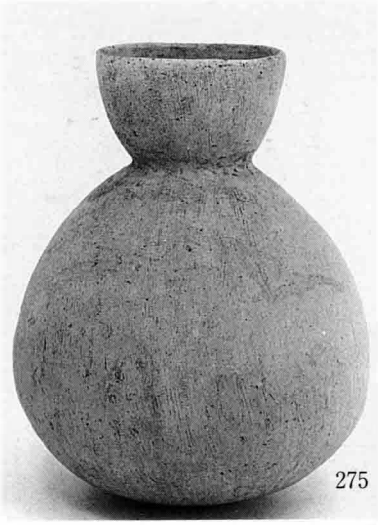
228

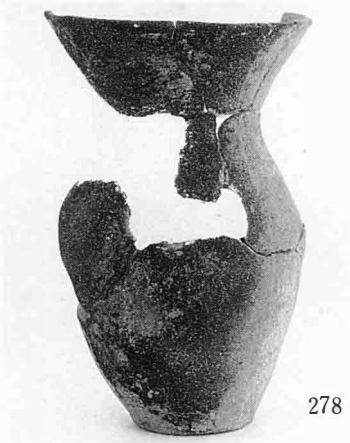

226

263

262

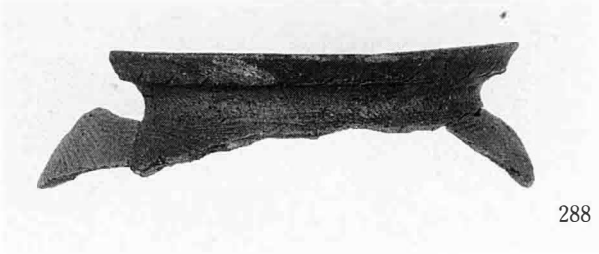
258

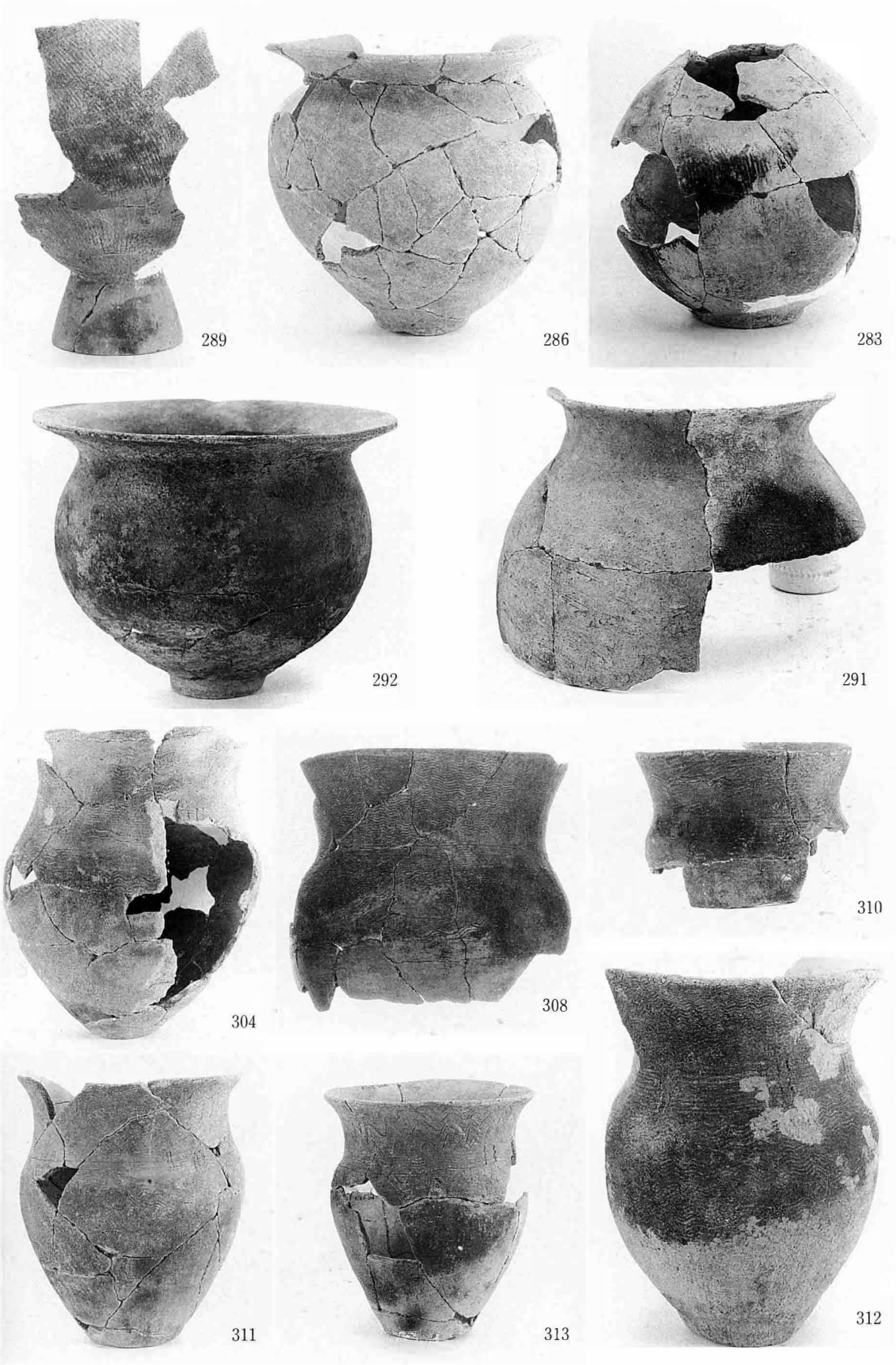

275


278

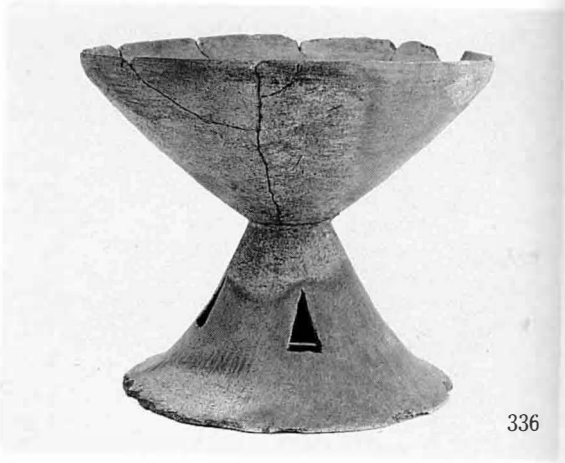
284

277


288


289
286
283
292
291
304
308
310
311
313
312

335


336

355

315

333

337

330

332

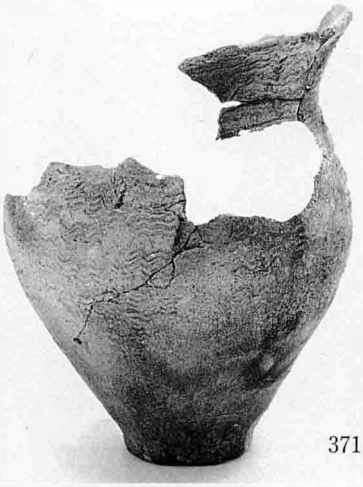
331

364

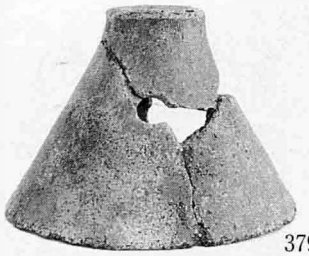
365

374

385


371

384


379

386

381

383

390

398

402

406

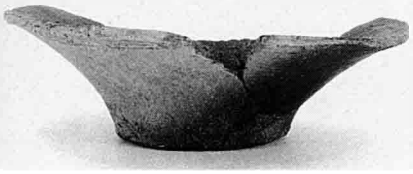
407

408

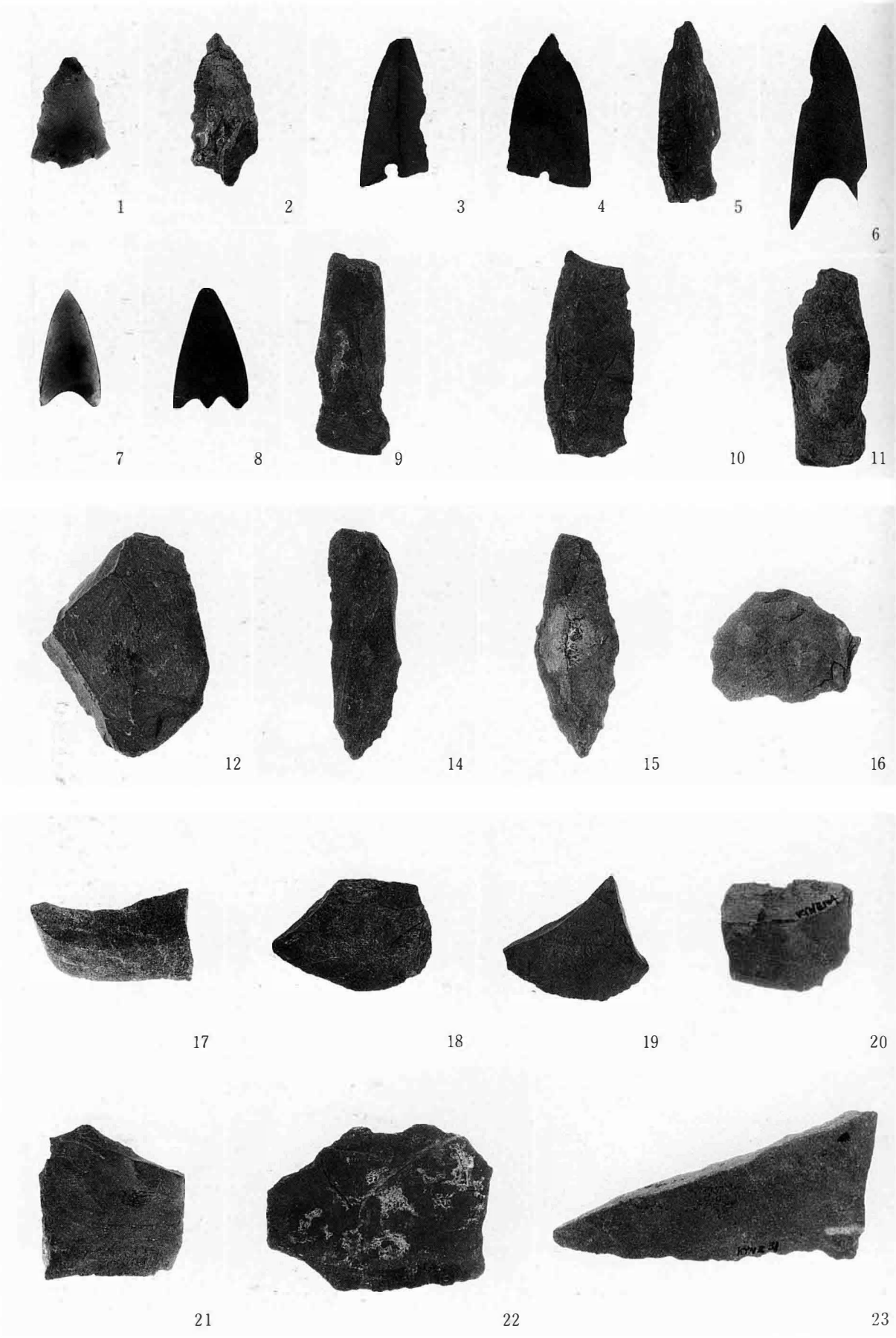
413

417

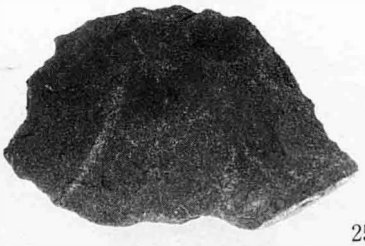
418


414

419

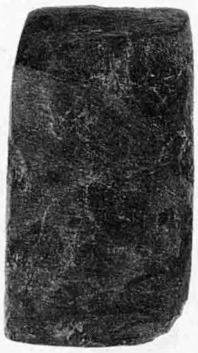

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23

24


25

27

28


29

30

31

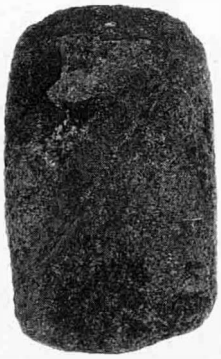
32

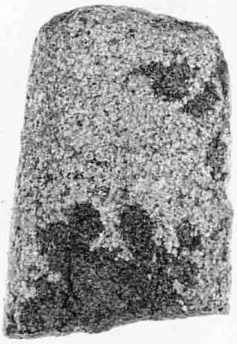
33

34

35

43


52


53

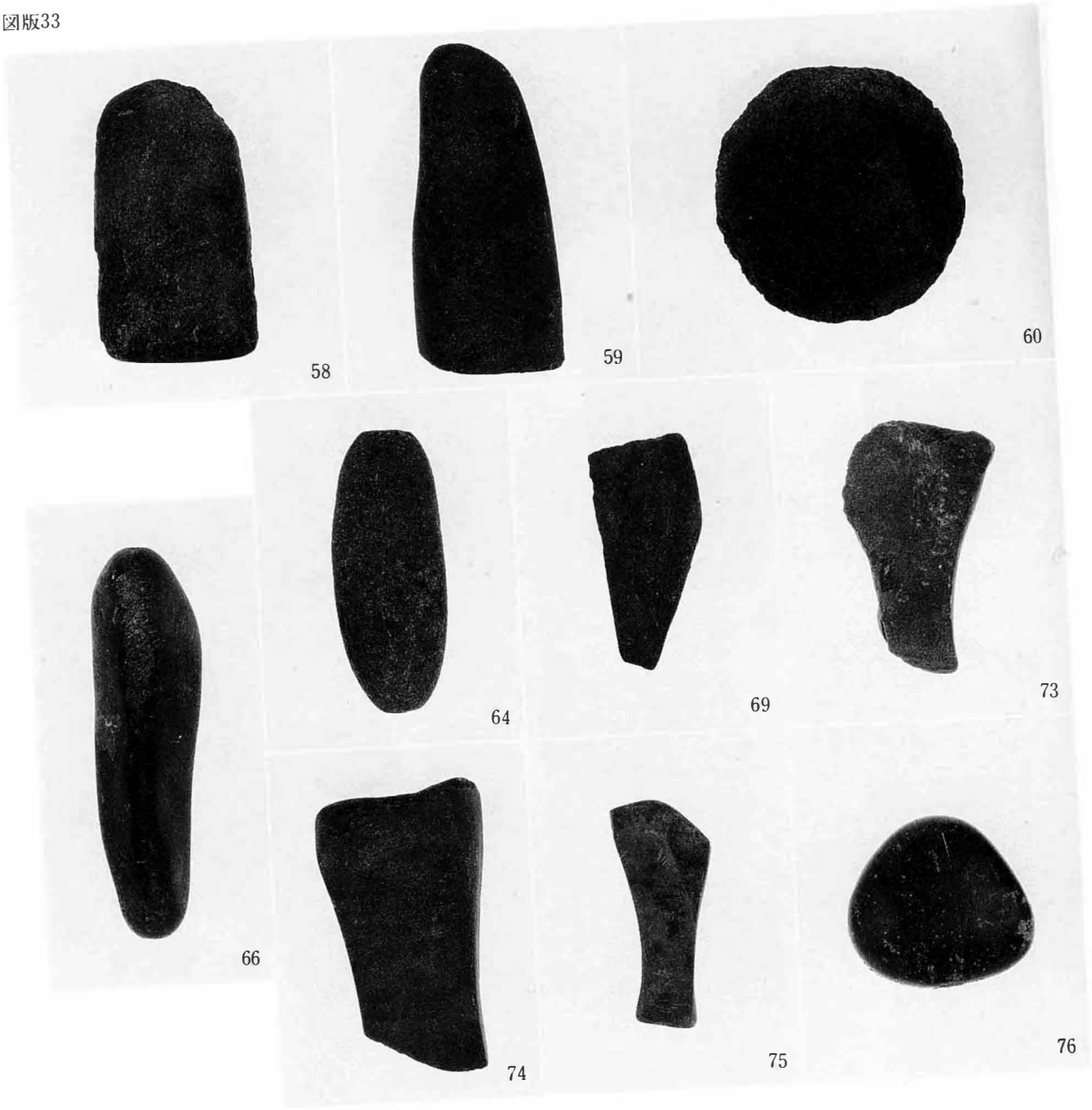
54

55

56

57

図版33



浅川扇状地遺跡群

押　鐘　遺　跡

1991．3
長野市教育委員会

例　　言

1　本書は長野市吉田２丁目における宅地開発事業にともない実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　調査は傳田博司（長野市大字富田607－１）の委託を受けて、長野市教育委員会が実施した。

3　調査地は長野市大字吉田２丁目238－１外の地籍に存在するが遺跡名は字名変更以前の通称より浅川扇状地遺跡群押鐘遺跡とした。

4　調査によって得られた諸資料は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）で保管している。出土遺物の注記記号は「浅川扇状地遺跡群押鐘遺跡」の各頭文字をとって『ＡＯＫ』と表記してある。

5　本書は調査によって確認検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点を置いた。資料掲載の要領は下記の通りである。

・資料は検出されたものの中から時期の明確に把握しうるものを中心に掲載した。

・遺構の測量は㈲写真測図研究所に委託し、コーディックシステムにより１：20の縮尺で基本原図を作成し、本書では基本的に１：60の縮尺に統一してある。

・遺構番号は調査時の仮番号をそのまま用いた。

・遺物実測図に関しては、土器１：４・石製品１：２・土器拓影１：３の縮尺に統一してある。

目　　次

第１章　　調査経過
　１　調査に至る経過……1
　２　調査体制……1
　３　調査の方法……2

第２章　　調査地周辺の考古学的環境……6

第３章　　調査……7
　１　調査概要……7
　２　調査……7
　３　総括……9

挿　図　目　次

図１　調査地ならびに周辺の遺跡（１：10,000）
図２　調査地ならびに周辺の遺跡（１：2,000）
図３　造成計画平面図ならびに調査地位置図
図４　調査地全側図
図５　１号住居址実測図
図６　遺構実測図
図７　出土遺物実測図

第1章　調査経過

1　調査に至る経過

平成２年夏、傳田博司（長野市大字富田607－１）は長野市大字吉田２丁目238－１外地籍の農地に、約3,750㎡にわたる宅地造成事業を計画した。

事業予定地は長野市内でも有数の規模を誇る「浅川扇状地遺跡群」の周知の範囲内に位置し、土器片等の散布も認められたために長野市埋蔵文化財センターは、同予定地内における埋蔵文化財の有無を確認するために試掘調査を実施することとした。

試掘調査は平成２年10月６日に実施し、試掘坑を事業予定位置内の任意の地点に２箇所設定した。その結果両地点においてかなりの量の遺物ならびに遺構らしき黒色土の落ち込みを確認した。

この試掘調査の結果をもとに、長野市埋蔵文化財センターでは施行に先立って発掘調査による記録保存の必要性を認め、平成２年11月15日より発掘調査に着手する運びとなった。

調査は施行によって直接遺構面にまで掘削がおよび埋蔵文化財の破壊されることが予想され、道路造成部分約330㎡について実施した。

なお本遺跡は，前述のとおり周知の「浅川扇状地遺跡群」の範囲内に位置し、その名称については「浅川扇状地遺跡群　押鐘遺跡」として報告する。しかし今回の調査はあくまで試掘調査的な性格のもので，今後の調査による遺跡範囲・遺跡の性格等の明瞭化にともないその名称については改めて検討する必要が認められる点指摘しておく。

2　調査体制

調査主体者　長野市教育委員会教育長　奥村秀雄
総括責任者　市埋蔵文化財センター所長　水沢国男
庶　務　係　〃　主幹　小山　正
〃　職員　青木厚子
調　査　係　〃　調査係長　矢口忠良
〃　主事　青木和明
〃　主事　千野　浩
〃　主事　飯島哲也
〃　専門員　中殿章子
〃　専門員　横山かよ子
〃　専門主事　小松安和
〃　専門主事　中沢克己
〃　専門主事　大室　昂
〃　職員　今井悦子

調査員　寺島孝典　矢口栄子　小林伸子

参加者　柄沢清志　神頭幸雄　金子麻子　金子ゆき　小林志げる　佐藤君江　佐藤幸子　佐藤幸　佐藤はま　佐藤ひで子　中山やす子　成田敦子　横山ふじ江　新津三千子　成田幸子　新津照子　美谷島昇　長原亀雄　小林さと　宮沢けさよ　両角吉之丞　川島邦子　田中重二郎　横山はつ子　荒井久子　成田幸子　金子房吉　丸山律子　宮沢芳美　横山百代　中条くら子　原光雄

整理参加者　西尾千枝　向山純子

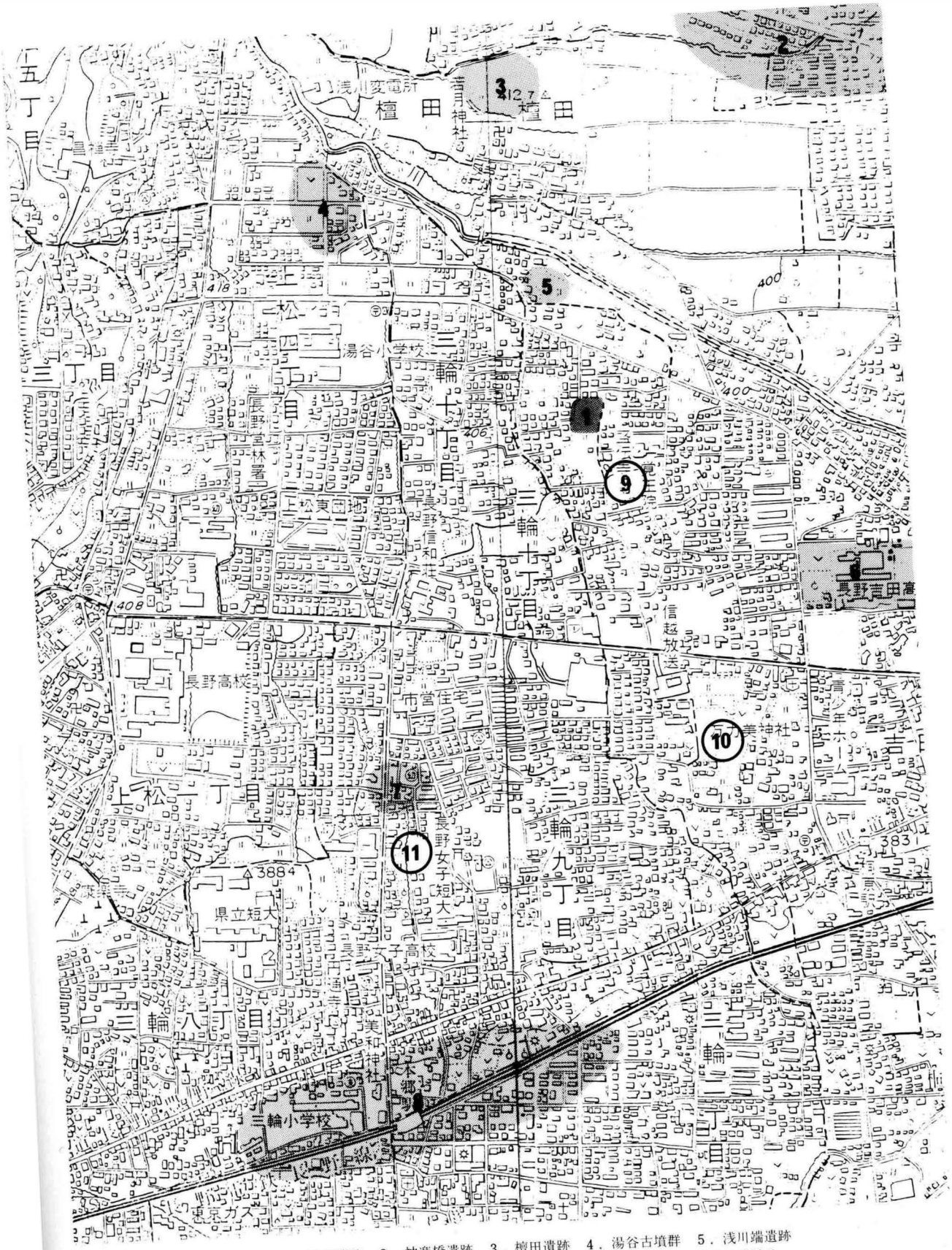
3　調査方法

試掘調査は事業予定地内の任意の地点に２箇所、長さ約２ｍ・幅約１ｍの試掘坑を設定し掘削にはバックホーを援用した。結果は両地点において現地表下0.50～0.60ｍほどのところに、遺物包含層ならびに遺構面を確認した。よって事業予定地のうち、遺構面にまで掘削がおよび破壊されることが予想される道路造成部分約330㎡について、発掘調査による記録保存の必要性を確認するに至った。

調査区の表土除去に当たっては、試掘調査の結果に基づきバックホーを援用した。遺物包含層および遺構検出作業の際に出土した遺物については「検出面出土遺物」として採取し、遺構検出の後、覆土内出土の遺物は覆土上位・中位・下位・床面直上と出土位置ごとに一括して採取した。遺構内遺物のうち主要なものに関しては写真撮影の後、測量により位置・レベル等を記録した。写真撮影は各遺構ごとに遺物検出状況・掘り上がり状況・遺構内細部について実施した。

検出された遺構の測量は、㈲写真測図研究所に委託し、コーディックシステムにより１：20の縮尺で基本原図を作成した。また詳細を必要とするものに関しては、簡易的な遣り方測量により１：10の縮尺で基本原図を作成した。

現地における発掘作業は平成２年11月15日から22日まで実施しその後平成３年３月31日まで室内にて整理作業を行った。



1．押鐘遺跡　2．神楽橋遺跡　3．檀田遺跡　4．湯谷古墳群　5．浅川端遺跡
6．吉田高校グランド遺跡　7．下宇木遺跡　8．三輪遺跡　9．盛伝寺居館址
10．押鐘城址　11．相ノ木城址

図1　調査地ならびに周辺の遺跡（1：10,000）

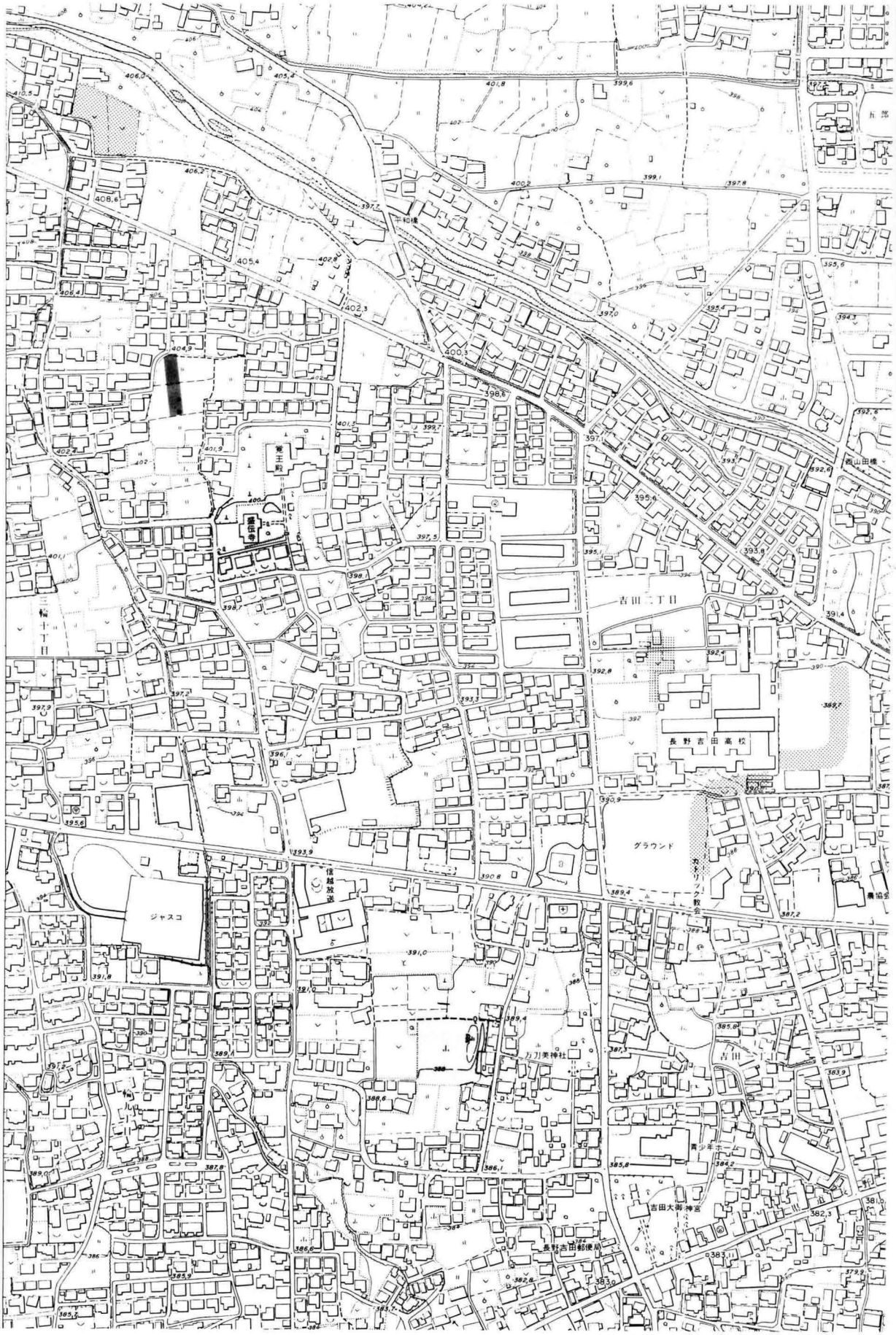


図２　調査地ならびに周辺の遺跡（１：2,000）

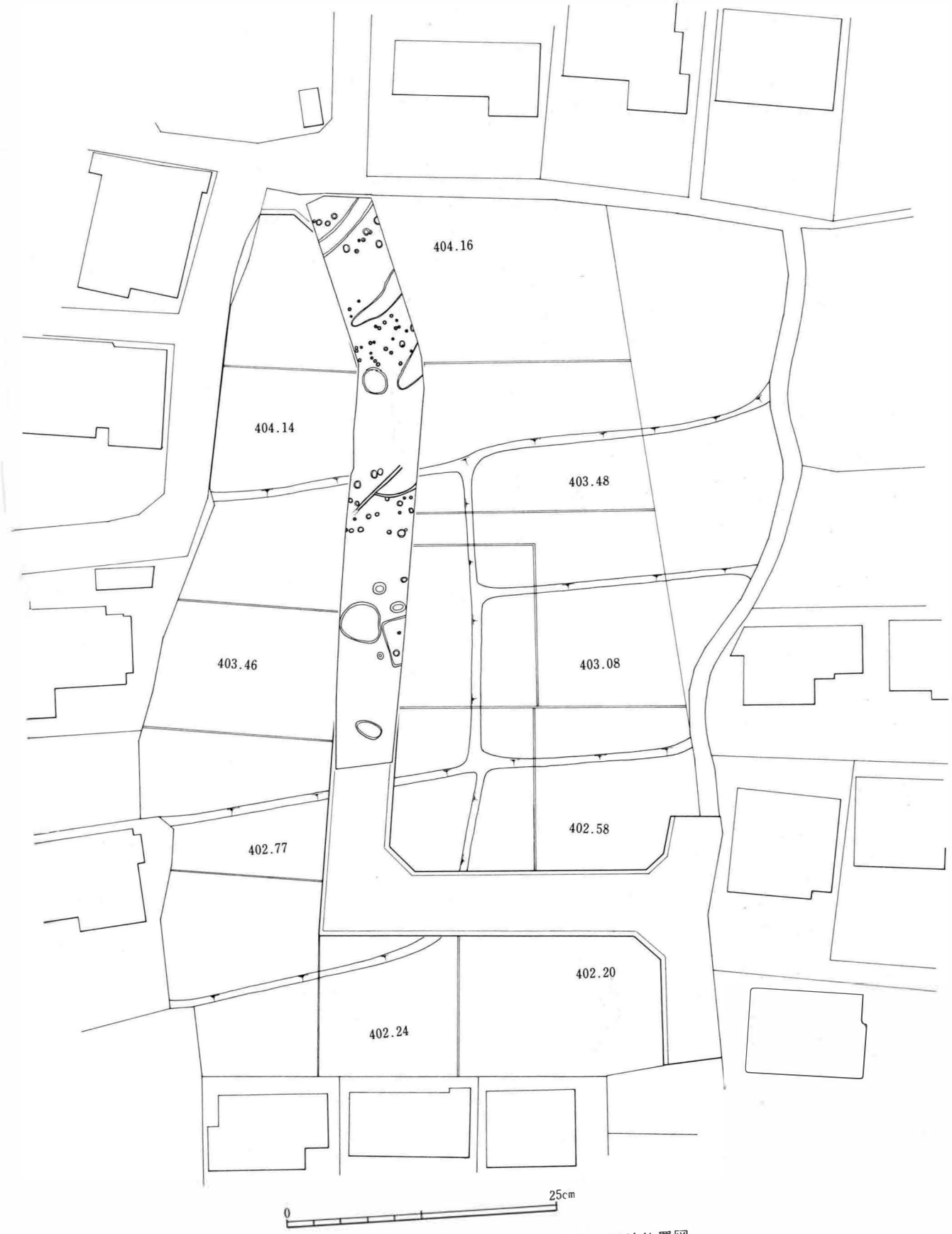


図3　造成計画平面図ならびに調査地位置図

第２章　調査地周辺の考古学的環境

飯綱山を水源とする浅川は山間部を侵食流下した後、浅川東条地籍の通称浅川原口を谷口として盆地に流入し、東南方向を主軸とした平均斜度１／45を計測する典型的な扇状地を形成する。この扇状地上に多くの遺跡が存在し、長野市内でも有数の規模を誇る「浅川扇状地遺跡群」として把握されている。今回の調査地点も浅川扇状地扇央付近に位置し同遺跡群の周知の範囲内に位置する。以下浅川扇状地遺跡群の代表的な遺跡について概説し、周辺の考古学的環境としたい。

旧石器時代は、浅川源流に近い猫又池・大池に遺跡が確認されているが扇状地上にはその存在は確認されていない。

続く縄文時代には、湯谷・赤萱平・刈田・牟礼バイパスＡ地点・徳間榎木田・浅川端の各遺跡が確認されている。これらはともに駒沢川と、浅川流域に集中する傾向が認められ、正式調査を受けた遺跡としては前者に牟礼バイパスＡ地点遺跡、後者に浅川端遺跡がある。牟礼バイパスＡ地点遺跡では前期前葉の住居址１軒、浅川端遺跡では同じく前期前葉の住居址１軒、土壙１基が検出されている。

浅川扇状地の本格的な開発は次ぎの弥生時代から始まったものといえる。主要な遺跡には徳間小学校遺跡・牟礼バイパスＤ地点遺跡・神楽橋遺跡・浅川端遺跡・吉田高校グランド遺跡等がある。徳間小学校遺跡では中期終末の住居址２軒が検出されているが、近年周辺が土地区画整理事業に伴って調査され、同時期の集落が数箇所検出されている。牟礼バイパスＤ地点遺跡では中期栗林式器の住居址４軒・土壙１基、浅川端遺跡では同時期の住居址２軒・土器集積１が検出されているがともに従来不明瞭であった栗林式前葉のもので、良好な資料といえよう。吉田高校グランド遺跡は後期初頭吉田式土器の標識遺跡で、特に第３次調査では住居址10軒からなる当該期の単一集落が良好な状態で検出されている。浅川扇状地状にて検出された上記の諸遺跡はいずれも中期～後期初頭に限られ、後期後半の箱清水式期の遺跡はその存在が希薄であり、少なくとも現状では中期～後期初頭の大規模集落と箱清水式期の大規模集落とが分布上一致することはない。この状況が善光寺平の他の地域にもそのままあてはまるか否かは不明であるが、その背後には生産もしくは生活様式の差異といった根本的な要因が認められる可能性もあり今後の重要な検討課題である。

古墳時代に入り浅川扇状地を特徴付けるのは中期集落の展開であろう。有名な駒沢祭祀遺跡をはじめとして、近年牟礼バイパスＢ地点遺跡・下宇木遺跡など良好な集落遺跡の検出例が増えており、その集中度は善光寺平の中でも特異である。さらにこれらの諸遺跡では陶邑編年Ｉ型式２段階～４段階に対応すると考えられる古手の須恵器が比較的集中して出土する傾向が顕著であり、この点も善光寺平の中では特徴的である。犀川以北の盟主的な古墳群である地附山古墳群の保有した多量の須恵器の存在を合わせ考えるとき、当該期における浅川扇状地の重要性がにわかにクローズアップされてこよう。

古墳時代後期～平安時代にかけては比較的継続して集落が展開する。浅川西条遺跡・牟礼バイパスＢ・Ｃ・Ｄ地点、三輪遺跡などが代表的な遺跡といえよう。ただし大規模集落が長期間にわたって同一箇所に存在するのではなく、時期ごとに立地を異にしつつ中核的な集落が形成されている可能性が高い。

また平安時代末期にはこの地域に信濃28牧のうちの吉田牧が設けられており、駒弓・桐原牧神社や駒沢などはその名残と考えられ、広大な扇状地は好適な放牧地であったと考えられる。

中世にはこの地域は若槻庄の領域となり、若槻里城をはじめ本堀・押鐘・桐原・相ノ木・平林・和田などの城館址が存在する。

第3章　調　　査

1　調査概要

前述のごとく調査は道路造成部分約330㎡について実施したものであり、その性格はあくまで試掘調査的なものである。

調査の結果住居址1軒・溝址4・土壙6基を確認した。時期的には平安時代のものが主体を占めるが、弥生時代後期ならびに中世の遺物も出土しており、本遺跡の複雑な様相を物語っている。

調査の基本的な土層堆積は以下の5層が認められた。

1層：暗青灰色粘質土（水田耕土）

2層：明茶褐色粘質土

3層：暗灰褐色粘質土（炭化物・土器混）

4層：暗灰褐色粘質土（炭化物・土器混）

5層：明茶褐色粘質土

包含層ととらえられるのは3・4層で漸移的な変化を示し、5層は地山と考えられる。今回の調査区以南にも道路造成部分は存在するが、試掘の結果遺物包含層は存在せず地形的にもかなり落ち込むため埋蔵文化財の包蔵はないものと判断し調査区からは除外した。

次に遺跡の範囲についてであるが、調査地周辺は既に宅地が密集した状態で分布調査等による確認は不可能であり、その範囲を明確にすることはなしえない。

ただし本調査地より北東約200mの位置にある浅川端遺跡の存在を考慮するならば、浅川右岸に展開する比較的大規模な集落址との位置付けもなしうる。

2　調査

1号住居址　（図5・7）

調査地南側から検出されたもので今回の調査にて検出された唯一の住居址である。東側⅓程が調査区外となり詳細は不明であるが一辺4.30mの隅丸方形プランが予想される。床面は中央付近がやや固く締まっていたが壁際は軟弱で不明瞭なものとなる。壁高は北壁13cm・西壁8cm・南壁9cmで確認面からの掘り込みは平均10cm前後である。柱穴が2本検出されている。深さはP1－27cm・P2－29cmと共に深いが主柱穴配置は不明である。その他かまど等の施設は検出されていない。7図(1)の高坏破片は覆土内より検出されたものだが本住居に直接伴うものではない。覆土内より他に図示しえないがかなりの土師器破片が出土しており、それよ

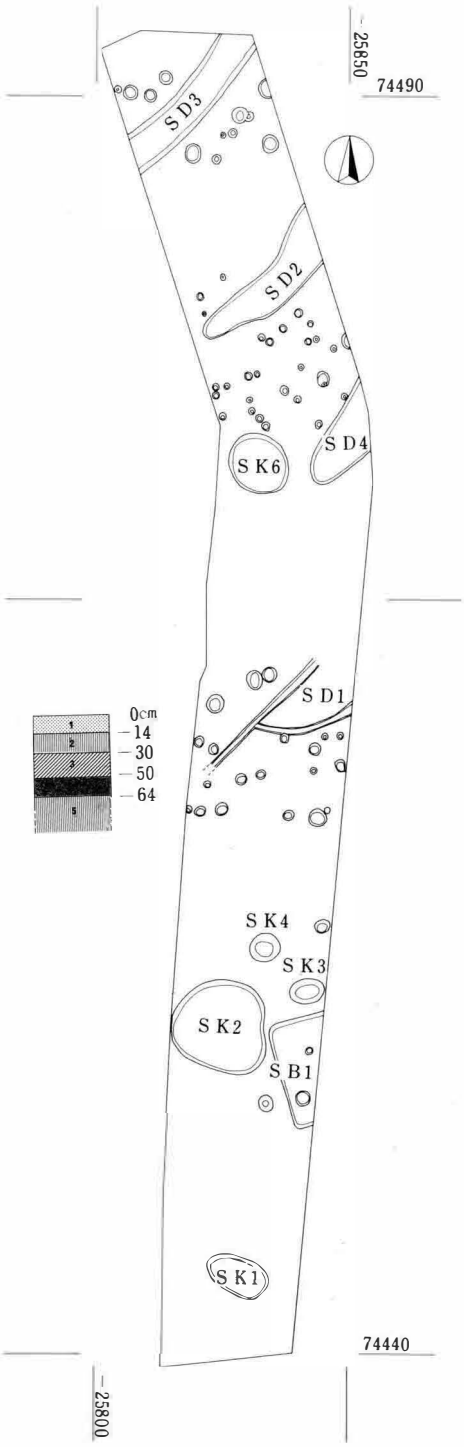


図4　調査地全測図